第２節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

１.農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査

調査地区　吉田構内S-20　　**調査面積**　約36㎡

調査期間　平成18年４月24日～28日　　**調査担当**　横山成己

調査結果

（１）調査の経緯（図４、写真７・８）

山口大学吉田構内南東端部に所在する農学部附属家畜病院[註1]南面に新規建物を増設する計画が持ち上がったことを受け、工事予定地の南端部を対象として呼び発掘調査を実施することとなった。

調査対象地は、吉田構内の南東にそびえる今山から北西に向かい舌状に派生する低丘陵上に立地する。大学移転前は一帯に棚田が営まれており、構内では比較的旧地形を良好に残す地点である。周辺での埋蔵文化財調査歴を紐解くと、調査対象地の北西約30m地点において平成14年度に実施した農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新営）に伴う発掘調査[註2]では、調査区の南西部において南東から北西方向に流れる旧河川の右岸部が検出されている。この河川埋土からは、平安時代を中心とする土器とともに「官」の墨書がなされた須恵器坏蓋や緑釉陶器、六連式製塩土器などが出土している。更に鞴羽口や鉈尾の未製品も出土していることから、調査地周辺に鋳造に関連する官衙施設が存在する可能性を示すものとして注目されている。この調査区の更に約20m北西において平成12年度に実施された総合研究棟新営に伴う発掘調査[註3]でもやはり南東から北西に流れる河川跡の下流部分が検出されており、埋土からは平安時代の土器とともに円面硯、製塩土器などが出土している。また、昭和41年に実施された家畜病院建設に伴う発掘調査[註4]では、包含層と推定される黒色粘土層の分布が確認されている。調査は検出のみに止まったため、この黒色粘土層の性格に関しては不明であるが、分布が調査区（家畜病院建物）の西端部に限られていることから見て、平安時代の遺物を包含する旧河川右岸部の埋土である可能性を指摘できる。

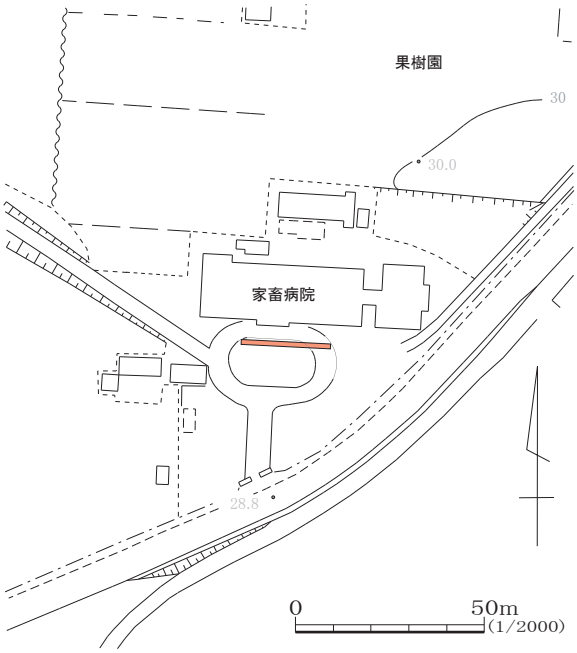


図4　調査区位置図

写真7　調査前近景（南から）

写真8　調査前遠景（南西から）

以上の調査成果から、開発予定地においては埋蔵文化財が遺存している可能性が極めて高いと想定された。従って当調査では昭和41年に検出されている黒色粘土層（遺物包含層）の確認を目的として、開発予定地南端に南北幅1.5m、東西長24mのトレンチを設定した。

（２）基本層序（図５、写真９～10）

調査地周辺の標高は約29mを測る。調査対象地は病院玄関前ロータリーの中央にマウンド状に盛土を行い緑地化している地点に当たるため、周辺地盤より最大で約0.6m高まりを有している。掘削開始後、造成土下に遺物包含層が確認されたため、これより下位の掘削は調査区南側幅0.6mに限り実施することにした。以下に確認した基本層序を記すが、調査区の東端部から西に約７m地点において吉田構内造成前に営まれていた棚田の段差部分が存在することから、調査区の東と西では堆積状況に大きな相違を見せている。ここでは、西方（棚田の低所部分）において確認された層序を示す。

第１層…表土（層厚約20～80㎝）～第５図の１層

第２層…造成土（層厚約40～100㎝）～第５図の２層

第３層…黒色(7.5Y2/1)粘質土（層厚約５㎝）～第５図の３層（旧耕土）

第４層…オリーブ灰色(10Y5/1)粘質土（層厚約20～40㎝）～第５図の７層（遺物包含層）

第５層…暗灰黄色(2.5Y5/2)粘性砂質土（層厚約10～30㎝）～第５図の13層

第６層…灰黄色(2.5Y7/2)粘性細砂（層厚50㎝以上）～第５図の14層

また、調査区西部の第４層下にオリーブ黒色（10YR3/1）の堆積層を確認した。この層は第５層を切り込む形で埋積しており、掘り進めるに従い僅かではあるが土質に変化を見せる状況であった。この落ち込みは前述の農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新営）に伴う発掘調査において確認された旧河川に繋がるものと推察されたが、掘削幅を0.6mと限定したため床面の確認には至らなかった。また、第５層に関しては極少量ではあるが遺物の出土を見たため、旧河川埋積以前に形成された堆積層と判断した。第６層に関してもその脆弱な土質から明確な地山とは判断できず、本発掘調査に課題を残した。

（３）遺構（図５、写真11）

予備発掘調査により確認された遺構は、前述の旧河川と推察される落ち込みと、大学造成以前、棚田に付随して機能していたと考えられる暗渠１条のみである。この内、旧河川と推測される落ち込みに堆積する黒色土層は、その検出位置から見て農学部付属家畜病院新営時に確認され、掘削調査を実施することなく破壊された黒色粘土層[註5]に連なるものであろう。

（４）遺物（表２、図６、写真12）

遺物収容コンテナ（80㎝×60㎝×8㎝）１箱分の遺物が出土した。遺物は大多数が包含層（基本層序第４層）および旧河川埋土からの出土であり、土師器と須恵器の小片が主体を占めている。所属時期は奈良時代から平安時代に該当するものが多く、少数ではあるが中世まで降るものが含まれる。

特徴的な遺物としては、旧河川埋土から六連式製塩土器体部片（図６－６）が出土している。前述の平成14年度実施農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新営）に伴う発掘調査においても旧河川埋土から相当数の六連式製塩土器が出土している[註6]ことからも、両者の強い関連性が認められる。

包含層出土瓦質土器甕（図６－17）は、須恵器甕の形態を色濃く残すものとして注目される。山口県内出土の瓦質土器甕を通観すると、岩崎仁志氏により初現期（13世紀）の瓦質土器と位置づけられた[註7]岩淵遺跡SF－１出土[註8]甕に似た形態を見出すが、口縁端部形態や外面調整法（叩き目）において差異が見られるようである。ここに詳細を記すと、本資料の器面調整は、体部外面に格子タタキが、内面にヨコハケが施され、頸部から口縁部にかけての外面はタテハケ調整後ナデ消し、内面はヨコハケ後

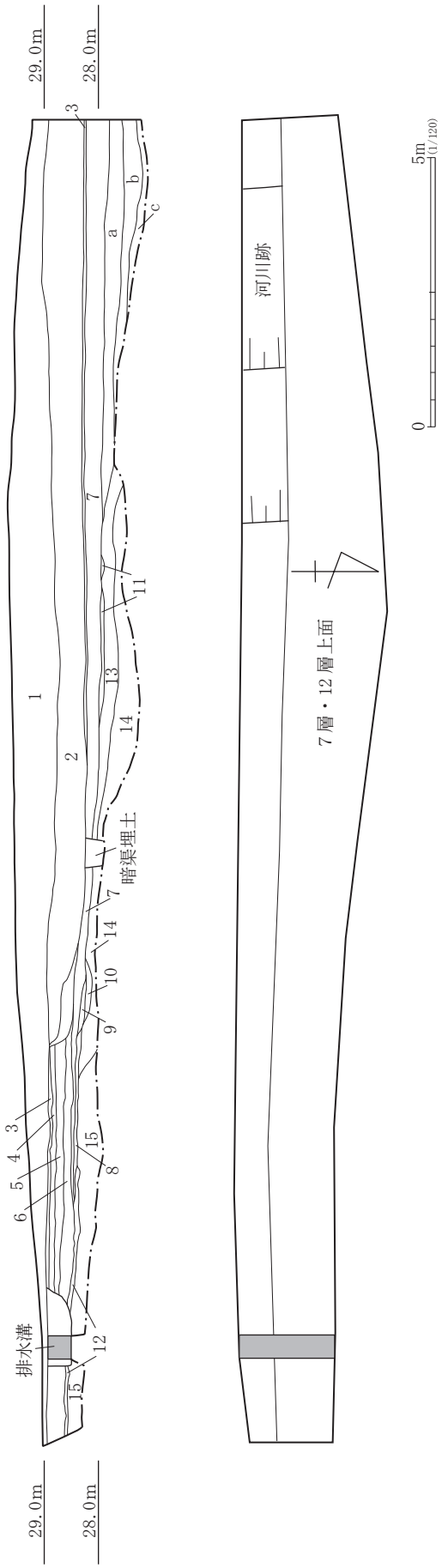


写真9　調査区西部南壁土層断面（北東から）

写真 10　調査区東部南壁土層断面（北西から）

写真 11　調査区全景（東から）

1　表土
2　造成土
3　黒色（7.5Y2/1）粘質土～旧耕土
4　にぶい黄色（2.5Y6/3）砂質土
5　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
6　灰色（5Y5/1）砂質土
7　オリーブ灰色（10Y5/1）粘質土～遺物包含層
8　オリーブ黒色（7.5Y3/1）砂質土
9　黄灰色（2.5Y4/1）砂質土
10　淡黄色（2.5Y7/3）弱粘質土
11　黄灰色（2.5Y4/1）弱粘質土
12　明黄褐色（2.5Y6/6）強粘質土
13　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性砂質土
14　灰黄色（2.5Y7/2）粘性細砂
15　黄褐色（2.5Y5/3）砂礫土

河川跡埋土
a　オリーブ黒色（10Y3/1）強粘質土
b　黒色（7.5Y2/1）粘性砂質土
c　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘性細砂

図5　調査区平面図・断面図

ナデ消しが行われている。口縁端部形態を除くとこれらは広島県福山市草戸千軒町遺跡等から出土している瓦質土器甕に見られる特徴と共通しており、さらに頸部から口縁までやや直立気味に立ち上がることを勘案すると、篠原芳秀氏編年[註9]Ⅱ期後半からⅣ期前半（14世紀後半～15世紀前半）に位置づけることが可能とも思われる。いずれにせよ県内出土瓦質土器では稀な特徴を有するのものであり、注意が必要であろう。

（５）小結

今回の予備発掘調査により、開発予定地内に重要な埋蔵文化財が遺存することが明らかとなった。特に旧河川と推察される落ち込みの埋土からは、限定的な掘削にも関わらず古代に属する須恵器と土師器を主体とした多量の出土遺物を見た。この落ち込みは、調査区北に隣接する現農学部付属家畜病院建設時に確認された黒色粘土層（遺物包含層）に続くものと考えられ、さらには北西に近接する農学部解剖実習棟校舎建設に伴う発掘調査により確認された、墨書須恵器、緑釉陶器、六連式製塩土器等古代官衙の存在を想像させる大量の遺物を包含した旧河川へと繋がるものと考えられる。この場合、当調査区は河川のより上流に位置することになる。

当調査では、調査結果により新営建物の設計等を変更する可能性も有すため、包含層以下の掘削は最小限度に止めた。そのため、土層断面観察による層序の確認を十分に行うことができず、地山層の確認等に問題を残した。本発掘調査実施の際には層序の確認を含めて慎重な掘削が必要である。

［註］

１）平成19年1月1日に農学部附属家畜病院から山口大学動物医療センターに改称。本書では調査時の呼称「農学部付属家畜病院」を用いる。

２）a：田畑直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」,山口考古学会（編）『山口考古　第22号』,山口

b：田畑直彦（2004）「第８章６．平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

３）田畑直彦（2004）「第８章４．平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

４）横山成己(2007)「付篇　吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口

５）前掲註４　94頁図65参照。

６）前掲註２

７）岩崎仁志（2004）「瓦質土器」,山口県（編）『山口県史　資料編考古２』,山口

８）大村秀典、河村悟史、林修司、岩崎仁志（2001),山口県埋蔵文化財センター（編）『岩淵遺跡』（山口県埋蔵文化財センター調査報告第24集),山口

９）篠原芳秀（1987）「草戸千軒町遺跡出土の亀山焼甕」,日本中世土器研究会（編）『中近世土器の基礎研究Ⅲ』,高槻（大阪）

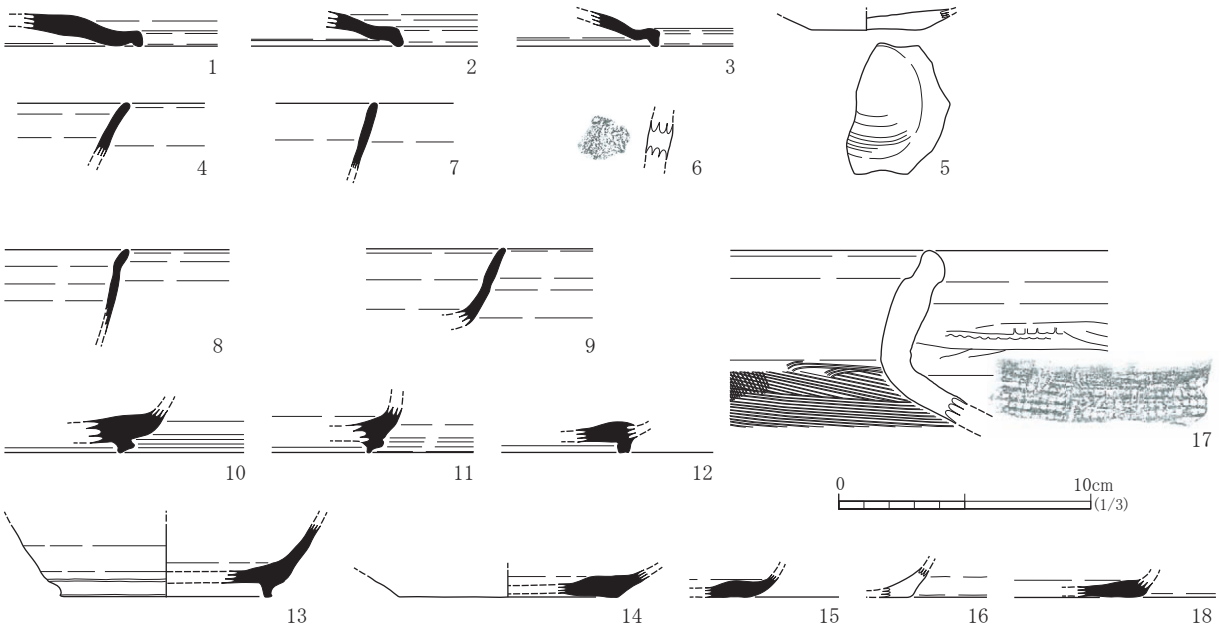


図6　出土遺物実測図

1～7　河川跡埋土
8～17　基本層序第４層
18　基本層序第５層

表2　出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	河川跡	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の 粗砂粒を含む	
2	河川跡	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(7.5Y6/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	0.5mm程の 礫を多く含む	
3	河川跡	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N6) ②灰色(N5)	0.5mm以下の 粗砂粒を若干含む	
4	河川跡	須恵器　坏身	口縁部		①灰色(N6) ②灰色(N6)	0.5mm程の 粗砂粒を多く含む	
5	河川跡	土師器　皿	底部	②(4.4)	①②にぶい黄橙色(2.5Y6/3)	0.5mm以下の 粗砂粒を多く含む	底部糸切り
6	河川跡	製塩土器	体部		①②浅黄橙色(10YR8/4)	1mm以下の 粗砂粒を多く含む	内面布目
7	河川跡	須恵器　坏身	口縁部		①②灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の 粗砂粒を含む	
8	第4層	須恵器　坏身	口縁部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm程の 粗砂粒を若干含む	
9	第4層	須恵器　坏身	口縁部 ～体部		①青灰色(5PB6/1) ②灰色(N6)	0.5mm程の 粗砂粒を多く含む	
10	第4層	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の 粗砂粒を含む	
11	第4層	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(N7)	1mm程の 粗砂粒を若干含む	
12	第4層	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5PB6/1)	2mm以下の 礫・粗砂粒を多く含む	
13	第4層	須恵器　高台付坏身	底部 ～体部	②(7.8)	①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	0.5mm程の 粗砂粒を若干含む	
14	第4層	須恵器　坏身	底部	②(8.8)	①②灰白色(N8)	1～2mm程の 粗砂粒を若干含む	
15	第4層	須恵器　坏身	底部		①②灰白色(5Y7/1)	0.5mm以下の 粗砂粒を含む	
16	第4層	土師器　坏か	底部		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	精緻	
17	第4層	瓦質土器　甕	口縁部		①灰色(7.5Y6/1) ②暗灰色(N3)	0.5mm程の粗砂粒を 多く、1mm程の粗砂粒を 若干含む	
18	第5層	須恵器　坏身	底部		①緑灰色(10G6/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の 粗砂粒を含む	

写真 12　出土遺物

２.農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査

調査地区　吉田構内S-20

調査面積　約225㎡

調査期間　平成18年６月12日～８月11日

調査担当　横山成己

（１）調査の経緯（図７）

農学部附属家畜病院南面に新規建物を増設する計画が持ち上がったことを受け、平成18年４月24日から28日にかけて実施した予備発掘調査成果[註1]が埋蔵文化財資料館専門委員会（平成18年度第１回専門委員会：平成18年５月８日開催）にて協議に付された。協議の結果、建設計画の変更が困難であること、着工の遅れが講義カリキュラムに多大な影響を及ぼすことなどを理由に、新規建物建設予定地全域に対して本発掘調査を実施することが決議された。

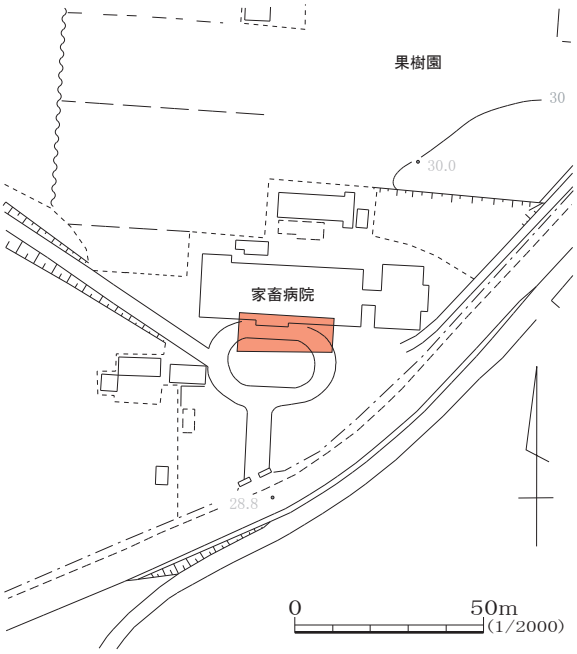


図7　調査区位置図

1）本書第１章第１節１．農学部附属家畜病院新営に伴う予備発掘調査（p.5～10）

（横山）

（２）調査の経過

調査は同年６月12日より着手した。予備発掘調査の成果から、調査対象地の地下の状況は東から西に傾斜する丘陵地であり、西端部では丘陵間を南東－北西方向に走る谷（旧河川）が埋存することが想定された。この谷の北西下流地点と推察される平成14年度実施農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新営）に伴う発掘調査[註1]区では、旧河川埋土とされる黒色堆積土中から墨書土器や製塩土器を始めとする特徴的な遺物群が出土しており、河川堆積土除去後には地山面に総柱掘立柱建物の柱穴群が確認された。さらに北西側にあたる平成12年度実施総合研究棟新営に伴う発掘調査[註2]区においてもこの旧河川は検出されており、その埋積土中からは円面硯、製塩土器などが出土している。

以上の状況を鑑み、６月12日から着手した本発掘調査では、調査区西部の谷埋積土の調査を精密に実施するため、上位に堆積する遺物包含層は重機により掘削し、遺物の回収に努めた。

６月29日までに谷埋土および調査区東部丘陵地の遺構を検出し、以降谷埋土を層位的に掘削するとともに遺構内埋土の掘削を行った。７月６日にはこれらの作業をほぼ終え、製図・写真撮影等の記録作業に入る状況であったが、最終的な確認として調査区南壁に沿って設けた排水溝をさらに掘り下げたところ、谷に埋積した黒色土の下位に確認された黄色土が地山ではなく、遺物を包含する堆積層であることが判明した。

以降、層位確認を行いながら調査区西部に堆積した遺物包含層を慎重に掘削し、下位に存在する遺構面を検出したのは８月３日のことであった。この遺構面を検出する作業中に、建物柱と推定される直立した木材を複数確認したため、７月25日に開催された埋蔵文化財資料館専門委員会において緊急報告を行い、今後の調査方針と埋蔵文化財の保護手段に関する討議を行った。その結果、やはり本学カリキュラムの関係上、８月中旬を超える調査の継続は困難との見解が示され、調査終了期限まで最大限

の文化財保護措置を講じることが承認された。

８月３日の検出により確認された谷部下位の遺構は、掘立柱建物３棟、溝１条、杭列であった。残された調査期間、これらの遺構群の調査を進行させると同時に本学開発部局と遺跡保護の手段を調整し、増築建物基礎杭の位置変更で保存可能のものは遺構を半截するに止め、変更不可で完全に破壊されてしまうものについては遺構の完掘を行った。記録的な猛暑の中、全ての掘削・記録作業を終えたのは調査期限である８月11日であった。

１）a：田畑直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」,山口考古学会（編）『山口考古　第22号』,山口

b：田畑直彦（2004）「第８章６．平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

２）田畑直彦（2004）「第８章４．平成12年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

（横山）

（３）基本層序（図８・９、写真13～15、48～50）

調査区は家畜病院建物の南面に接して南北幅10m、東西幅25mの範囲に設けたが、調査区北側に関しては既存の建物工事により大きく攪乱を受けていた。その範囲は家畜病院建物南壁より南方約5.5mにまで及んでいる。筆者は以前、昭和41年に実施された家畜病院建設に伴う発掘調査の成果報告を行ったが[註1]、その際に記録に残る調査範囲と現状建物の平面積が大きく異なることを指摘した。この度の調査で図らずも当時の測量図が正確なものであったことが確認できた。

調査では、調査対象地の北半部が攪乱を受けているため、南壁と西壁を対象に土層断面図の作製を行った。ただし、調査中に南壁の土留めを行ったため、調査区内に東西および南北方向の土層観察用アゼ（図９）を設置し、掘削の基準とした。

調査地点の旧地形は東部が丘陵台地、西部が北西に走る谷の右岸に当たるため、極めて複雑な層序を示している。ここでは特徴的な堆積層と遺物の取り上げ方法について記すこととする。

まず谷埋土検出面の上下で大別が可能である。上位には上から①造成土、②旧耕土（L1）、③旧床土（L2）、④暗灰黄色の遺物包含層（L3）が形成されている。これらの諸層は重機による掘削を行ったが、遺物は各層に分けて取り上げている。

調査区東部においては遺物包含層下が地山となっている。問題となるのは調査区中位より西部であるが、この範囲には近接する過去の調査地でも確認されている谷（河川）埋土と、その下位に遺物包含層が存在する。調査では谷埋土を４層（NR1－L1～4）に識別した。最下層（谷埋土4：NR1－4）は急激な水流による砂礫堆積層であり、上位層は漸次谷の埋積が進行したことを示すものである。

谷埋土の基盤層となっている遺物包含層に関しては、地形が北東から南西に急激に降下するしているため、各堆積土の広がり及び上下関係の判断が非常に困難であった。調査時にはこれらを３層（L4～6）に大別し、遺物の取り上げを行っている。この内、L4・5はある程度の締まりを有する堆積層であったが、L6は極めて締まりの弱い堆積層であり、土中には多量の遺物（土器類・木製品）と流木（自然木）が包含されていた。遺構面直上の堆積土であることからも注意が必要である。

また、調査区中位から西部にかけて遺構を検出した基盤層は、黄褐色を呈しているが極めて薄く、直下に硬質の黒色シルト層が存在する。この黒色シルト層については、調査最終段階でサブトレンチを複数本入れることによりその性格を把握しようと努めたが、下位層に達することが出来なかった。掘削し

1　灰黄褐色（10YR4/2）砂質土　…旧耕土「Ｌ１」で遺物取り上げ
2　灰オリーブ色（7.5Y5/2）弱粘質土　…旧床土「Ｌ２」で遺物取り上げ
3　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土　…「Ｌ３」で遺物取り上げ
4　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂礫土　…「Ｌ３」で遺物取り上げ
5　にぶい褐色（2.5YR5/4）砂質土　…「Ｌ３」で遺物取り上げ
6　黄褐色（2.5Y5/3）砂質土に明黄褐色（10YR6/8）砂が混ざる　…水田暗渠埋土
7　灰黄色（2.5Y6/2）砂質土
8　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂礫土に小礫（0.5～2㎝φ）多く混ざる
9　にぶい黄褐色（10YR8/4）粘質土に炭化物少量混ざる　…「Ｌ４」で遺物取り上げ
10　淡黄色（2.5Y8/3）砂質土
11　明黄褐色（2.5Y6/6）砂礫土（小礫0.5～1.5㎝φ）　…「Ｌ４」で遺物取り上げ
12　暗灰黄色（2.5Y5/2）弱粘質土　…「Ｌ４」で遺物取り上げ
13　灰黄色（2.5Y6/2）に黄褐色（10YR5/2）が混ざる砂質土　…「Ｌ４」で遺物取り上げ
14　にぶい黄色（2.5Y6/3）弱粘質土に小礫（0.5～1㎝φ）少量混ざる　…「Ｌ５」で遺物取り上げ
15　灰色（5Y4/1）強粘質土　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
16　暗黄灰色（2.5Y5/2）砂質土　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
17　暗黄灰色（2.5Y4/2）強粘質土に木製品・自然木多量に混ざる　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
18　暗黄灰色（2.5Y4/2）砂土に木製品・自然木多量に混ざる　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
19　灰黄色（2.5YR6/2）砂質土に小礫（0.5～1㎝φ）少量混ざる　…遺構埋土か
20　灰黄色（2.5Y6/2）粘質土　…遺構埋土か
21　明黄褐色（10YR6/6）砂質土　…整地土か

【谷埋土】
①　灰色（5Y4/1）弱粘質土　…谷埋土１
②　灰色（5Y4/1）粘性砂質土　…谷埋土２
③　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘性砂質土　…谷埋土３
④　灰色（7.5Y5/1）粘性砂質土に小礫（0.5～2㎝φ）多く混ざる　…谷埋土４

【遺構埋土】
ａ　褐色（10YR4/4）弱粘質土（締まりが極めて弱い）　…溝３埋土
ｂ　淡黄色（2.5Y8/3）弱粘質土に小礫（0.5～1㎝φ）少量混ざる　…溝３埋土
ｃ　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土　…溝３埋土
い　褐色（10YR4/4）弱粘質土（締まりが極めて弱い）　…柱抜き取り穴埋土か？
ろ　淡黄色（2.5Y8/3）弱粘質土に小礫（0.5～1㎝φ）少量混ざる　…柱抜き取り穴埋土か？
イ　浅黄色（2.5Y7/4）弱粘質土　…柱穴埋土
ロ　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土に炭化物多く混ざる　…柱穴埋土
ハ　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土に浅黄色（2.5Y7/4）粘土混ざる　…柱穴埋土
ニ　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土に小礫（0.5～1㎝φ）少量混ざる　…柱穴埋土

図8　調査区平面図・断面図

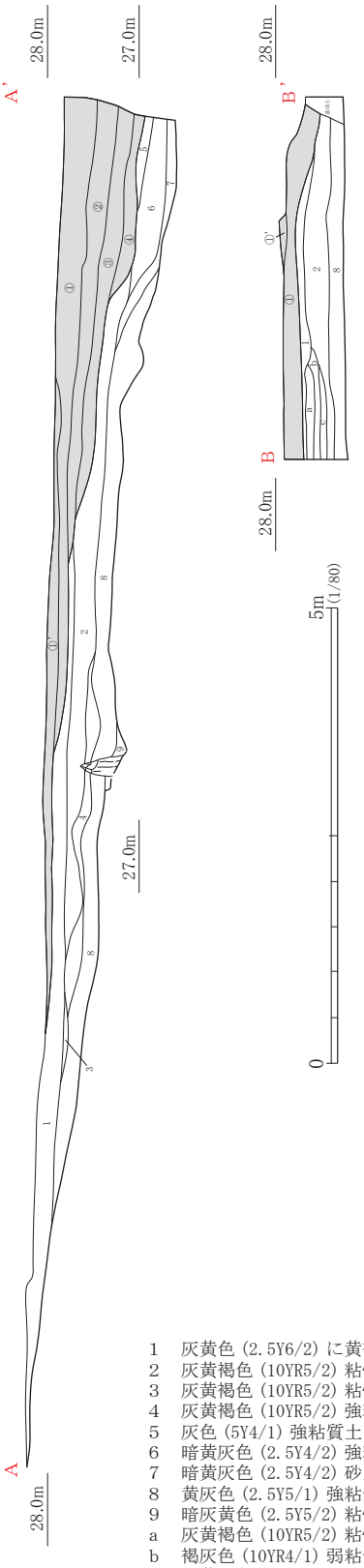


写真 13　調査区内土層観察用アゼ全景（北東から）

写真 14　東西方向アゼ（北から）

写真 15　東西方向アゼ西端部（北から）

1　灰黄色（2.5Y6/2）に黄褐色（10YR5/2）が混ざる砂質土　…「Ｌ４」で遺物取り上げ（※調査区南壁 13 層に対応）
2　灰黄褐色（10YR5/2）粘性砂質土　…「Ｌ５」で遺物取り上げ（調査区南壁 14 層に対応）
3　灰黄褐色（10YR5/2）粘性砂質土に明黄褐色（2.5Y7/6）砂と炭化物が混ざる　…「Ｌ５」で遺物取り上げ
4　灰黄褐色（10YR5/2）強粘質土に明黄褐色（2.5Y7/6）砂と炭化物が混ざる　…「Ｌ５」で遺物取り上げ
5　灰色（5Y4/1）強粘質土　…「Ｌ６」で遺物取り上げ（調査区西壁 15 層に対応）
6　暗黄灰色（2.5Y4/2）強粘質土に木製品・自然木多量に混ざる　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
7　暗黄灰色（2.5Y4/2）砂土に木製品・自然木多量に混ざる　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
8　黄灰色（2.5Y5/1）強粘質土に炭化物・自然木等多量に混ざる　…「Ｌ６」で遺物取り上げ
9　暗灰黄色（2.5Y5/2）粘性砂質土　…柱穴埋土
a　灰黄褐色（10YR5/2）粘性砂質土に灰白色（7.5YR8/1）粘土ブロック多く混ざる
b　褐灰色（10YR4/1）弱粘質土
c　灰黄褐色（10YR5/2）粘性砂質土に灰白色（7.5YR8/1）粘土ブロック多く混ざる

【谷埋土】
①’黄灰色（2.5Y4/1）砂質土　…谷埋土Ｌ１
①　灰色（5Y4/1）弱粘質土　…谷埋土Ｌ１
②　灰色（5Y4/1）粘性砂質土　…谷埋土Ｌ２
③　オリーブ黒色（7.5Y3/1）粘性砂質土　…谷埋土Ｌ３
④　灰色（7.5Y5/1）粘性砂質土に小礫（0.5～2㎝φ）多く混ざる　…谷埋土Ｌ４

図9　調査区内土層断面図

た範囲では黒色シルト層内に遺物は見られなかったものの、この層を地山と認定しうる状況ではなく、今後に課題が残る。

［註］

1）横山成己（2007）「付篇　吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口

（横山）

（４）遺構

調査区内において確認した主な遺構は、掘立柱建物跡３棟、土壙４基、溝３条、その他柱穴状遺構（SP）３基である。この内、土壙は全て調査区東部の丘陵台地上に、掘立柱建物跡は全て調査区中部以西の傾斜地に位置するという特徴を有する。また、調査区中央やや東よりで検出された溝１（写真35・36）は近代以降の水田暗渠であり、ここでは詳細を省く。

以下に個別解説を記すが、各遺構の位置関係については図８を参照されたい。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物跡1（図９、写真16～18）

調査区の中央部、西側谷への傾斜変換地に位置する。検出された柱穴は６基であり、現状で南北１間×東西２間に復元されるが、総柱建物として南方調査区外にまで建物規模が拡大する可能性も残す。建物軸は、座標を基準に西が北方に12度偏している。

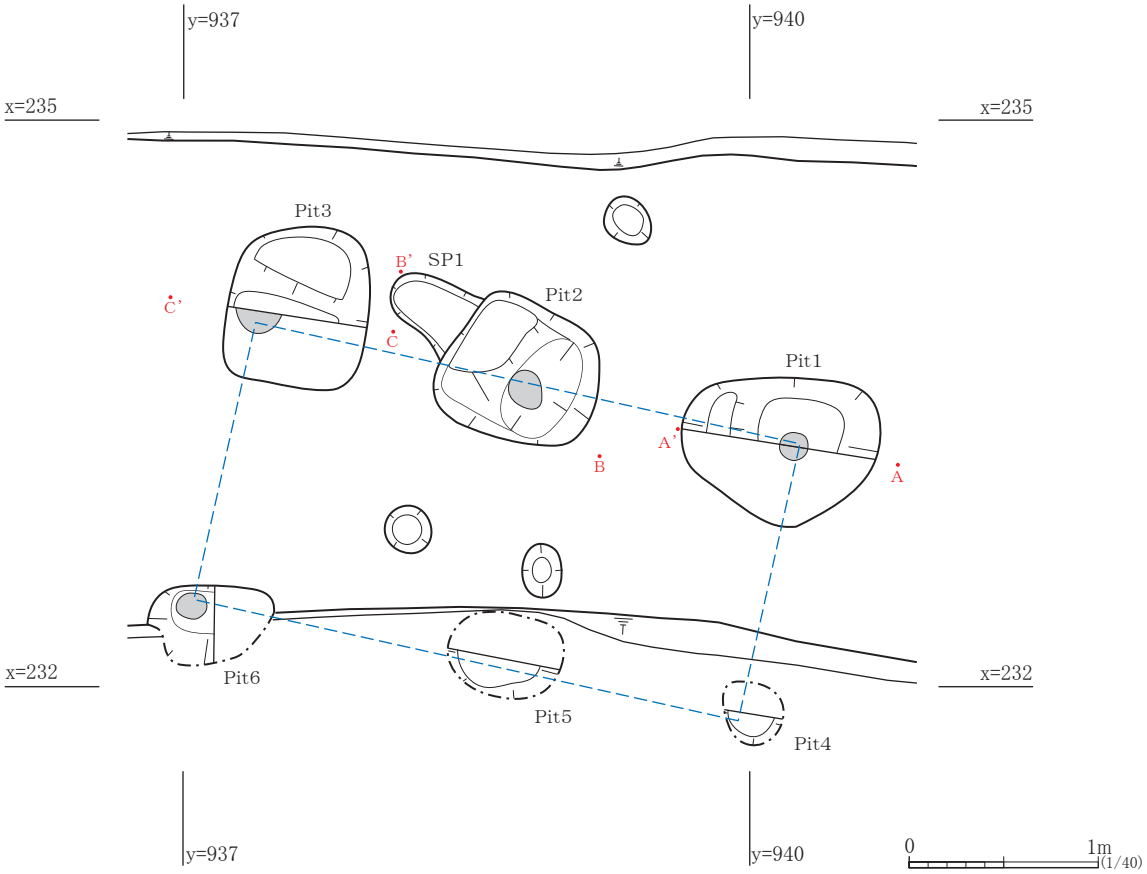
柱穴の平面形は、長軸が0.8～１ｍの隅丸方形または不整楕円形であり、規則的な平面形は有していない。柱穴内には腐食した柱根の痕跡が明瞭に残っており、建物廃棄時に地上で柱が切り取られたことが分かる。柱穴埋土は締まりが弱くヘドロ状に変質していたが、これは谷の埋積により丘陵高所まで湧水が及んだことの影響と考えられる。一方で柱穴断面を観察すると、Pit1～3の埋土はいずれも大きな単位で３層に区分され、綿密に根固めを行っているとは言い難い状況である。このことから建屋の上部構造は比較的軽量のものであった可能性が高い。

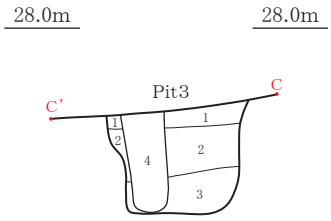
またPit2に切られる形で北西端部に接するSP１は、検出当初は柱の抜き取り穴と考えたが、上記の通り柱穴に柱痕跡が遺存しているためこれは不当である。周囲に対をなす遺構が見当たらないことから、当建物の建設に関連する掘り込みと想像されるが、その性格については不明と言わざるを得ない。

建物規模に関しては、掘削当初に調査区南壁に沿い排水溝を設けたため、建物の南側柱穴列の大部分は破壊してしまったが、僅かに残った柱根痕跡の測量結果から、東西・南北とも１間約1.5ｍの建物に復元される。

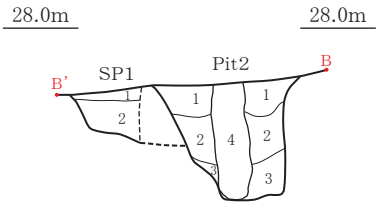
地形と建物の関係については、遺構検出時、検出面は東から西へ緩やかに傾斜していた。検出当初、安定的な丘陵台地上ではなく傾斜地に建物が配置されていることに疑問を感じ、上層からの掘り込みの可能性も考慮に入れたが、調査の結果、柱穴底面も傾斜に比例し東から西へと低下していることが判明した。これは建物建築時に当該地が平地化していた訳ではなく、依然傾斜地であった事実を如実に示している。

当遺構の保存については、開発工事による破壊を逃れるPit1およびPit3は半裁掘削に止め、他は完掘した。建物の所属時期に関しては、出土遺物が極めて乏しく、かつ細片であったため、比定が困難な状況である。器種等が判別できるものとしては、僅かにPit3から焼成不良の須恵器底部片１点を数えるのみである。高台付椀もしくは皿の底部と見られるが、形骸化した断面三角形の高台は10世紀以降の所産であることを示しており、建物の上限年代を推察する上での資料となっている。



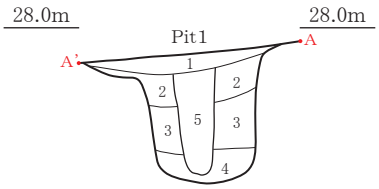


【Pit３埋土】
1　淡黄色（2.5Y8/3）と灰白色（2.5Y8/1）が混ざる砂質土（0.5～3㎝φの礫混ざる）
2　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土（0.5～1㎝φの小礫混ざる）
3　黄灰色（2.5Y6/1）強粘質土（ヘドロ状）
4　灰黄褐色（10YR4/2）強粘質土（ヘドロ状）…柱痕跡



【Pit２埋土】
1　淡黄色（2.5Y8/3）と灰白色（2.5Y8/1）が混ざる砂質土（0.5～3㎝φの礫混ざる）
2　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土（0.5～1㎝φの小礫混ざる）
3　黄灰色（2.5Y6/1）強粘質土（ヘドロ状）
4　灰黄褐色（10YR4/2）強粘質土（ヘドロ状）…柱痕跡

【SP１埋土】
1　暗黄灰色（2.5Y5/2）砂質土（0.5～1㎝φの小礫混ざる）
2　灰黄褐色（10YR5/2）弱粘質土



【Pit１埋土】
1　暗黄灰色（2.5Y5/2）砂質土（0.5～1㎝φの小礫混ざる）
2　黄褐色（2.5Y5/3）弱粘質土（0.5～1㎝φの小礫混ざる）
3　黄灰色（2.5Y6/1）強粘質土（ヘドロ状）
4　にぶい黄色（2.5Y6/3）強粘質土
5　暗灰黄色（2.5Y5/2）強粘質土（ヘドロ状）…柱痕

図 10　掘立柱建物跡1　平面図・断面図

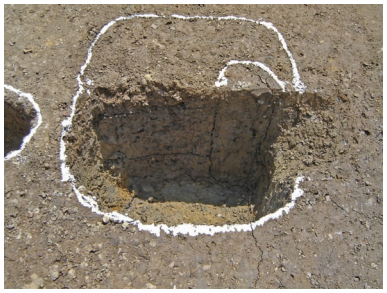


写真 16　掘立柱建物跡1　Pit3
埋土断面（北から）

写真 17　掘立柱建物跡1　Pit2
埋土断面（北から）

写真 18　掘立柱建物跡1　Pit1
埋土断面（北から）

掘立柱建物跡2（図11・12、写真19～24・44）

掘立柱建物跡１の西側、南東から北西に走る谷の右岸傾斜地に位置する。後述する掘立柱建物跡３の内部に位置しており、掘立柱建物跡３に先行する建物である。検出された柱穴は６基であり、南北２間×東西１間に復元される。建物軸は座標を基準に北が東方に９度偏している。

各柱穴断面を観察すると、柱根痕跡は全く観察されず、建物廃棄時に全ての柱が抜き取られたものと推測される。Pit3・4・5の平面形が長軸約0.8mの隅丸長方形であるのに対し、Pit1・2・6が長軸約1.2mと大きく、平面形不整形であるのも、柱抜き取り時に柱穴周囲から大きく掘り込んだ結果と考えられる。Pit1・2は段状に掘り込まれているが、下段部分が本来の柱穴であったのだろう。

掘立柱建物跡１とは異なり、長軸（南北）の柱穴底面高は東側列、西側列ともほぼ一定である。該当地の地形は北東から南西への傾斜地であるが、高所に当たる東側柱穴列の方が柱穴底面が低いという特徴を有している。

建物規模に関しては、抜き取りのため従来の柱の位置を確定しかねるが、柱芯間約1.6mの建物と推定しておきたい。

また、Pit6に南端を切られる形で検出した柱穴SP2は、対応する他の遺構が存在しない。切り合い関係から掘立柱建物２に後出する遺構であり、後出の掘立柱建物跡３に関連する遺構であろう。その場合、間仕切り柱が考えられる。

確認した遺構の内、Pit4以外は開発工事による破壊を逃れるため、半裁掘削に止めている。出土遺物には土師器、須恵器、加工木などがある。器種が確認できるものとしては、須恵器には高坏、ハソウ、甕、土師器には甕がある。この内ハソウは底部が平底化した最終形態のもので、７世紀初頭～中頃に比定できる。しかしこれらの遺物は柱抜き取り時の混入である可能性が極めて高いもので、建物自体の年代を示すものではないことを付記しておく。

掘立柱建物跡3（図11・13、写真25～30・43～46）

掘立柱建物跡２の柱穴周囲を覆う形状で検出された大型建物跡である。確認された柱穴は７基だが、東側柱穴列の北端部に当たる位置は家畜病院建物工事によりすでに破壊を受けており、遺構の確認はできなかった。また同じく東側柱穴列の南端部に当たる柱穴は調査区南壁断面での確認である。

柱穴の配列から建物を復元すると、南北方向を主軸とし、南北３間×東西１間に復元されるが、南北とも更に建物が延長する可能性が残される。ここで留意すべき点は、柱間の距離である。計測値によると、想定される建物南北長は5.68mであり、１間の距離は約1.9mとなる。これに対し、東西幅は4.16mでこの距離を柱２本で賄っていることになる。掘立柱建物で１間が４mを超える建物はやや想定し難いため、現状ではこの建物は東西２間（１間2.08m）規模であり、建物南北端が調査区外にまで及んでいるものと判断している。このような大規模建物を復元した場合、掘立柱建物跡２で言及したSP2はやはり掘立柱建物跡３の間仕切り柱と考えるのが妥当であろう。SP2がPit6とPit3のほぼ中間に位置することもその可能性を高めている。

建物軸に関しては、座標を基準に北が東方に10度偏している。この値は掘立柱建物跡２に近似しており、両者の関係を考察する上で重要と言える。

掘立柱建物跡３の調査で特筆すべき点は、検出された７基の柱穴の内３基に柱根が遺存していたことである。発見経緯を記すと、これらの柱根は包含層掘削が遺構面に達する以前よりその姿を現していたものであるが（図９・写真14）、３本の配置からは建物の柱根である確証が得られなかった。その後掘削を進めると、柱穴の配列が徐々に明らかとなり、掘立柱建物を構成する柱であることが明らかとなった。

検出された柱穴は、いずれも不整な円形および楕円形を呈しており、径の長軸は１～1.2mを測る。柱根が依存している柱穴を見ると、柱は必ずしも柱穴中央に設置されてはいない。Pit5・6は、南側から傾斜をつけて掘り進めた穴の最深部（北側）に柱を配している。また３本の柱とも下部に礎石や礎板を設置していない。

各柱穴の底面高を標高で測ると、Pit5が26.95m、Pit6が26.84m、Pit1が26.73m、Pit2が26.72m、Pit3が26.66m、Pit4が26.56mとなり、北東から南西に向かい降下していることが分かる。これは掘立柱建物１同様、建物建築当時にこの場所が傾斜地であったことを示しており、換言すると「南東から北西に走る谷の右岸傾斜地」という不安定な場所に敢えて大型建物を建築したことを意味している。

次に柱穴埋土の状況を観察すると、柱の規模（直径約20㎝）に比し、堅固な根固めを行っているとは言い難い。特にPit4・5は遺構の基盤土をそのまま埋め戻したかのような状況であり、土の締まり具合の差異で遺構壁面を探らなくてはならなかった。

掘立柱建物跡３を考察する上での問題点の一つとして、各柱穴における柱根の有無が挙げられる。現状で６基の柱穴の内３基に柱根が依存するが、遺存する柱根はいずれも保存状態が良好であり、特にPit4の柱根は成形加工痕が当時のままに残っているほどである。これは、該当地が埋没谷に当たることから、建物廃棄後も地下水脈の通り道であり続け、幸運にも有機物が非常に良好に保存される環境となったことに起因する。この状況を言い換えると、建物廃棄時に柱根が柱穴内に残されたとすれば、それは調査時まで必ず何らかの形で遺存していなければならない、という事を示している。現に、やや腐食の進行したPit６の柱根は、柱周囲に元来の柱の痕跡が土壌化して残っているが、柱根が遺存しない他の柱穴には柱痕らしい土層は観察できない。

これらの事実から総合的に判断すると、Pit4・5・6の柱は建物廃棄時に上部で切り取られ、他の柱は廃棄時に抜き取られたものと推察される。それを裏付けるように、調査区南壁断面で確認されたPit７には、埋没した柱穴埋土を上層から掘り込んでいる状況が観察できる（図８、写真49）。それでは、同一建物であるにもかかわらずなぜ柱の処理にこのような差が生じたのであろうか。

この疑問に関わり、遺構検出面直上の堆積土の詳細を記しておく。「基本層序」で言及したように、遺構面直上堆積土（遺物包含層Ｌ６）は極めて脆弱な土質であり、内部には多量の遺物（須恵器・土師器・木製品）と共に拳大の礫や自然木が多量に包含されていた（写真47）。その状況から、丘陵上部から土石流化した土砂が一気に流入し、堆積したものと判断された。この層を突き抜ける形で柱根３本は露出していた訳であるが、上記の理由から大型建物の基盤層となり得るものとは考え難く、実際に層上面で柱穴の輪郭等は検出されなかった。

さらに柱穴堀方に目を向けると、柱の規模に比して柱穴深度が非常に浅いことが分かる。特に建物西側列のPit3・4では僅かに25～30㎝を測るのみである。西側柱穴列に関しては柱穴の平面輪郭が明確でなく、検出時に遺構面を削り過ぎた嫌いもあるが、それも数㎝程度の厚みに収まる。柱及び柱穴から復元される建物の規模を考えると、この深度では安定した建物を維持できるとも考えられないが、最も遺存状況が良いPit4の柱根を観察すると、柱根基部より上に約35㎝部分から上方は風化が進行しており、下部は加工当時の姿を留めたままであった。当然柱の転用も考慮に入れなければならないが、この状況からは、遺跡調査時の状況としては柱穴埋土内に収まっていたのは最大で深さ約35㎝までと判断するのが妥当と考える。

確認した遺構に関しては、いずれも開発工事による破壊から逃れるため、調査を半裁掘削に止め埋め戻している。出土遺物に関しては、須恵器・土師器・木製品が出土しているが、いずれも小片であ

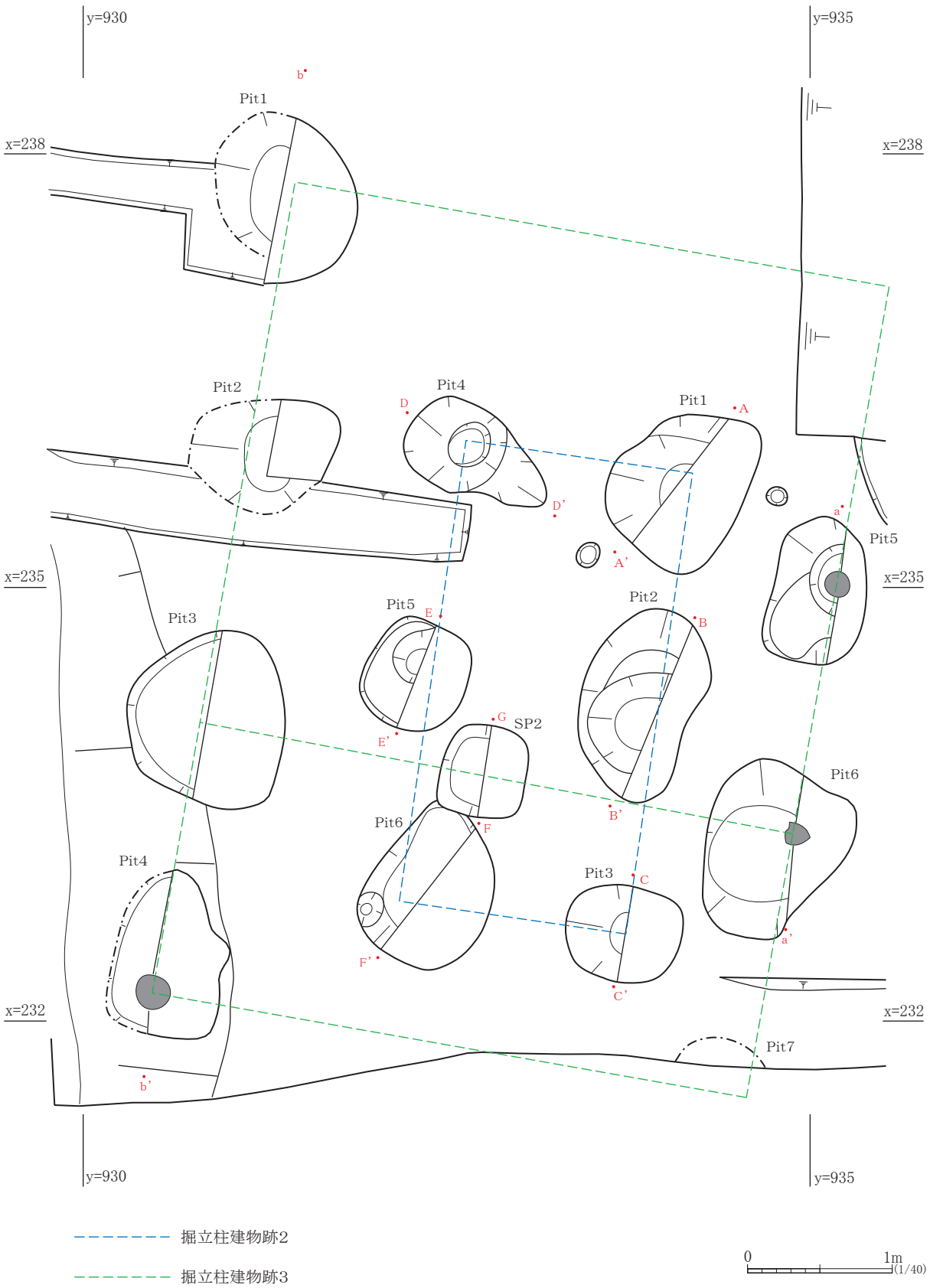
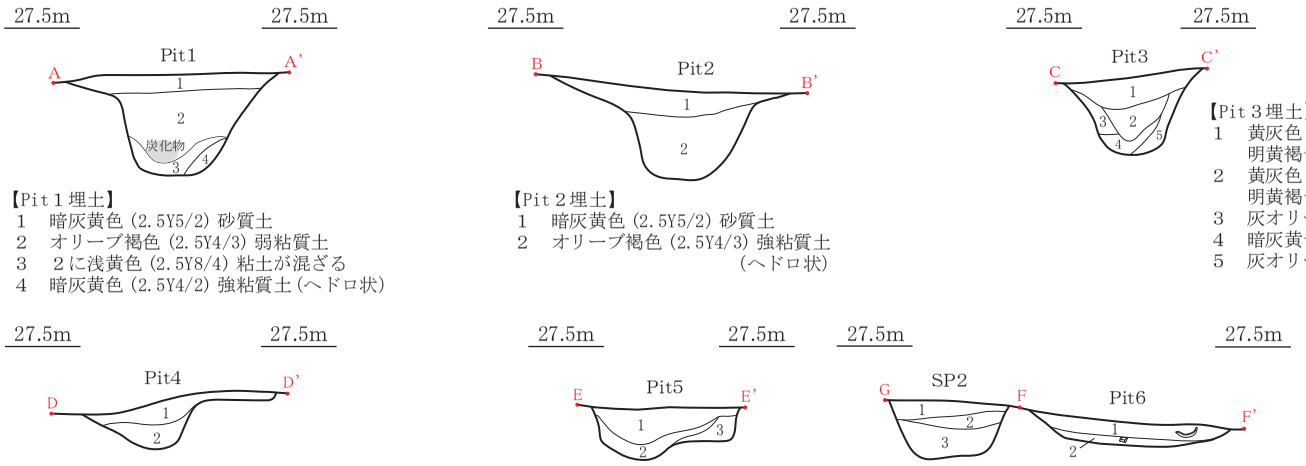


図 11　掘立柱建物跡2・3　平面図



【Pit１埋土】
1　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
2　オリーブ褐色（2.5Y4/3）弱粘質土
3　２に浅黄色（2.5Y8/4）粘土が混ざる
4　暗灰黄色（2.5Y4/2）強粘質土（ヘドロ状）

【Pit２埋土】
1　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土
2　オリーブ褐色（2.5Y4/3）強粘質土（ヘドロ状）

【Pit３埋土】
1　黄灰色（2.5Y4/1）弱粘質土に明黄褐色（2.5Y6/6）砂質土が混ざる
2　黄灰色（2.5Y3/1）強粘質土に明黄褐色（2.5Y7/6）粘土ブロックが多く混ざる
3　灰オリーブ色（5Y4/2）強粘質土（ヘドロ状）
4　暗灰黄色（2.5Y5/2）強粘質土（ヘドロ状）
5　灰オリーブ色（5Y4/2）強粘質土（ヘドロ状）

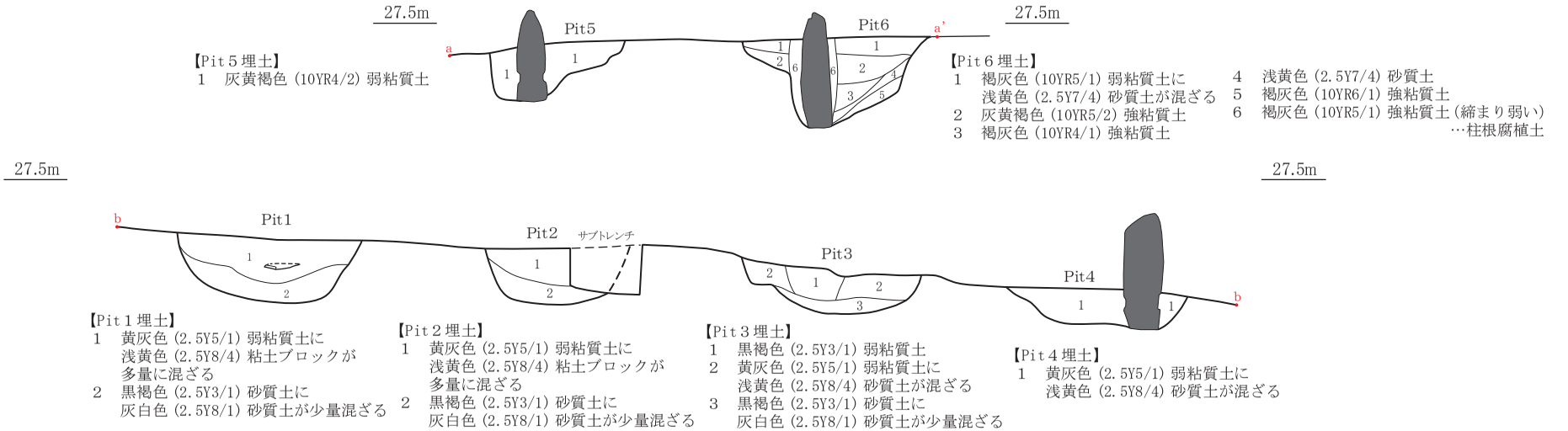
【Pit４埋土】
1　黄灰色（2.5Y4/1）砂質土
2　黄灰色（2.5Y5/1）強粘質土

【Pit５埋土】
1　灰黄褐色（10YR4/2）弱粘質土
2　黄灰色（2.5Y4/1）強粘質土
3　暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土

【SP２埋土】
1　褐灰色（10YR5/1）砂質土
2　黄褐色（2.5Y4/1）弱粘質土
3　黒褐色（2.5Y3/2）弱粘質土

【Pit６埋土】
1　黄褐色（2.5Y4/1）弱粘質土
2　黒褐色（2.5Y3/2）弱粘質土

図 12　掘立柱建物跡2　柱穴土層断面図



【Pit５埋土】
1　灰黄褐色（10YR4/2）弱粘質土

【Pit６埋土】
1　褐灰色（10YR5/1）弱粘質土に浅黄色（2.5Y7/4）砂質土が混ざる
2　灰黄褐色（10YR5/2）強粘質土
3　褐灰色（10YR4/1）強粘質土
4　浅黄色（2.5Y7/4）砂質土
5　褐灰色（10YR6/1）強粘質土
6　褐灰色（10YR5/1）強粘質土（締まり弱い）…柱根腐植土

【Pit１埋土】
1　黄灰色（2.5Y5/1）弱粘質土に浅黄色（2.5Y8/4）粘土ブロックが多量に混ざる
2　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土に灰白色（2.5Y8/1）砂質土が少量混ざる

【Pit２埋土】
1　黄灰色（2.5Y5/1）弱粘質土に浅黄色（2.5Y8/4）粘土ブロックが多量に混ざる
2　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土に灰白色（2.5Y8/1）砂質土が少量混ざる

【Pit３埋土】
1　黒褐色（2.5Y3/1）弱粘質土
2　黄灰色（2.5Y5/1）弱粘質土に浅黄色（2.5Y8/4）砂質土が混ざる
3　黒褐色（2.5Y3/1）砂質土に灰白色（2.5Y8/1）砂質土が少量混ざる

【Pit４埋土】
1　黄灰色（2.5Y5/1）弱粘質土に浅黄色（2.5Y8/4）砂質土が混ざる

図 13　掘立柱建物跡3　柱穴土層断面図

0　1m（1/40）

り遺構の所属時期を知る手がかりとはならない。

以上、掘立柱建物跡３の性格をまとめると、当建物は南東から北西に伸びる谷の右岸、北東から南西へ降下する傾斜地に立地する。建物規模は東西２間、南北４間以上の大型建物であり、内部に間仕切りを有する。建物軸は掘立柱建物２と同様に北が東方に僅かに偏する。地盤の傾斜方向と建物軸が合致しないことは、この建物の特殊性を示すものと思われる。

掘立柱建物２と掘立柱建物３との間に明確な柱穴の重複関係はないが、建物の配置から掘立柱建物２の建て替えで掘立柱建物３が成立したと考えて間違いなかろう。

確認された柱穴７基の内３基には柱根が良好に遺存していた。他の柱に関しては建物廃絶以降に抜き取られたものと判断できる。

当建物の廃絶に関しては、谷地に位置することが災いし、丘陵上部からの急激な土砂の流入が廃絶の契機になったものと推察される。土砂により埋没した建物柱について、抜き易いものは抜き取り、上部で切断した方が早いものについては切り取り回収したものと想像される。

また、柱穴深度の浅さに関しては、急激な土砂災害に伴い、建物基盤層もある程度流失した可能性を指摘したい。Pit4柱根の風化度の違いは、建物廃絶後に上部が一定期間露出していた為ではなく、接触していた土（柱穴内埋土と上部に堆積した土砂）の土質の違いに起因するものと考えている。

この他、建物西側、谷が更に下方に落ち込む部分に杭が７本確認されたが、配列に規則性が掴めなかった。建物と関係がある施設か、谷の護岸等に用いられたものか、その性格を把握できていない。

以上が掘立柱建物跡３棟の概要である。期日に迫られた調査となったため、いまだ考察の及ばない部分が多々存在する。特に掘立柱建物２と３との間には建物規模において大きな隔たりがあり、単純に「建て替え」と判断して良いのか疑問が残る。今後の検討課題としたい。

写真 19　掘立柱建物跡2・3柱穴群（西から）

写真 20　掘立柱建物跡2　Pit1断面（北西から）

写真 21　掘立柱建物跡2　Pit2断面（西から）

写真 22　掘立柱建物跡2　Pit3断面（西から）

写真 23　掘立柱建物跡2　Pit4断面（北から）

写真 24　掘立柱建物跡2　Pit5・6、SP2断面（北西から）

写真 25　掘立柱建物跡3　Pit5断面（西から）

写真 26　掘立柱建物跡3　Pit6断面（西から）

写真 27　掘立柱建物跡3　Pit1断面（西から）

写真 28　掘立柱建物跡3　Pit2断面（西から）

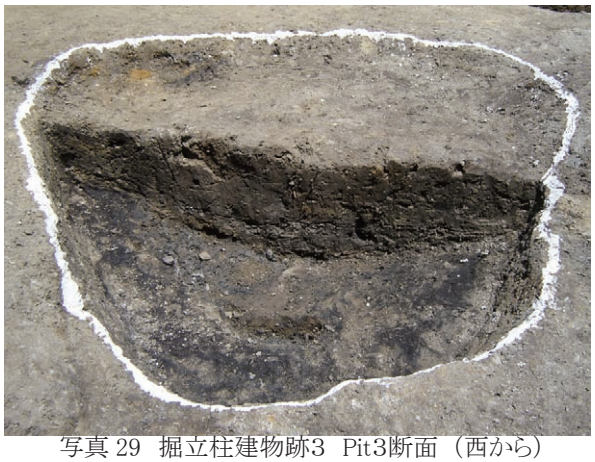


写真 29　掘立柱建物跡3　Pit3断面（西から）

写真 30　掘立柱建物跡3　Pit4断面（西から）

【溝】

溝2（図14、写真31・42）

調査区中央東寄りで検出された。緩やかに湾曲しつつ南北方向に走る溝であるが、南端部は上層から掘り込まれた水田暗渠（溝１）により攪乱を受けている。

現状で最大幅約0.m、深さ0.12m。埋土は上下２層に分類可能であり、下層は砂礫層であり、水流が存在した可能性を示すが、検出長が短いため、水流の進路は不明である。

出土遺物には土師器および須恵器の小片があるが、図化可能なものは円面硯と見られる須恵器１点（図15-19）のみである。現状では明確に中世以降に時期が下る遺物が見られないため、古代に所属する遺構と見なしておきたい。

溝3（図８、写真44）

調査区中央西より、掘立柱建物１と掘立柱建物３の中間に位置する溝である。調査区南端部からやや東に偏して北に直線的に走るが、約2.5m地点で途絶えている。掘り込みは南壁断面11層および13層上面から行われており、幅約0.95m、深さ約0.5mを測る。埋土内から遺物の出土は見られず、所属時期不明である。溝の主軸が掘立柱建物群の主軸と近似値を示すため、何らかの関係性を窺わせるが、層位的には後出する溝である。

【土壙】

土壙1（図14、写真32）

調査区東側、丘陵台地上に位置する土壙である。平面形は正円に近い楕円形であり、南北幅1.3m、東西幅1.24mを測る。深さは最深部で0.26mである。

出土遺物には土師器および須恵器の小片が見られるが、いずれも細片で図化不能である。断定はできないが溝２と同一時期のものである可能性が指摘できる。

土壙2（図14、写真33）

調査区東側の丘陵台地上、土壙１の南東側に近接する大型の土壙であり、東西幅2.5mを測る。深さは最深部で0.23mである。

出土遺物には須恵器の細片２点がのみであり、遺構の時期を特定することはできない。

土壙3・土壙4（図14、写真34）

調査区東側の丘陵台地上、土壙２の北東側に隣接しており、上下に重複する土壙である。土壙４が土壙３埋土を掘り込んで形成されている。いずれも病院建物建設時に遺構の北部を破壊されているが、土壙３は東西幅約1.6m、深さ0.16m、土壙４は東西幅約1m、深さ0.17mを測る。

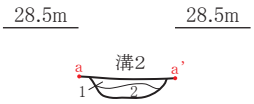
土壙３からは遺物の出土は見られなかったが、土壙４からは土師器および須恵器の小片が出土している。この内図化が可能な１点は、須恵器平瓶の頸部から体部にかけての破片である（図15-18）。近接する溝２、土壙１と同一時期に形成された遺構である可能性がある。

【ピット】

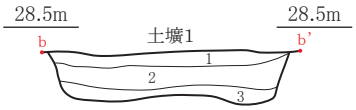
SP3（図８、写真44）

掘立柱建物３の柱穴であるPit5の北東に近接する遺構である。配置から見て掘立柱建物群に関連する遺構とは考え難く、独立した遺構と見なした。北半部は病院建物建設時に破壊されており、残存南北長0.66m、東西幅0.6m、最大深度0.23mを測る。

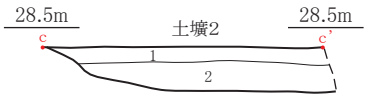
出土遺物は１点のみであり、土師器甕口縁部片である（図15-17）。



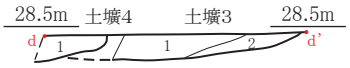
【溝２埋土】
1　黒褐色（10YR3/1）弱粘質土
2　オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂礫土



【土壙１埋土】
1　黒褐色（10YR3/1）弱粘質土
2　黄褐色（2.5Y5/3）砂礫土
（0.5～4㎝φの礫混ざる）
3　オリーブ褐色（2.5Y4/3）砂礫土



【土壙２埋土】
1　褐色（10YR4/4）強粘質土
2　褐色（7.5YR4/4）砂礫土



【土壙３埋土】
1　にぶい褐色（7.5YR5/4）弱粘質土
2　明黄褐色（10YR6/6）砂質土

【土壙４埋土】
1　褐色（7.5YR4/4）強粘質土

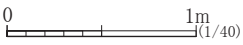


図 14　溝・土壙断面図

写真 31　溝2断面（北から）

写真 32　土壙1断面（西から）

写真 33　土壙2断面（西から）

写真 34　土壙3・4断面（西から）

【埋没谷】（図９、写真13～15・37～40）

ここで埋没谷としているのは、上部包含層（L2・3）下に検出した灰色およびオリーブ黒色の堆積土層を示す（図８・９の土層断面図灰色網掛部分）。谷埋土とした土層の下位に存在する堆積土も当然「谷埋土」とすべきであるが、平成14年度に実施された農学部校舎他改修（解剖実習棟校舎新営）に伴う発掘調査[註1]において検出され、旧河川埋土として報告された堆積土層との類似から敢えて区分して設定したものである。

写真37から分かるように、谷埋土は調査区西部の広範囲に検出された。この状況は、昭和41年に実施された、本調査区に北接する家畜病院建設に伴う発掘調査[註2]で確認された遺物包含層（黒色粘土層）の分布範囲とも一致するようである。ただし、この調査では層上面の検出に止まったため、河川埋土の掘削調査は実施されていない。

この３次に及ぶ調査では、いずれも谷（下流では旧河川）の右肩部を検出しているため、谷幅の全貌を把握できないが、本調査区では肩部から緩やかに北東から南西へ降下しており、調査区西端部においてやや傾斜を強め降下しつつも未だ谷底へとは達していないようである。この状況からして、本調査区地点で谷幅は少なくとも15m以上あるように推測される。

堆積時期に関しては、最上層（NR1－L1）に少数ながら瓦質土器が混ざることから、谷が完全に埋没する時期は中世にまで降るようである。また谷埋土下層（NR1－L3）に包含される遺物については、７世紀後半から８世紀前半の須恵器を主体としながらも８世紀後半の土器が散見され、上層（NR1－1・2）に包含される遺物には９世紀代の須恵器を主体としながら中世土器も散見される。いずれにせよ丘陵及び谷上部からの流入土であるため厳密な埋没時期の特定はほぼ不可能な状況と言える。

また、遺物相の特徴としては、下流に位置する解剖実習棟校舎新営に伴う発掘調査区では多量の製塩土器を始め緑釉陶器、鞴羽口、墨書土器など特徴ある遺物が数多く出土しているが、本調査区の谷埋土では遺物の総量に比すとそれらの遺物が極めて少なく、極少量の製塩土器、緑釉陶器、硯が見られるのみである。この様相が直接的に何を示すかは定かではないが、遺物の流入元となった周辺の集落構造の相違が反映されている可能性もあり、注意が必要であろう。

以上、確認した遺構等の概要を記した。調査区の北半部がすでに破壊を受けていたこともあり、限定的な範囲を対象としての調査となったため、遺構の規模および配置関係に未だ不明確な点を数多く残す。北接する家畜病院建物下に遺構が存する可能性は極めて乏しいが、調査区南面に広がる空閑地（駐車場）下には良好に遺構・遺物が遺存する筈である。今後の調査において更に面的な遺構の確認を行う必要があろう。

［註］

１）a：田畑直彦（2002）「山口大学構内吉田遺跡－農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査略報－」,山口考古学会（編）『山口考古　第22号』,山口

b：田畑直彦（2004）「第８章６．平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

２）横山成己(2007)「付篇　吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口

（横山）

写真 35　遺物包含層（L3）上面検出状況（北東から）

写真 36　水田暗渠（溝1）完掘状況（南西から）

写真 37　谷埋土上面検出状況（北東から）

写真 38　谷埋土掘削状況（南東から）

写真 39　谷埋土3層底面（北から）

写真 40　谷埋土3層底面遺物出土状況（西から）

写真 41　調査区東部遺構検出状況（北から）

写真 42　調査区東部遺構半掘状況（西から）

写真 43　調査区西部遺構検出状況（北東から）

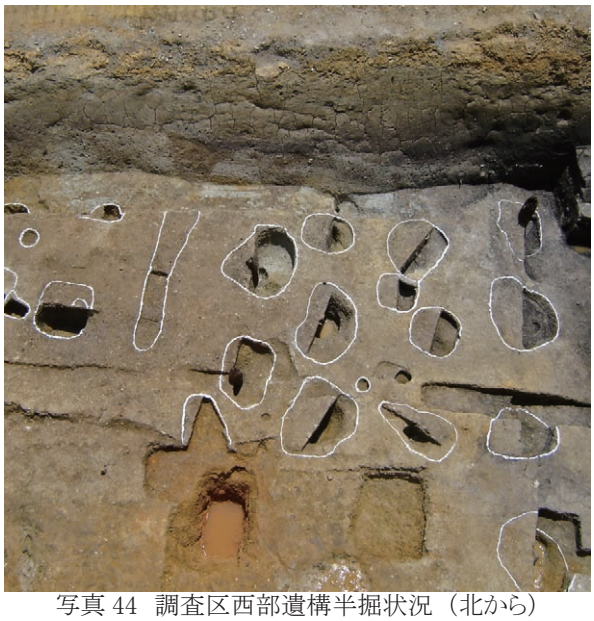


写真 44　調査区西部遺構半掘状況（北から）

写真 45　調査区全景（北東から）

写真 46　掘立柱建物跡2・3（南東から）

写真 47　調査区西端部流木出土状況（南から）

写真 48　調査区南壁土層断面（北東から）

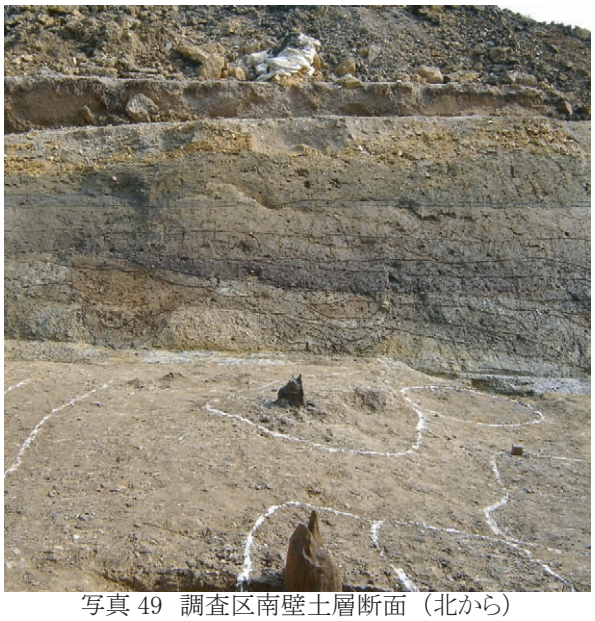


写真 49　調査区南壁土層断面（北から）

写真 50　調査区南～西壁土層断面（北東から）

写真 51　記者発表の模様（東から）

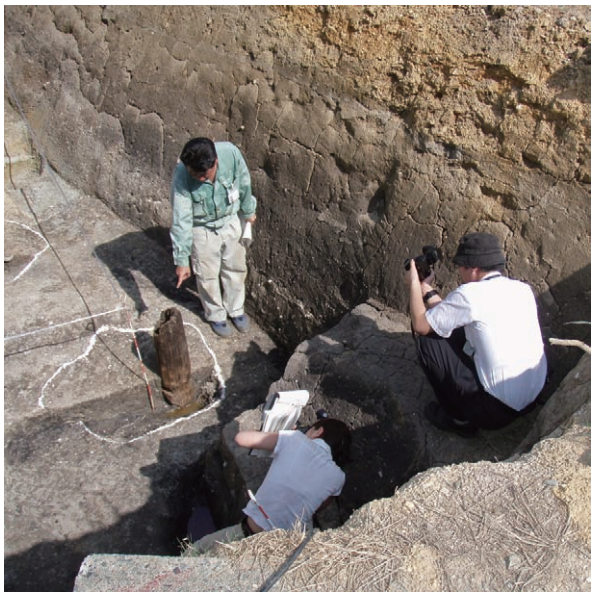


写真 52　記者発表の模様（西から）

（５）遺物（図15～36、表３～５、写真53～85）

ここでは、本調査において出土した遺物を、土器・石器・木器の順に遺構・層位別に記述する。なお、調査地西部は傾斜地であるため、掘削時の遺物包含層の厳密な区分が困難であった。よって上下層どちらの所属とも判別がつかない場合は、「境界層」として報告を行う。

【土器】

掘立柱建物跡３（図15-１～４、写真53）

１～３は須恵器。その内**１・２**は甕。**２**は外面に平行タタキ、その上からはハケがうっすらと確認される。内面には同心円文の当て具痕が見られ、擦り消しナデは見られない。当て具痕の溝は中心から外に向かって８本確認され、径は5.8㎝以上。溝の深さは最大約３㎜。**３**は皿蓋か。内面には幅５㎜程の板状工具による不定方向のナデが確認される。**４**は土師器甕。口縁端面に浅い凹線を巡らし、端部は尖り気味におさめる。体部は内外面ともにハケ後、ナデ調整。（口縁部はヨコナデ調整。）

掘立柱建物跡２（図５-15、写真53）

５～11は須恵器。**５～８**は高坏。調整はロクロナデ。**５**は裾を短く下垂させるもの。短く、やや尖り気味におさめる。**６**は脚端部内面に極浅い凹線を巡らし、裾をわずかに下方へ向かせて丸くおさめる。**７**も脚端部内面に極浅い凹線を巡らすが、裾は外方へ向く。**８**は脚端部を下方へ強く屈曲させた後に外反させるもの。裾は丸くおさめる。**９**は高坏か。口縁部外面には横方向に走るカキ目が観察される。10は甕。外面には平行タタキの上にハケが観察され、内面には同心円文の当て具痕の上に擦り消しナデが確認される。当て具痕の溝は中心から外に向かって7本確認され、径は5.4㎝以上。溝の深さは２㎜前後。11はハソウ。調整はロクロナデ。ただし、底部外面は無調整。底部内面中央には、同心円文の当て具痕が残る。外面には凹線が４条確認され、肩部の凹線の上下には櫛描き列点文が施される。12～15は土師器甕。12は外面にハケが観察され、内面には指押さえ痕が残る。13は口縁部外端に鈍い稜が入る。体部にはハケ、口縁部にはヨコナデを施す。15は外面にはハケが観察されるが、内面は風化のため不明。

掘立柱建物跡１（図15-16、写真54）

16は須恵器の高台付皿か。風化が著しく調整は不明。

SP3（図15-17、写真54）

17は土師器甕。

土壙4（図15-18、写真54）

18は平瓶。外面はハケ後、擦り消しナデ。内面はロクロナデ。内面中央には風船技法の痕跡が観察される。

溝2（図15-19、写真54）

19は円面硯。肩部に低い突帯が付くもの。調整はロクロナデ。

NR1-L3・遺物包含層L4境界層（図16-20～38、写真54・55）

20～32は須恵器。20～24は坏蓋。20は比較的高い器高を持つ。天井部から口縁部に向かって直線的に下がるため、台形状を呈す。口縁端部は少し肥厚する。天井部と口縁部との境の外面には鈍い稜が巡る。天井部外面はヘラ起こし後、一方向ナデ。他はロクロナデ。21はロクロナデ調整。22は小型の坏蓋。口縁端部が鋭く外方へ伸びるもの。天井部から口縁部との境までロクロヘラ削りを施す。23は特に扁平な天井部から下方へ強く屈曲させて口縁部に至る。口縁端部外面には段あり。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。短頸壺蓋の可能性もある。24は天井部外面に鈍い稜

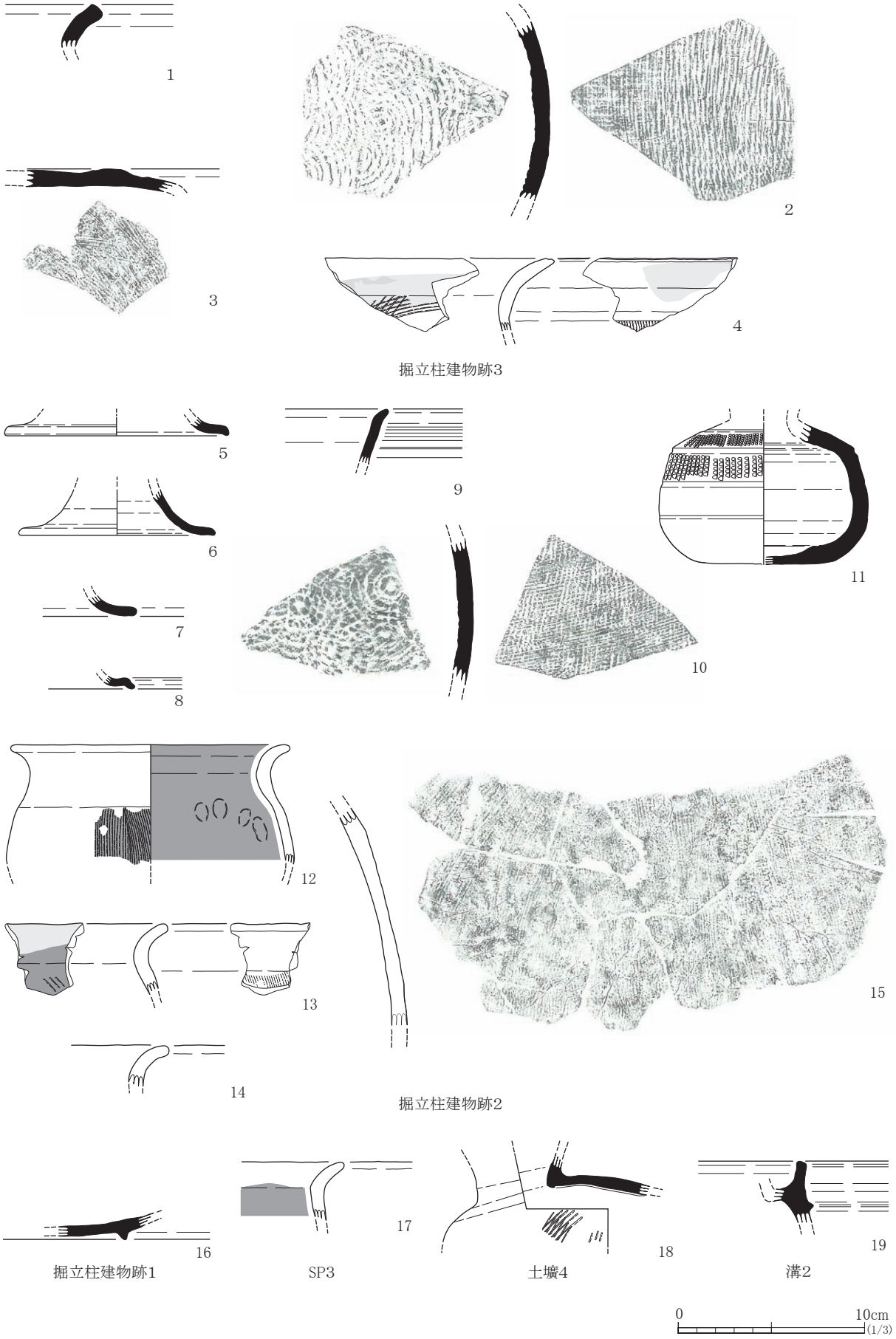


図 15　出土遺物実測図 (土器)①

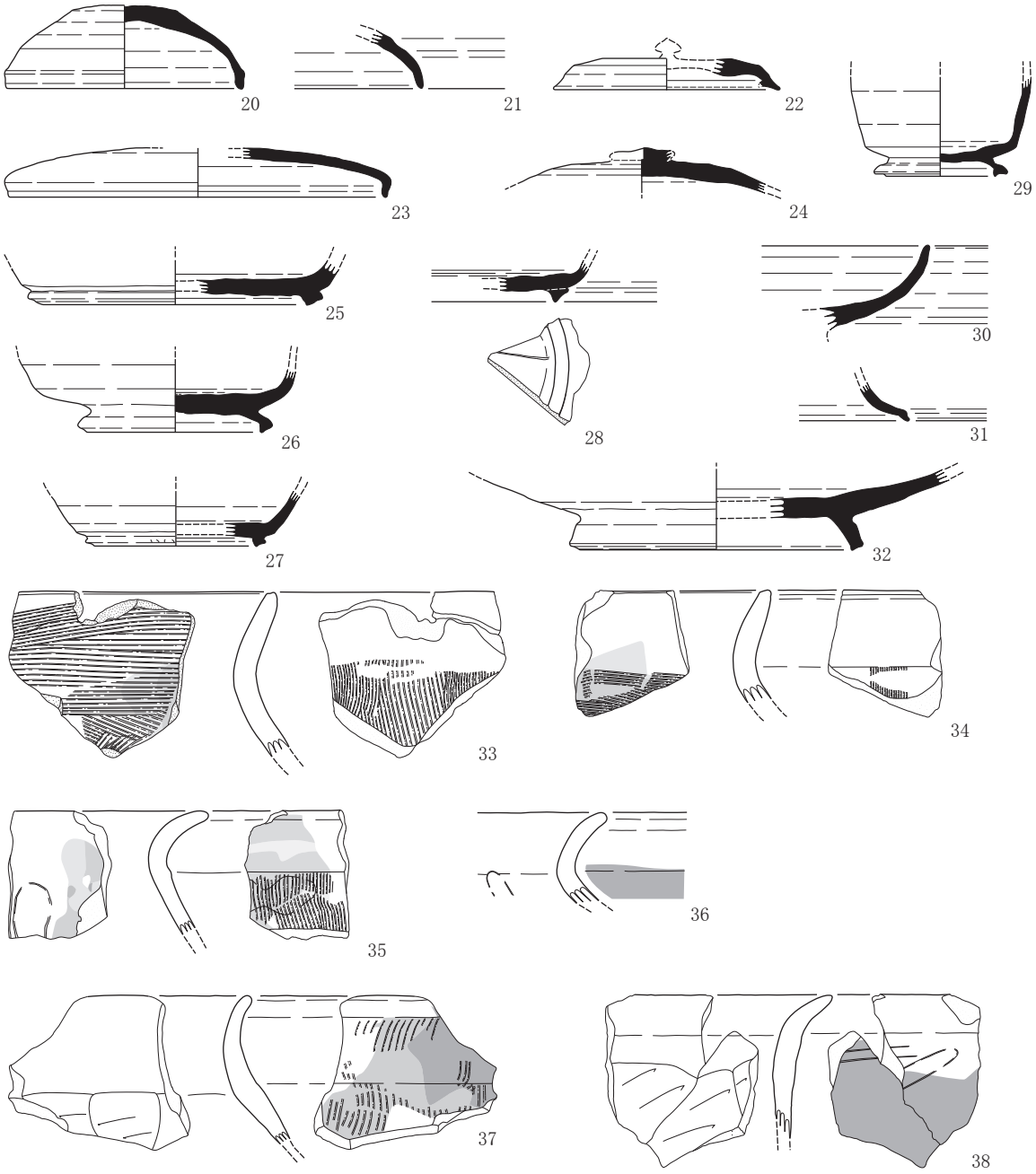
を持つ。天井部から口縁部とを分ける稜まではロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ調整のみ。25〜28は高台付坏身。高台が高いもの(26)と低いもの(25･28)、小さい高台のもの(27)がある。26は歪みが目立ち、高台も片側に寄っている。底部が厚く特徴的。高台は外方に強く張り出すもので、高台内端は突出している。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、無調整。他はロクロナデ。25は体部の立ち上がりに稜が入る。調整はロクロナデ。ただし、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。内面には不定方向のナデを加える。28は高台内端を著しく突出させる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整か。底部外面にはヘラ記号を持つ。27は体部の立ち上がりに稜が入る。高台内端を突出させる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整か。29は高台付壺か。器壁が薄く、作りは丁寧。外方に張り出した高台を持ち、高台内端が突出する。底部外面はヘラ起こし後、無調整。底部内面は風化のため不明。他はロクロナデ。30･31は高坏。調整はロクロナデ。30は口縁端部が摩耗している。31は脚端部が下方へ屈曲した後に外反するもの。裾は丸くおさまる。32は高台付壺か。盤の可能性もある。調整はロクロナデ。内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、ロクロヘラ削り。33〜36は土師器甕。33･34は直線的に外方に開く口縁部を持ち、端部を角張らせておさめる。内外面ともハケが観察される。33は口縁部端面に浅い凹線を巡らし、口縁部内面には擦り消しナデを施す。34は口縁端部外面の直下に極浅い凹線が巡る。33と同一個体の可能性がある。35は口縁部が強く外反し、口縁部と体部との境の外面には稜が入る。体部外面にはハケが確認され、体部内面には指押さえと縦方向のナデが観察される。口縁部は内外面ともヨコナデ調整。36は直線的に外方へ大きく開き､端部付近から外反する口縁部を持つ。風化のため調整は不明。37･38は弥生土器甕か。37は外面に粗いハケが観察され、体部内面には横方向のヘラ削りが見られる。38は体部が直線的に立ち上がり、口縁部から強く外反して尖り気味におさまる。体部内面には横方向のヘラ削りが施され、他はナデ調整。

谷埋土NR1-L3図面取り上げ遺物（図16-39〜43、写真55※出土状況は写真39・40）

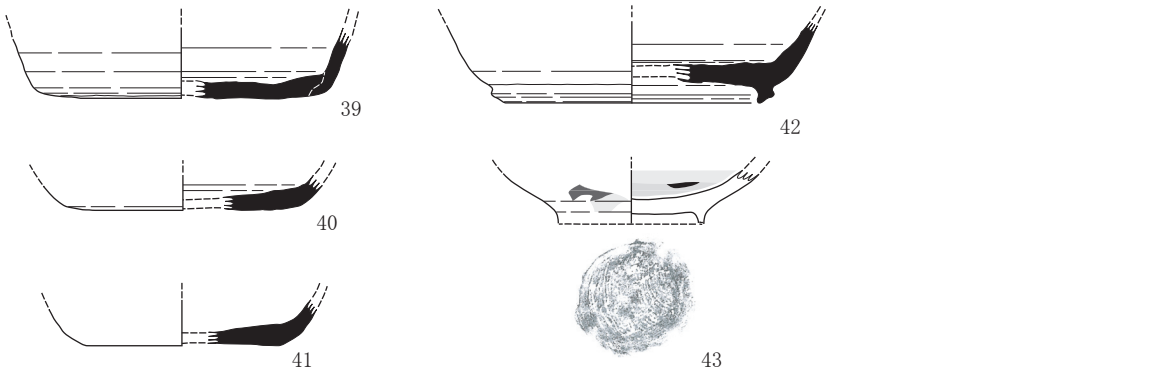
39〜42は須恵器。39〜41は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整。42は高台付坏身。高台内端を突出させる。調整は39〜41と同様。43は高台付土師器皿。高台は貼り付けられており、底部外面には糸切り痕が認められる。底部内面の中心に直径約１㎝、深さ５㎜程の凹みがあるが、意識的なものかは不明。破面から見て焼成後に穴が空いたと考えられる。内面と一部外面とに炭が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。

谷埋土NR1-L3底面（図17-44〜85、写真56・57）

44〜77は須恵器。44〜55は坏蓋。44はドーム状を呈し、天井部と口縁部との境は不明瞭なもの。口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。天井部外面はヘラ起こし後、無調整であるが、摩耗して平滑になっている。45〜55の調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。45は平坦な天井部を持ち、口縁部との境が括れるもの。口縁は嘴状を呈し、端部は尖り気味におさまる。口縁端部外面には鋭い稜が入り、その直下には凹線が巡る。天井部外面にはうっすらとカキ目が観察される。46は平坦な天井部からゆるやかな曲線を描きながら下方へ伸びて口縁に至るもの。口縁端部外面に凹線が巡り、端部は尖り気味に丸くおさまる。47は天井部と口縁部との境に段を持つもの。ボタン状の扁平なつまみが付く。端部外面には凹線が巡り、端部内面には段が巡る。端部は丸くおさまる。天井部外面はヘラ起こし後、無調整か。48は非常に扁平な器形で、天井部と口縁部との境が不明瞭なもの。口縁端部は短く下垂し、尖り気味に丸くおさまる。50は皿の可能性もある。肩が張った天井部



NR1-L3・遺物包含層L4境界層



谷埋土NR1-L3図面取り上げ遺物

図 16　出土遺物（土器）②

から直線的に伸びて口縁に至り、端部は尖り気味におさまる。内面に他の個体の熔着あり。51は平坦な天井部から曲線を描きながら下方へ伸びて口縁に至るものか。端部は丸くおさまる。天井部と口縁部との境の外面には極細い凹線が巡る。52はゆがみが著しい。口縁端部外面には凹線を巡らし、端部は丸くおさめる。天井部外面に他の個体の熔着あり。53は特に扁平な天井部から下方へ強く屈曲し、口縁端部は尖り気味におさまる。54は口縁端部が尖り気味に丸くおさまる。天井部と口縁部との境の内面に極浅い凹線が巡る。55はかえりが接地するもの。口縁端部は短く下垂して丸くおさまる。56～61は高台付坏身。高台の高いもの(56・57)、低いもの(58～64)、小さいもの（65）に分けられる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加えるものが多い。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。56は扁平丸底の底部から直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。体部の立ち上がりに鈍い稜を持つ。高台内端を突出させる。底部内面はロクロナデ調整のみ。57は全体的に器壁が薄く、丁寧な作り。58は平らな底部から内湾気味に立ち上がり、体部上半から直線的に伸びるもの。高台内端をわずかに突出させる。外面に他個体の熔着あり。59は高台内端を少し突出させるが、端部は厚く丸い。60は高台が体部の立ち上がりより内側に付く。高台の内端は著しく突出する。底部外面にヘラ記号あり。61は高台が体部の立ち上がりより内側に付き、内端は少し突出する。底部外面にヘラ記号あり。62は断面三角形に近い高台を持つ。63は高台内端を突出させ、端部は丸くおさめる。64は高台が体部の立ち上がりよりやや内側に付き、高台内端は少し突出する。65はやや小さい高台を持ち、高台は断面方形に近い。66は坏身。調整はロクロナデ。67は皿。平坦な底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部で外反して丸くおさまる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整。68～72は高坏。調整はロクロナデ。68は外面に１条の凹線が観察される。69は脚部に１条の凹線あり。70は強く屈曲した後に外反する脚端部を持ち、裾は丸くおさまる。71は脚端部が下垂するもの。裾はやや尖り気味におさまる。72は脚端部内面に凹線を巡らし、裾を下方へ向けて丸くおさめる。73・75・76は甕。73は頸部外面に２条の凹線と波状文を持つ。調整はロクロナデ。頸部内面には不定方向のナデを加える。体部内面には同心円文と思われる当て具痕が残る。75は風化のため調整は不明。76は口縁内端を少し突出させる。外面には平行タタキ、内面には同心円文の当て具痕が認められる。74は壺か。外面にヘラ記号有り。77は長頸壺。頸部上半に１条の凹線が観察される。調整はロクロナデ。78～81は土師器。78は坏。内湾する体部から口縁部へと至る。体部内面にヘラミガキが観察される。79は高坏。80・81は甕。体部外面にハケ、口縁部にはヨコナデを施す。80は口縁部と体部との境の内面に稜を持つ。82は鞴羽口。83は黒色土器椀。内黒。内湾して立ち上がり口縁部で外反して丸くおさまる。内面には幅3.5㎜程の横方向のミガキが観察される。84は土師質土器か。ロクロを用いて作られたと考えられる。底部しか残っていないため器形は明確ではないが、高台付椀か。高台は体部の立ち上がり付近に貼り付けられている。底部中央には、焼成後に開けたと考えられる径1.5㎜程の穿孔が観察される。調整はヨコナデ。85は白磁椀か。

谷埋土NR1-L3（図18-86～126、写真58・59）

86～91は須恵器。86は坏蓋。扁平で小さなつまみを持つ。調整はロクロナデ。87は坏身。底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。88・89は高台付坏身。調整は底部内面に不定方向のナデ、他はロクロナデ。88は特に低い高台を持ち、高台内端を少し突出させる。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。89は厚い底部と大きな高台を持っており、高台付壺の可能性もある。高台内端は突出させる。90は皿。扁平丸底の底部から外反して短く立ち上がり、端部は丸くおさまる。口縁部と底部との境の外面に稜が入る。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナ

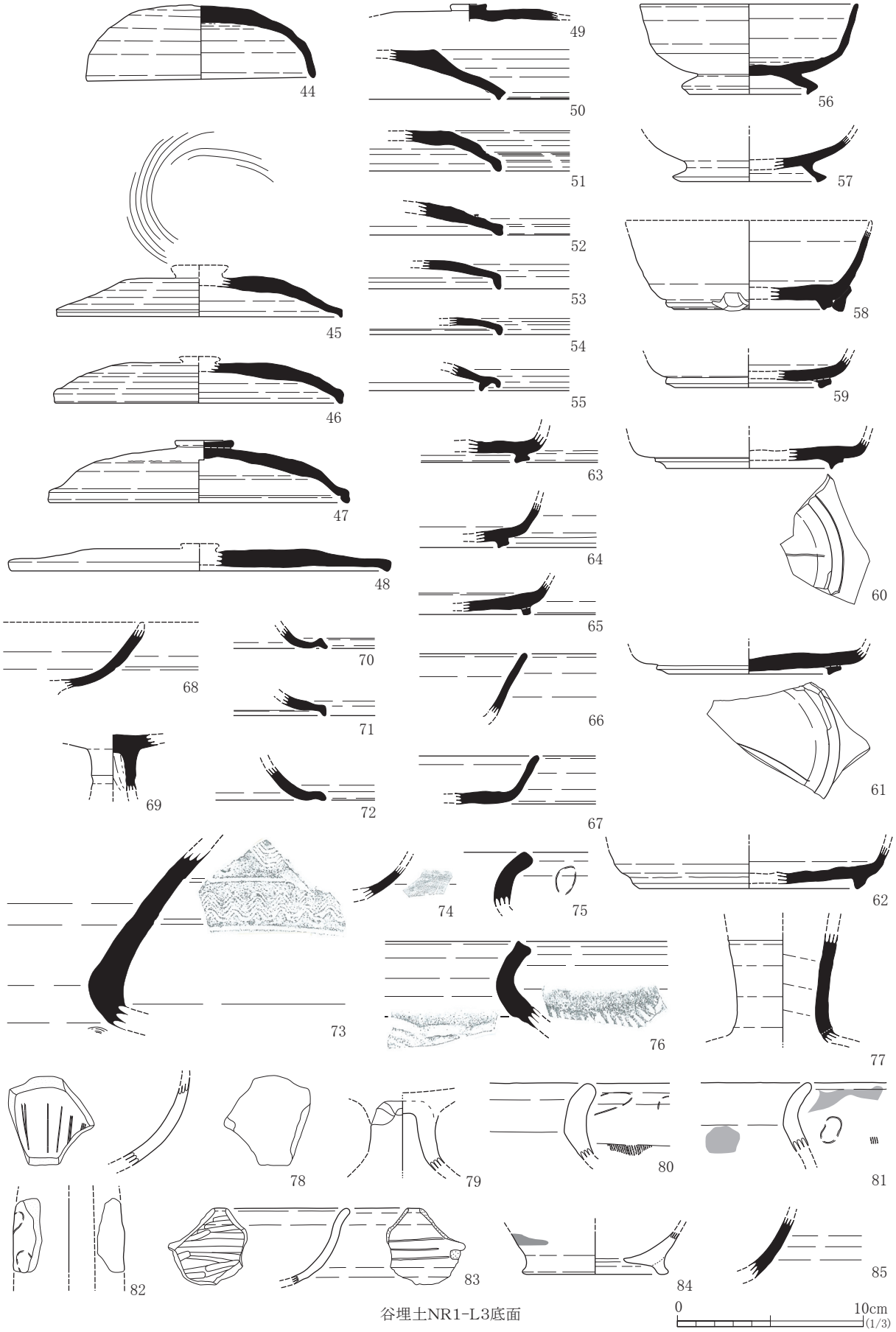


図 17　出土遺物実測図（土器）

デを加える。91は器壁が厚く、壺か。内面はロクロナデ調整、外面は無調整のままか。底部外面にはヘラ記号あり。92は土師器坏。口縁部は薄く、尖り気味におさまる。風化が著しく調整は不明。93は弥生土器の支脚。風化が著しく調整は不明。94〜123は須恵器。94〜98は坏蓋。94は風化が著しいため器形が鈍く、調整も不明。95は口縁部と天井部との境の外面に段を持つものと思われる。天井部外面にはヘラ起こし後に粗いナデ、内面には不定方向のナデが観察される。96は口縁端部外面に凹線を巡らし、端部をやや内側に屈曲させて丸くおさめる。調整はロクロナデ。97はロクロナデ調整。98は蓋か。坏身の可能性もある。丸味を帯びた天井部から内湾気味に下がる。調整はロクロナデ。天井部外面にはヘラ起こし後、ナデを施す。天井部内面にヘラ記号あり。99〜101は甕。調整はロクロナデ。101は頸部の破片か。外面に１条の凹線を巡らし、その上部に波状文を施す。102〜106・109〜117は高台付坏身。高台が高いもの(102・109〜111)と低いもの(103〜105・112〜115)、小さいもの(106・116・117)に分けられる。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のものが多い。102は高台径が小さく、壺の可能性もある。外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を突出させる。底部外面はヘラ起こし後にロクロナデ調整か。109は外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を突出させるが、風化のために丸い。110は外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を少し突出させるが、端部は丸い。高台接合部外面に接合の際に用いたと思われる工具の痕跡が残る。111は高台付皿の可能性もある。103は体部の立ち上がりに稜が入る。104は高台が大きく、壺の可能性もある。高台内端を突出させる。全体的に焼きぶくれが目立つ。105は高台内端を少し突出させるが、風化が著しく全体的に鈍いため、詳細な形状は不明。112は高台内端を突出させず、端部は丸くおさめる。113は高台が体部の立ち上がりより内側に付く。高台内面に板状工具でナデ調整を施したと考えられる痕跡が残る。高台内端は強く突出する。114は高台内端が内湾気味に突出する。端部は摩耗している。115は特に低い高台を持つ。高台内端をわずかながら突出させる。106は底部からやや内湾気味に立ち上がり、体部上半からは直線的に外方に伸びてやや尖り気味におさまる。高台は外傾で、外端が接地するもの。116は高台内端が突出し、下端は摩耗している。117は高台の断面は方形を呈す。107・118は坏身。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。ただし、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。107は底部外面が摩耗している。108は高台付皿か。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。自然釉が付着している。119〜122は高坏。調整はロクロナデ。119・120は脚部に１条の凹線が巡る。121は短脚高坏。ロクロナデ調整は脚部内面全体に及ぶ。122は口縁部外面に２条の段を持つ。123は土師器甕。124は黒色土器椀。内黒。内面には幅3.6㎜程の横方向のミガキが観察される。125は土師質土器か。貼り付け高台を持つ。風化のため調整は不明。126は緑釉陶器。椀か。平坦な底部と高い高台を持つものと考えられる。色調はオリーブ灰色(2.5GY5/1)で、これまでに吉田遺跡から出土した緑釉陶器と比較すると、釉薬の残存状況も良く、色調も濃い。

谷埋土NR1-L2（図19-127〜138、写真59）

127〜133は須恵器。127〜129は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。127は平らな底部から直線的に立ち上がり、体部上半からは内湾気味に伸びて口縁端部は丸くおさまる。130・131は高台付坏身。ロクロナデ調整。130は底部から直線的に立ち上がり、体部上半からはやや外反して口縁端部は丸くおさまる。131は風化が著しく、全体的に鈍い。高台の接合痕が明瞭に残る。132は高台付皿。風化が著しいために全体が鈍く、調整も不明。133は壺蓋。口縁部を外反させて端部は尖り気味におさめる。天井部と口縁部との境まで、

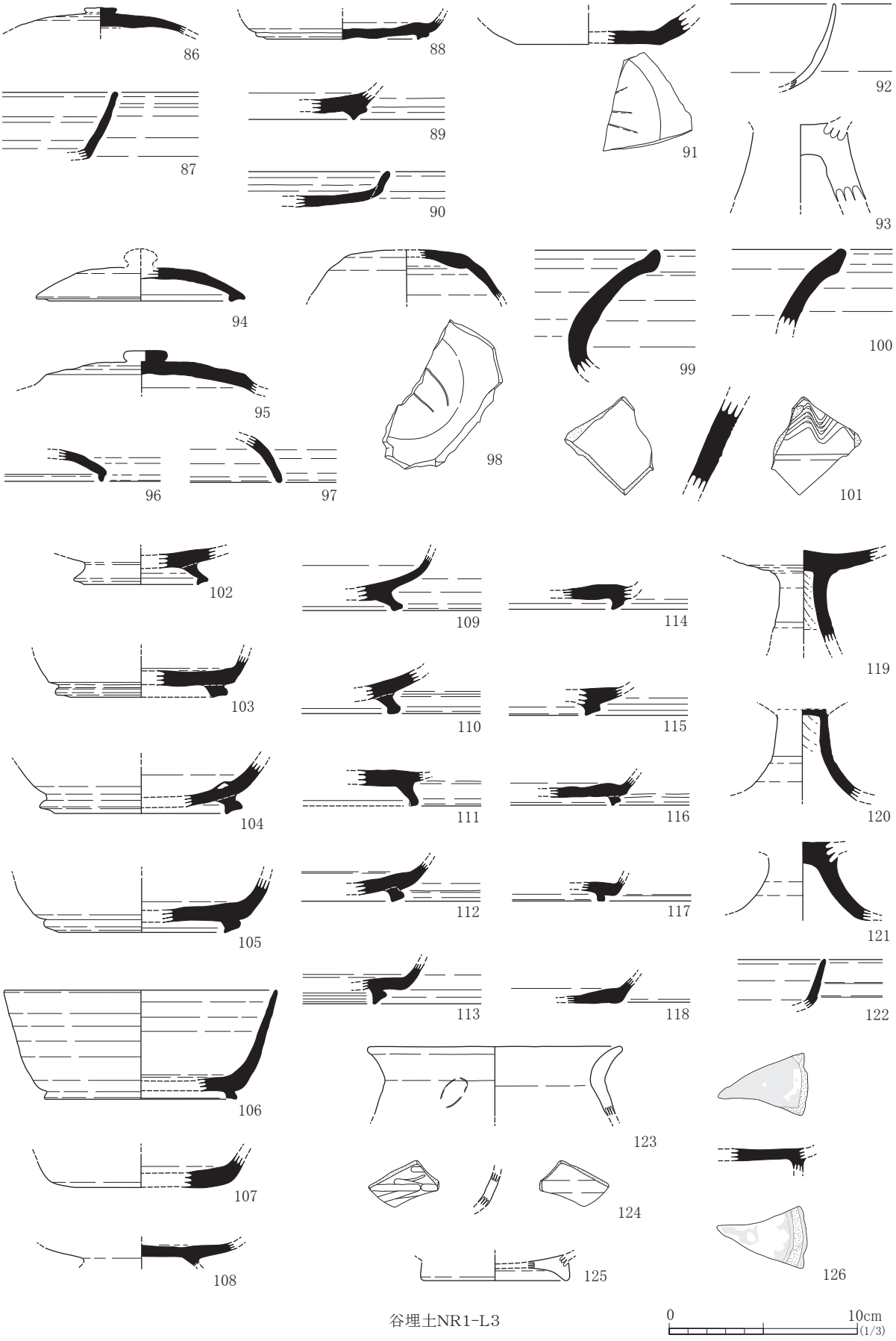


図 18　出土遺物実測図 (土器)④

外面にロクロヘラ削り後ロクロナデを施す。他はロクロナデ。134～136は土師器。134は皿。135も皿か。ともに風化が著しく調整は不明。136は高台付皿か。貼り付け高台を持つ。風化のため調整は不明。137は黒色土器椀。内黒。内面には幅3.5㎜程の横方向のミガキが観察される。124と同一個体と考えられる。138は製塩土器。内面には非常に目の細かい布目痕が観察される。

谷埋土NR1-L1（図19-139～167、写真60・61）

139～161は須恵器。139～146は坏蓋。調整はロクロナデ。141は天井部と口縁部との境が括れる。口縁端部は嘴状を呈し、尖り気味に丸くおさまる。天井部外面中央はヘラ起こし後、無調整か。天井部内面には不定方向のナデが施されている。142は端部内面には凹線が巡る。143は口縁部外端に鈍い稜が入る。144は口縁部外端に鋭い稜が入る。145は口縁端部を丸くおさめる。146は口縁端部を尖り気味に丸くおさめる。147～154は高台付坏身。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。低い高台を持つもの(147～151)と小さい高台を持つもの(152～154)とに分けられる。147は高台が体部の立ち上がりより内側に取り付き、体部の立ち上がりに鈍い稜が入る。高台内端は突出する。148は高台外面に工具で削った際に付いた痕跡なのか、粘土がよれた跡が残り、高台外端に鋭い稜が入る。高台内端は摩耗しているために丸い。149は風化が著しく全体的に鈍いため、詳細な形状は不明。150は高台を体部の立ち上がりより少し内側に貼り付ける。高台内端は突出する。151は特に低い高台が付く。貼り付け痕が明瞭に残る。高台は風化のために鈍く、詳細は不明。152は高台は断面方形に近い。底部と体部との境の内面に低い段あり。ナデに伴うものか。153は平坦な高台端面を持つ。154は高台内端を少し突出させる。155～157は坏身。155はロクロナデ調整。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。156・157は風化のため調整は不明。同一固体の可能性あり。158・159は高坏。調整はロクロナデ。158は脚部に１条の凹線を持つ。159は脚端部が下方へ強く屈曲した後に外反するもの。脚端部外面に段あり。160は緑釉陶器椀か。色調はオリーブ黄色(7.5Y6/3)を呈し、釉薬の残存状況も良くなく、色合いは薄い。161～164は青磁。162・163は同安窯で生産されたものか。165～167は土師器。165は高台付坏身か。貼り付け高台を持つ。風化のため調整は不明。166は坏か。底部内面には不定方向のナデが確認され、他にはヨコナデが認められる。167は皿か。風化が著しく調整は不明。

谷埋土NR1-L1・L2境界層（図19-168～171、写真61）

168～170は高台付坏身。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。168は高台が体部の立ち上がりより内側に付き、高台内端は少し突出する。169・170は小さな高台を持つもの。高台の断面は方形に近い。170は高台端面の摩耗が著しく詳細不明。171は獣硯の脚部片か。

谷埋土NR1※層位不明（図19-172～173、写真61）

172は坏蓋。天井部と口縁部との境に段を持ち、口縁端部は丸くおさめる。調整はロクロナデ。天井部内面は不定方向のナデ調整、天井部外面は無調整。173は高台付坏身。高台内端を突出させる。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向ナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整か。

谷埋土NR1検出時・上部包含層との境界層（図19-174～177、写真61）

174は高台付坏身。高台の貼り付け方は粗い。底部内面には不定方向のナデを加え、他はロクロナデ調整。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。175は皿。口縁部内面には１条の凹線が巡り、端部は尖り気味におさまる。調整はロクロナデ。176は皿か。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。177は内面に付着した墨から蓋を転用

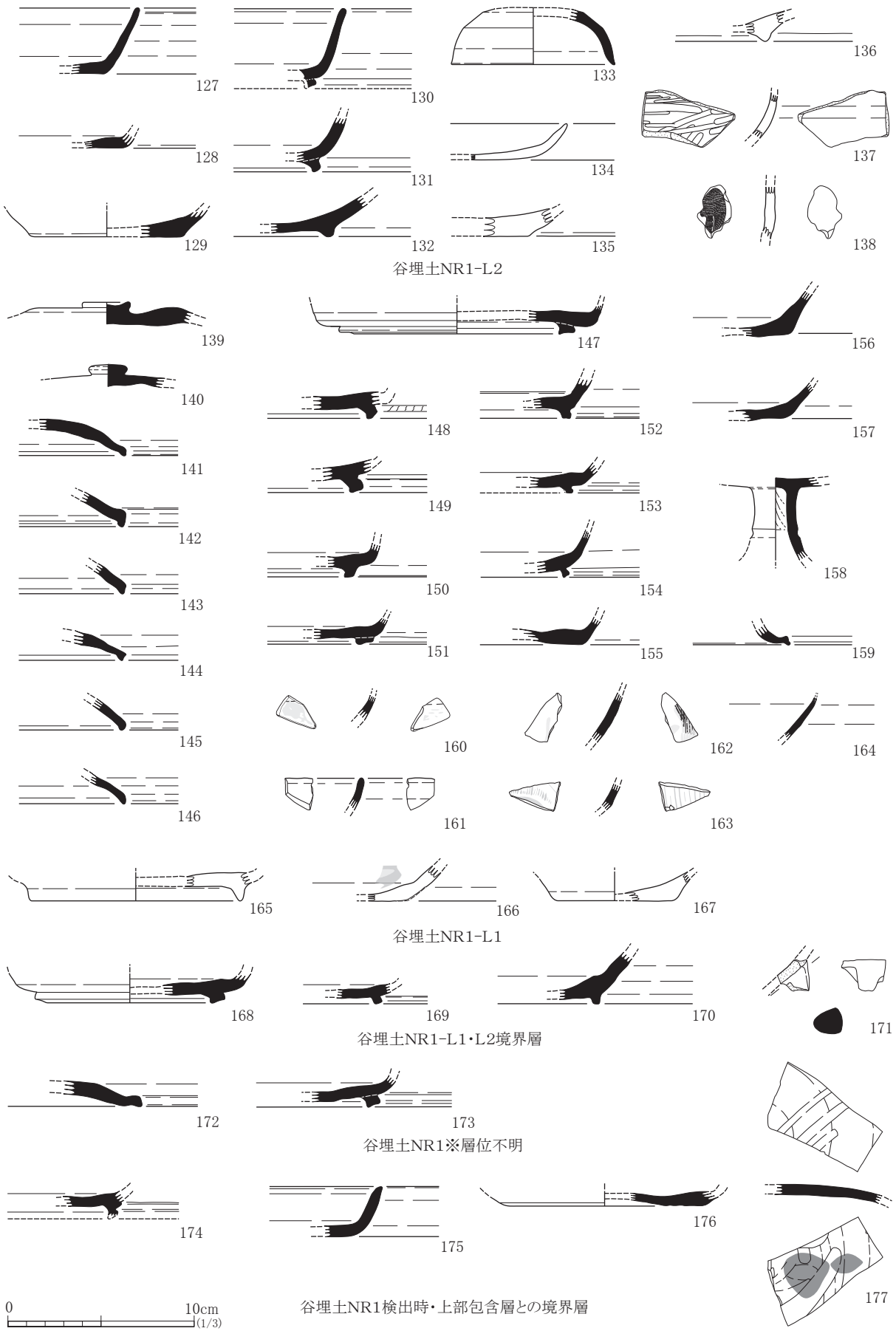


図 19　出土遺物実測図（土器）⑤

した硯と考えられる。外面にはロクロナデの上から幅3㎜程のナデを加えた痕跡が観察される。内面は不定方向のナデ調整。

遺物包含層L6（図20～23-178～283、写真62～69）

178～257は須恵器。178～180、183～205は坏蓋。178～180・194はロクロナデ調整。天井部内面には不定方向のナデを加える。178はドーム状を呈するが、口径が比較的大きいため扁平な器形のもの。天井部から強く屈曲して、口縁端部は内面側にわずかに肥厚して尖り気味に丸くおさまる。天井部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。外面に墨らしき痕跡が残るが、明らかでない。179・180・194はドーム状を呈し、天井部と口縁部との境が不明瞭なもの。天井部外面にはヘラ起こし後にナデを施す。179は口縁端部が外反して丸くおさまる。180・194は口縁端部が丸くおさまる。183～187・195～202はかえりを持つもの(183～186・195～199)と持たないもの(187・200～202)とに分かれる。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。183は天井部と口縁部との境が括れ、口縁は外方へ向く。天井部から括れにかけてロクロヘラ削り後にロクロナデを施す。184・185は器壁が厚く、かえりは短い特徴で共通する。184は天井部1/2にロクロヘラ削り後、ロクロナデ調整。185は天井部と口縁部との境が括れる。風化のため調整は不明。186は扁平な天井部を持つ。186は天井部と口縁部との境に２条の浅い凹線を巡らし、括れを持たせる。口縁端部外面にも１条の極浅い凹線を巡らす。天井部から括れにかけてロクロヘラ削りを施した後、ロクロナデを施す。端部は下垂させて丸くおさめる。195は口縁端部を下方へ屈曲させて丸くおさめる。口縁端部を除く範囲にロクロヘラ削りを施した後、ロクロナデを施す。196は口縁端部が外方へ伸び、丸くおさまる。197・198は尖り気味におさまる短いかえりを持つ。198は天井部外面ほぼ全体にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。199は口縁端部が下垂し、尖り気味におさまる。かえりが大きく特徴的。187は扁平な天井部から下方へ強く屈曲して丸くおさまる。天井部外面ほぼ全体にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。200は特に扁平な天井部から下方へ強く屈曲させて口縁部に至る。口縁端部外面には段あり。201は口縁端部が強く屈曲してやや尖り気味におさまる。202は口縁端部が弱く屈曲して丸くおさまる。焼き膨れが目立つ。188～205は小型の坏蓋。かえりが接地するもの(188～192・205)と口縁が接地するもの(193・203・204)に分かれる。口縁が接地するものには天井部内面に不定方向のナデが観察される。188・189は一段盛り上がった天井部にロクロヘラ削りを施して平坦な天井部を形成するもの。調整はロクロナデ。188は口縁端部は下方へ向く。鈍い宝珠形のつまみを持つ。189は口縁端部が外方に伸びて丸くおさまる。190は口縁端部が下方へ強く屈曲して尖り気味におさまる。かえりも下方へ伸びて尖り気味におさまる。調整はロクロナデ。191は口縁端部を丸くおさめるが、鋭いかえりを持つ。天井部外面3/4の範囲にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ。192は平らな天井部から口縁に向かって直線的に下方へ伸び､口縁端部は丸くおさまる。鋭いかえりを持つ。天井部外面3/4の範囲にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ。191と同一個体の可能性が高い。193は口縁端部を丸くおさめる。かえりはやや尖り気味におさめる。天井部1/2にロクロヘラ削り後、ロクロナデ調整。他はロクロナデ調整。天井部外面に他の個体の熔着あり。203は口縁端部とかえりとが下方へ向き、尖り気味におさまる。204は口縁端部が外方へ伸びるもの。口縁端部の器壁は薄く、かえりも鋭い。天井部1/2ほどの範囲にロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。天井部内面には不定方向のナデを加える。205は器高が比較的高く、天井部と口縁部との境に段を持つ。口縁端部は下方に屈曲して丸くおさまる。かえりはやや尖り気味におさまる。口縁端部以外の外面にはロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察できる。天井部内面には不定方向のナデ、他はロクロナデ調整。181・182は短頸壺の蓋か。181は天井部と口縁

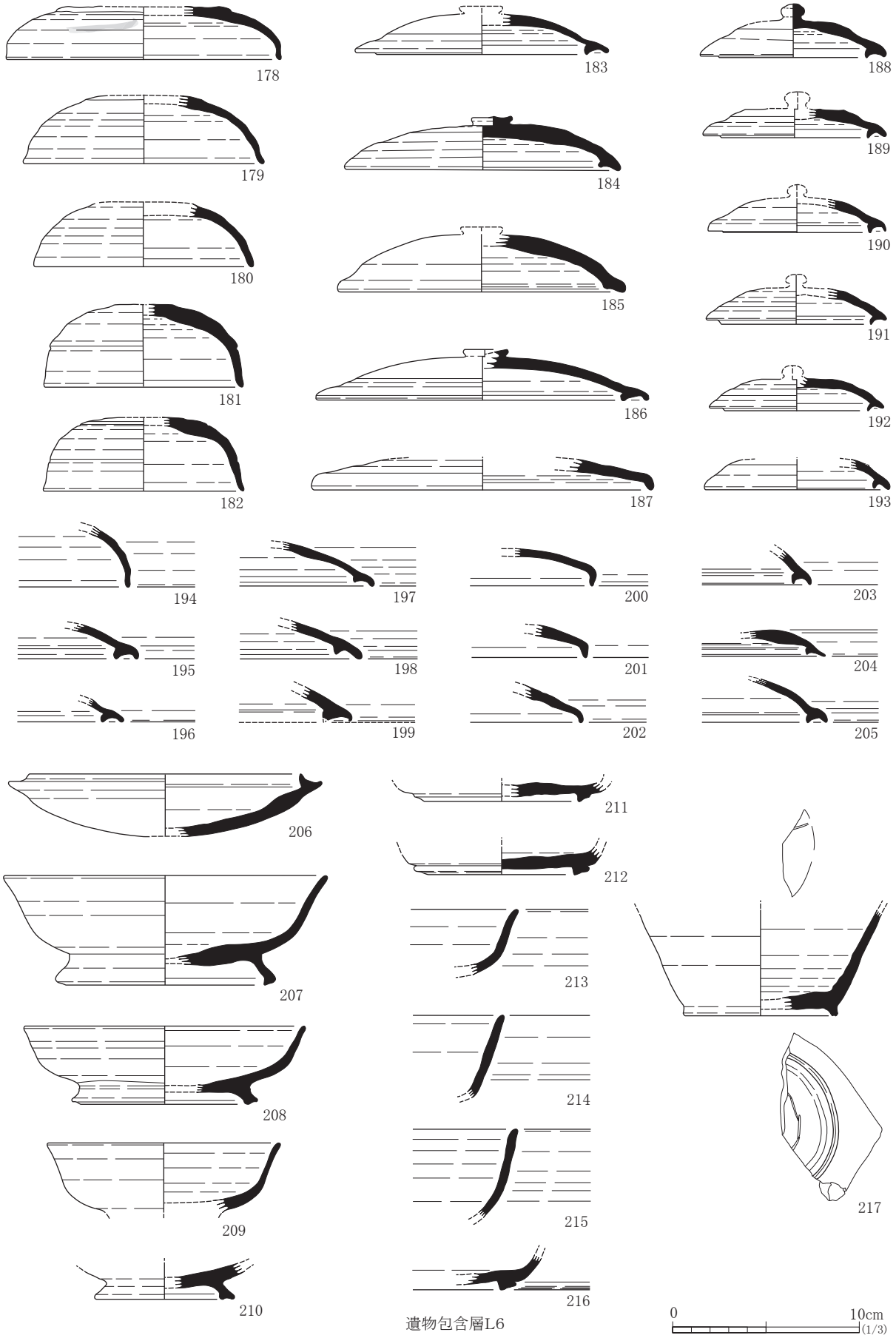


図 20　出土遺物実測図（土器）⑥

部とを分ける稜は突出させず、代わりに凹線を巡らす。また、口縁部内面に面を持ち、器形は大阪府陶邑窯MT15型式の坏蓋と類似している。しかし181は口径が小さく、異なる。天井部外面にヘラ起こし後にナデを施し、他にはロクロナデを施す。182も181と似た器形を持つが、凹線は天井部と口縁部との境より下で巡る。天井部外面中央にも１条の凹線が走る。口縁端部は外反して丸くおさまる。調整は181と同様。206は坏身。立ち上がりは内傾し、受部は外方に伸びる。調整はロクロナデ、底部内面には不定方向のナデが認められる。焼き膨れが目立つ。207～212は高台付坏身。高い高台を持つもの(207・208・210)と低い高台を持つもの(211・212・216)に分けられる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。207・208は高台が体部の立ち上がりより内側に付く。207は扁平丸底を呈した底部から内湾気味に立ち上がり、体部上半からは外反して口縁端部は丸くおさまる。高台は外方へ強く張り出し、高台内端は突出する。底部内面に施された不定方向のナデは中央付近に限られる。208は扁平丸底を呈した底部から直線的に外方へ開き、端部は丸くおさまる。外方へ強く張り出す高台を持つ。高台内端は突出するが、摩耗のため鈍い。高台の貼り付け痕が明瞭に残る。209は底部から直線的に立ち上がらせ、口縁端部を外反させて丸くおさめる。210は外方へ強く張り出す高台を持ち、高台内端を突出させる。211は高台が体部の立ち上がりよりやや内側に付き、高台内端を突出させる。212は高台内端をやや突出させる。213は口縁端部を外反させて丸くおさめる。214は口縁端部がやや尖り気味に丸くおさまる。風化が著しく調整は不明。215は内湾する体部から直線的に立ち上がり口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。椀の可能性もある。216は高台内端を少し突出させる。217は椀。平坦な底部から外方に開きながら直線的に立ち上がる。底部内外面ともにヘラ記号あり。218～242は高坏。調整はロクロナデ。坏部と脚部の両方が残る資料(218～225)、坏部のみの資料(228～230・235～241)、脚部のみの資料(231～234・242)がある。218は口縁端部が尖り気味に丸くおさまる。脚端部は下方に強く屈曲した後に外反するもの。裾は尖り気味に丸くおさまる。脚部中央辺りに１条の凹線が巡る。坏部外面2/3はロクロヘラ削り後、ロクロナデ。219は口縁端部を丸くおさめる。坏部外面に１条の凹線を巡らし、それより坏底部側にはロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。脚部中央辺りに１条の凹線を巡らせる。220は脚端部が下方に強く屈曲した後にわずかに外反して、裾は丸くおさまる。脚部中央辺りに１条の凹線が巡る。221は小さな坏部を持つ。平坦な底部からほぼ直角に立ち上がり、口縁端部は外反して尖り気味に丸くおさまる。坏部外面に段が３条巡り、脚部には凹線が２条走る。脚端部は下方に強く屈曲してわずかに外反し、裾は尖り気味におさまる。223は分厚い坏底部を持つ。風化のため調整は不明で、脚部の凹線も確認出来ない。224は脚部に浅い凹線を巡らす。風化のため調整は不明。225は脚部に凹線を巡らす。斜方向の浅い凹線も巡る。ナデを強く施した痕跡か。226・227は短脚の高坏か。226は坏部内面に不定方向のナデを施す。227は坏部と脚部の接合痕が観察できる。228は口縁がわずかに外反して尖り気味におさまる。229は口縁端部がやや外反して丸くおさまる。230は扁平丸底の底部から直線的に外方に開き、口縁端部でやや外反して丸くおさまる。外面には段を２条巡らす。235は口縁端部が肥厚して丸くおさまる。236は口縁端部を尖り気味におさめる。237は高坏か。口縁端部は丸くおさまる。坏底部と口縁部との境の外面には凹線が巡る。238は器壁は薄い。口縁端部が尖り気味におさまる。239は外面に段が２条巡る。坏底部外面にはロクロヘラ削り後にロクロナデが施されている。240は高坏か。器壁が非常に薄い。口縁端部は外反して丸くおさまる。端部内面には鈍い稜が入る。241は高坏か。器壁が厚く、口縁端部はやや尖り気味におさまる。231は脚部に１条の凹線が確認できる。脚端部は下方に強く屈曲した後にやや外反し、裾は丸くおさまる。端部の摩耗が確認される。232は脚部が直線的

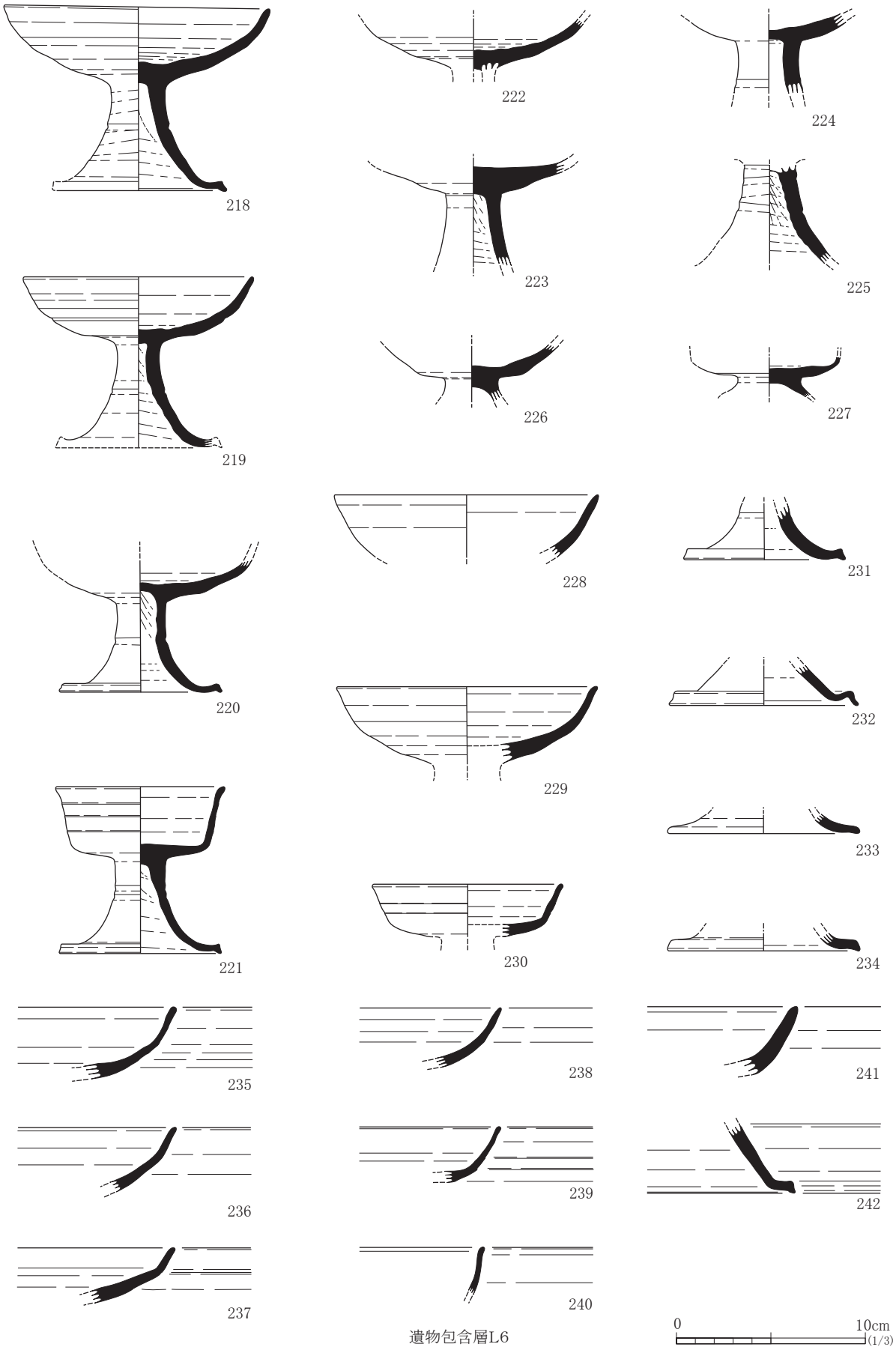


図 21　出土遺物実測図 (土器)⑦

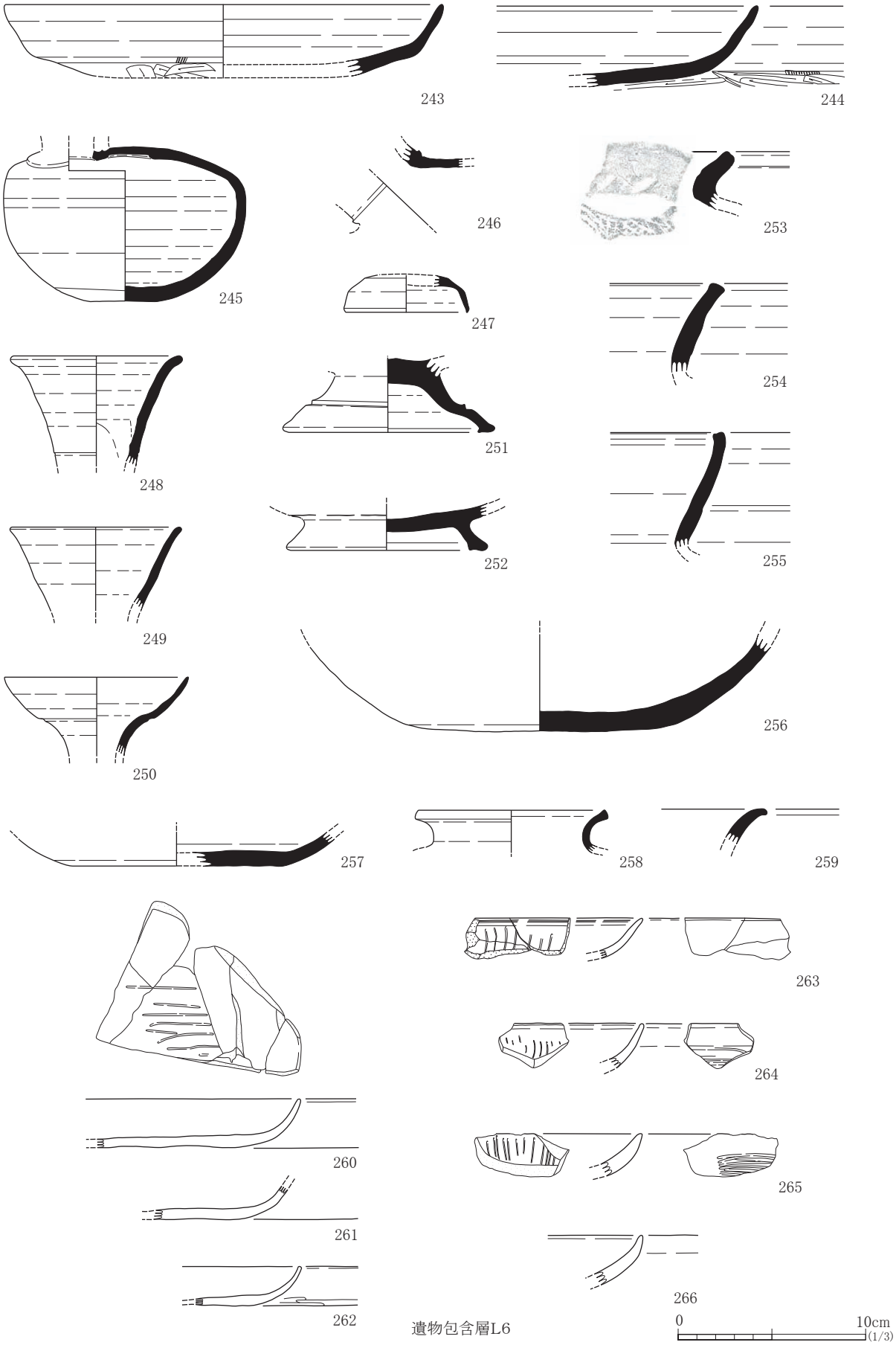


図 22　出土遺物実測図（土器）⑧

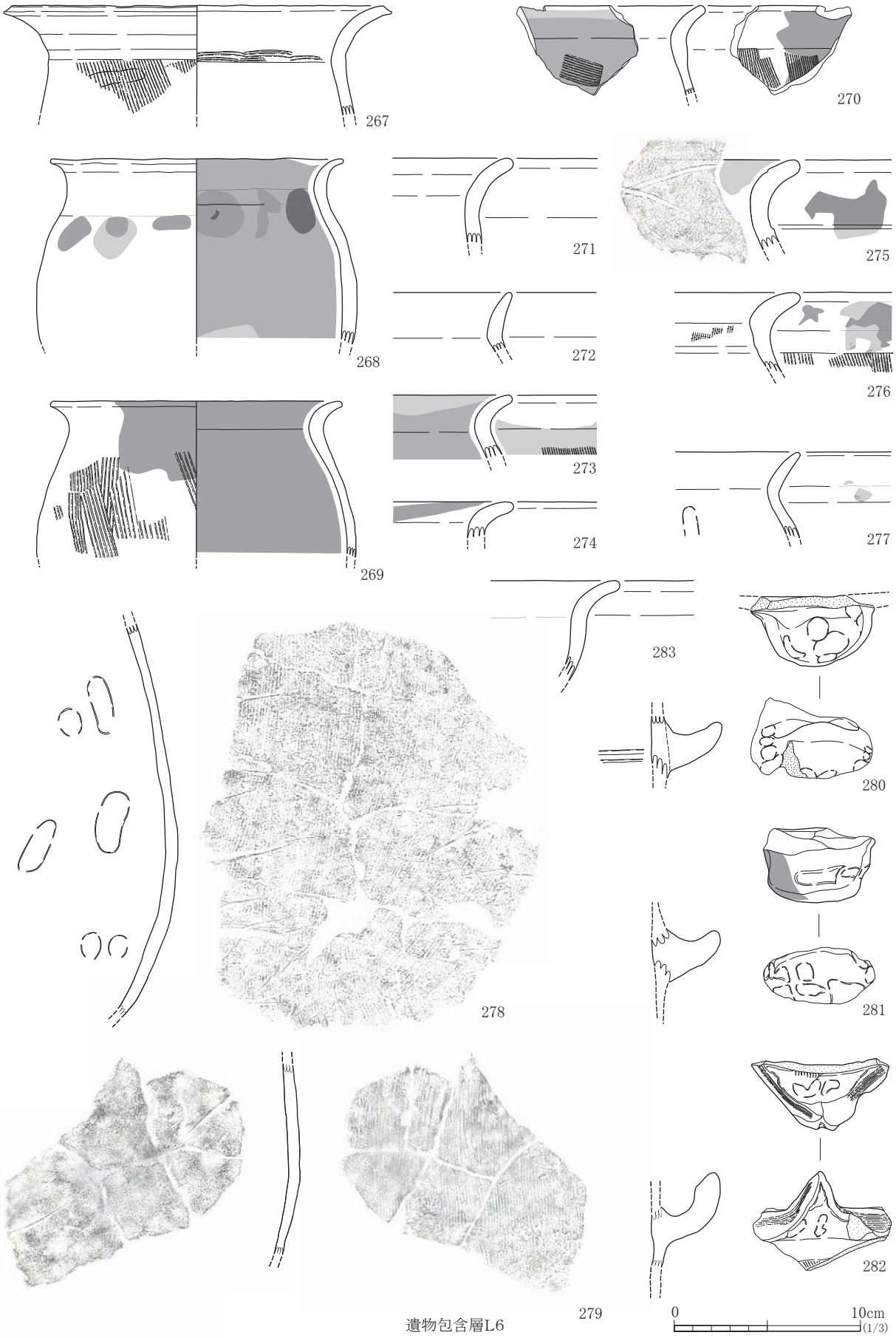


図 23　出土遺物実測図（土器）⑨

に開き、端部は下方へ強く屈曲した後に外反して、裾は丸くおさまる。233は脚短部内面に凹線を巡らし、裾を下方に向けて丸くおさめる。234・242は脚端部を短く下垂させるもの。裾をやや尖り気味におさめる。242は脚部に浅い凹線が巡る。243・244は皿。扁平丸底気味の底部から直線的に外方へ開いて口縁に至り、端部は尖り気味におさまる。底部外面には不定方向のヘラ削りを施す。他はロクロナデ調整で、底部内面には不定方向のナデを加える。243は底部内面に不定方向のナデを施す前段階において不定方向のヘラ削りを施す。245は平瓶。平らな底部から丸く立ち上がって肩部に至り、肩部からなだらかにおさまる。天井部内面中央に風船技法の痕跡が残る。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、ナデ。246は平瓶か。頸部外面に段を持つ。調整はロクロナデ。247～253は壺。247は壺蓋か。天井部と口縁部とを明瞭に分かち、口縁端部は尖り気味におさまる。天井部外面中央部にはロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察される。他はロクロナデ調整。248～250は長頸壺。調整はロクロナデ。248は頸部外面に１条の凹線を巡らす。口縁端部を強く外反させて丸くおさめる。249は口縁端部からわずかに外反させて丸くおさめる。250は頸部を強く外反させ、口縁部からは内湾させてやや尖り気味におさめる。頸部と口縁部との境に凹線を巡らす。頸部が細く、器壁は薄い。251は脚付壺。脚部外面中央に段を設けるもの。脚部内端は突出する。底部内面には一方向ナデを施し、他はロクロナデ調整。252は高台付壺。外方へ強く張り出す高台が付き、高台内端は少し突出する。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。253～259は甕。調整はロクロナデ。253は内面に当て具痕が残る。255は口縁端面と頸部外面とに１条の凹線を巡らす。256・257は体部外面にロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察される。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、ナデか。258・259は小型の甕か。260～266は土師器。260～264は皿。260は平坦な底部から内湾して立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。底部内面に暗文を持つ。風化が目立つ。261は260と同一個体の可能性がある。風化のため調整は不明。262は平坦な底部から内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさまる。口縁部内面にヨコナデ、底部外面にはミガキを施す。263は口縁端部が外反する。調整はヨコナデ。内面には暗文が入る。264は丸くおさまる口縁端部を持つ。内面には暗文が見られる。口縁部内面にヨコナデ､外面にはミガキを施す。265・266は坏か。尖り気味におさまる口縁端部を持つ。265は外面にミガキを施し、内面にはヨコナデを施す。内面に暗文が観察される。266は風化のため調整は不明。267～282は甕。体部にはハケ、口縁部にはヨコナデを施す。267は体部と口縁部との境の内面に稜を持ち、外反して口縁端部に至る。口縁端部は尖り気味におさめる。268・269は口縁部と体部との境の内面に鈍い稜を持ち､口縁部から強く外反して丸くおさまる。268は風化のため調整は不明。頸部内面に炭化物が付着している。269は体部外面にハケが観察される。270は内外面ともにハケが観察される。275は口縁部内面にヘラ記号がある。276は口縁部と体部との境の内面に稜が入る。口縁部内面が肥厚している。278・279は甕の体部片。外面にはハケ、内面には指押さえ痕が観察できる。280～282は甕の把手。283は鉢。調整は風化のため不明。

遺物包含層L6とL5の境界層（図24-284～292、写真70）

284～288は須恵器。284は短頸壺の蓋か。ドーム状を呈し、天井部と口縁部との境の外面に稜が入る。口縁部内面に面を持たせて端部は尖り気味に丸くおさめる。風化のために全体的に鈍い。調整はロクロナデ。天井部外面はヘラ起こし後、一方向ナデ調整。285・286は皿。扁平丸底を呈した底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。体部の立ち上がり付近に１条の凹線が巡る。底部内面に不定方向のナデを加え、底部外面にはロクロヘラ削り後にロクロナデを施す。他はロクロナデ。287は高坏。脚端部は下方へ強く屈曲した後に外反し、裾は丸くおさまる。調整は

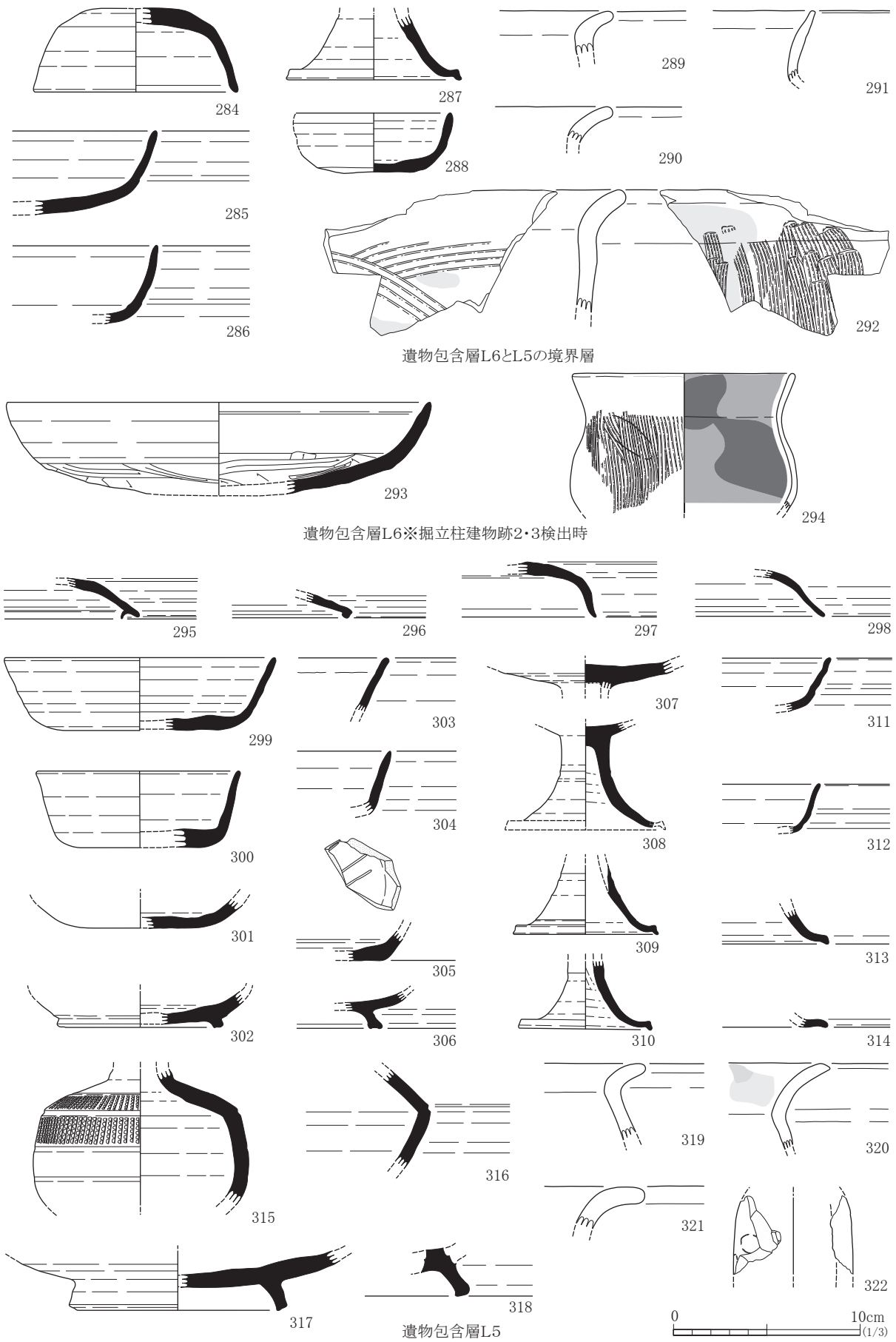


図 24　出土遺物実測図（土器）⑩

ロクロナデ。288は坏身。扁平丸底の底部から丸く立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。体部外面には、ロクロヘラ削りの後に、ロクロナデを施す。底部外面はヘラ起こし後、無調整。口縁端部はロクロナデ調整。内面はロクロナデ調整。ただし、底部内面には指押さえ痕が残る。289～292は土師器甕。292は体部にハケが観察される。

遺物包含層L6※掘立柱建物跡2・3検出時（図24-293～294、写真70）

293は須恵器皿。扁平丸底を呈した底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。底部内外面ともに不定方向ヘラ削りを施す。他はロクロナデ。294は小型の土師器甕。器壁が薄い。体部外面にハケが観察され、内面には炭化物の付着が確認される。

遺物包含層L5（図24-295～322、写真71・72）

295～318は須恵器。295～298は蓋。295･296は坏蓋。295はかえりが接地するもの。天井部に平坦面を持ち、口縁端部に向かって直線的に伸びて端部は丸くおさまる。外面にはロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。他はロクロナデ調整。296は口縁端部が内側に強く屈曲し、丸くおさまる。端部外面に凹線が巡る。297は壺蓋か。口縁端部が外反して尖り気味におさまる。調整はロクロナデ。天井部外面はヘラ起こし後､ナデ。298は蓋か。調整はロクロナデ。299～301･303～305は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。299は平坦な底部から直線的に外方に開き、口縁端部は丸くおさまる。300は厚い底部から直角に近い角度で直線的に立ち上がり、口縁端部はやや外反して丸くおさまる。301は外面に不定方向のナデを施す。303は内面に粘土接合痕が明瞭に残る。304は口縁端部を尖り気味におさめる。305は内面にヘラ記号を持つ。302・306は高台付坏身。302は小さい高台を持つもの。調整はロクロナデ。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。306は外方に強く張り出した高台を持つもの。高台内端を突出させる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。307～314は高坏。調整はロクロナデ。307は分厚い坏底部を持つ。坏底部内面に不定方向のナデが確認される。308～310は脚部に１条の凹線を持つ。309は脚端部が下方へ強く屈曲した後に外反し、裾は丸くおさまる。310は脚端部が強く下方へ屈曲した後に外反せず、裾は丸くおさまる。311は坏部外面に１条の凹線を巡らす。312は坏部外面に段を２条持つ。口縁端部は外反して丸くおさまる。313は脚端部を短く下垂させ、裾は尖り気味に丸くおさめる。裾の摩耗が確認できる。314は脚端部内面に凹線が巡り、裾を下方へ向けて丸くおさめる。315はハソウ。外面には凹線を４条巡らせ、肩部の凹線を挟んだ上下に櫛描き列点文を施す。調整はロクロナデ。316～318は壺。316は長頸壺。強く張り出した肩部に深い凹線が巡る。調整はロクロナデ。317･318は高台付壺。317は外面にはロクロヘラ削り後にロクロナデを施し、内面には不定方向のナデを施す。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。32と同一個体の可能性がある。318は底部内面には不定方向のナデを施す。他はロクロナデ調整。319～321は土師器甕。風化が著しく調整は不明。322は鞴の羽口。

遺物包含層L4（図25-323～325、写真72）

323～325は須恵器。323は坏蓋。かえりを持つもの。口縁端部を下方へ屈曲させる。口縁端部とかえりとを丸くおさめる。調整はロクロナデ。天井部内面に不定方向のナデを加える。324・325は高台付坏身。324は底部から直線的に外方へ開き、口縁端部は尖り気味に丸くおさまる。特に低い高台を持ち、高台内端がわずかに突出する。調整は風化のため不明。325は小さい高台を持つもの。高台は外傾する。ロクロナデ調整。底部外面はヘラ起こし後、無調整のままか。

遺物包含層L3（図25-326～329、写真72）

326～328は須恵器。326は坏蓋。口縁端部が短く下垂し､丸くおさまる。調整はロクロナデ。327は坏身。

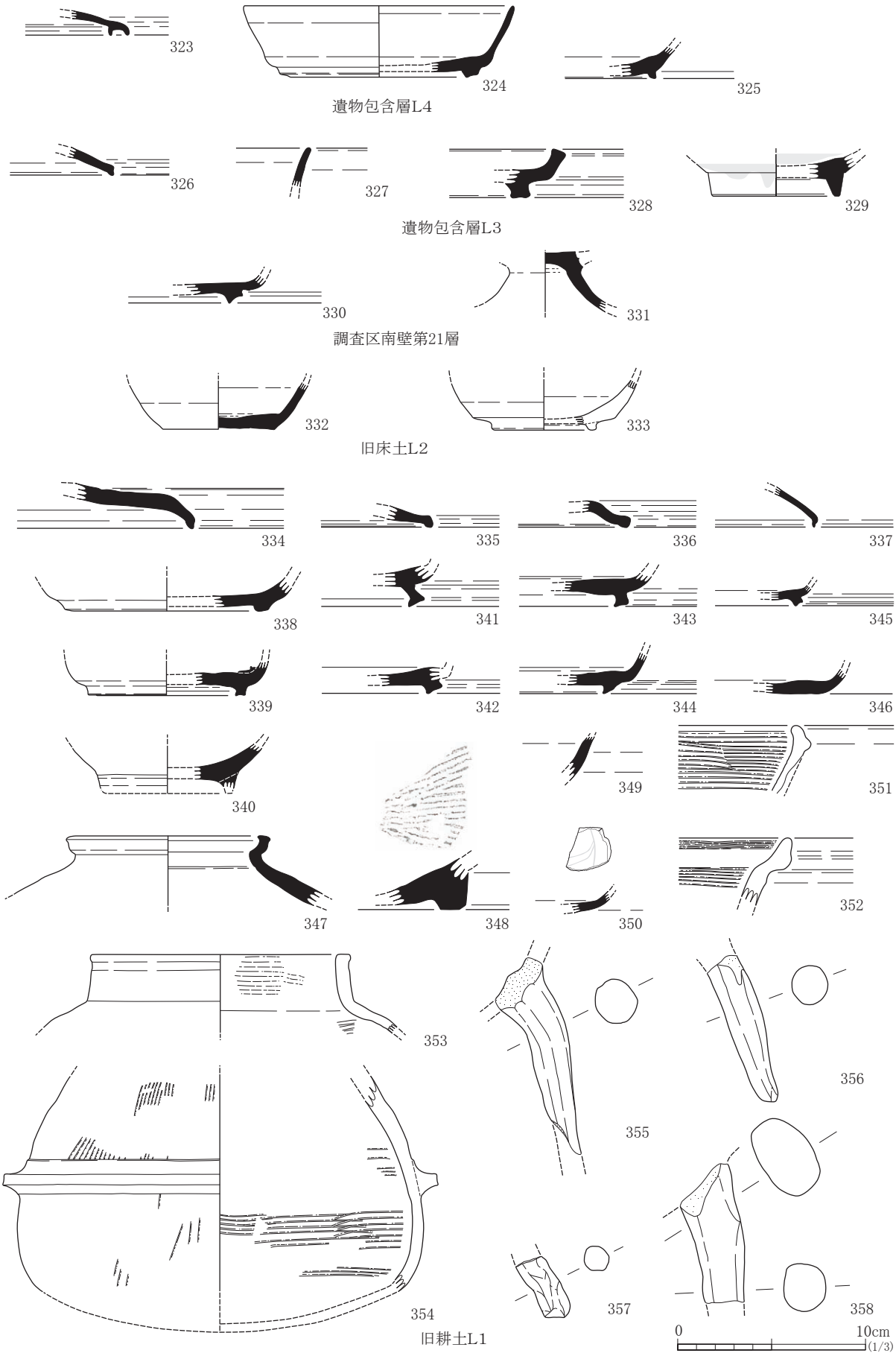


図 25　出土遺物実測図（土器）⑪

328は高台付皿。器高が低く、浅いもの。底部から内湾して短く立ち上がる。高台下端はわずかに突出する。329は黄釉陶器。高台は削り出している。

調査区南壁第21層（図25-330～331、写真72）

330・331は須恵器。330は高台付坏身。低い高台を持つもので、高台は体部の立ち上がりより内側に付く。高台の断面は三角形に近い。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。60と同一個体の可能性がある。331は短脚高坏。坏底部内面には不定方向のナデを施す。調整はロクロナデ。

旧床土L2（図25-332～333、写真72）

332は須恵器の坏身。椀の可能性もある。調整はロクロナデ。ただし、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。333は高台付椀。土師質土器か。風化のため調整は不明。体部立ち上がりに稜が入る。小さな高台が付く。

旧耕土L1（図25-334～357、写真73・74）

334～347は須恵器。334は皿蓋か。天井部と口縁部とを明瞭に分かつ。口縁端部は短く下垂させて尖り気味に丸くおさめる。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。335～337は坏蓋。調整はロクロナデ。335は口縁端部を短く下垂させて丸くおさめる。336は口縁端部をわずかに下垂させて丸くおさめる。337は高い天井部を持つもの。器壁が薄い。口縁端部外面に段を持ち、端部は尖り気味におさめる。338～345は高台付坏身。調整はロクロナデ。底部内面に不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。高い高台を持つもの(341)と低い高台を持つもの(338・340・342～344)、小さい高台を持つもの(339・345)とに分けられる。341は外方に張り出した高台を持つ。高台内端を強く突出させる。338・342は風化が著しいく全体が鈍いため本来の器形、調整とも不明瞭。343は高台内端を突出させる。344は高台が内湾し、断面は三角形を呈す。高台内端は摩耗している。114と同一個体の可能性がある。339は椀の可能性もある。高台内端を少し突出させる。内面に付着物が観察される。漆か。345は高台内端を少し突出させる。346は坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。347は短頸壺。体部内面はヨコナデ。他はロクロナデ。348は陶器。擂鉢。卸目は7本確認できる。349・350は青磁。349は椀。350は皿か。351は土師器鉢。内湾する口縁部を持ち、端部は丸くおさまる。352は瓦質土器鍋。353・354は湯釜。ハケの後、ナデを施してハケを擦り消そうとしている。355～358は足鍋の脚部。357は仕上げのナデを施していない。

旧床土L2・遺物包含層L3境界層（図26-359～362、写真74）

359・360は須恵器。359は高台付坏身。器形から椀の可能性もある。高台は断面方形を呈す。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを施す。底部外面はヘラ起こし後、ナデか。360は壺か。外面はロクロヘラ削り後、ロクロナデ。他はロクロナデ調整。361は青磁椀。362は青白磁か。

層位不明※調査区壁面精査中出土資料（図26-363～378、写真74・75）

363～375は須恵器。363～367は坏蓋。調整はロクロナデ。363は器壁が厚く、皿蓋の可能性もある。ボタン状の扁平なつまみを持つ。天井部外面中央部にはロクロヘラ削り後、ロクロナデを施す。天井部内面には不定方向のナデを加える。364は口縁端部が下方に屈曲し、尖り気味におさまる。天井部内面には不定方向のナデを加える。天井部外面はヘラ起こし後、ナデか。ゆがみが目立つ。365は口縁端部が短く下垂して尖り気味に丸くおさまる。366は短いかえりを持ち、口縁端部を丸くおさめる。367はかえりを持ち、口縁端部は丸くおさまる。368はかえりを持ち、口縁端部は丸くおさまる。外面

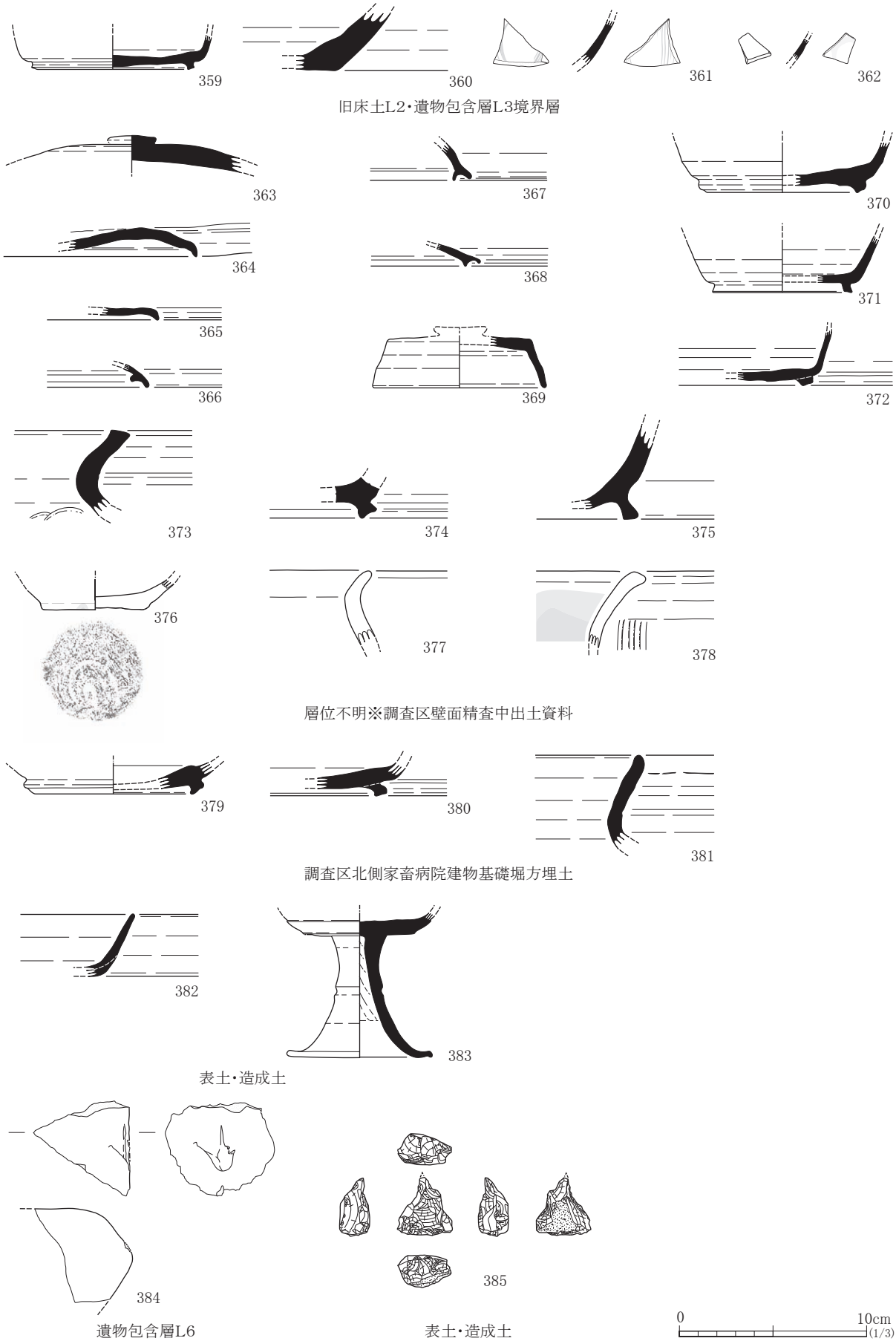


図 26　出土遺物実測図（土器）⑫（石器）

はロクロヘラ削り後、ロクロナデ調整。他はロクロナデ調整。369は短頸壺の蓋か。平坦な天井部から下方へ強く屈曲し、口縁端部は丸くおさまる。調整はロクロナデ。天井部内面には不定方向のナデを加える。370〜372は高台付坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。370は低い高台を持つもの。高台内端を少し突出させる。不定方向のナデは体部内面にまで及ぶ。371は小さく、外方に傾く高台を持つ。372は特に低い高台を持つもので体部の立ち上がりに稜が入る。体部の器壁は非常に薄く、器形から椀の可能性もある。373は甕。頸部外面には１条の凹線が巡る。体部内面には当て具痕がうっすらと残る。調整はロクロナデ。374･375は高台付壺か。調整はロクロナデ。374は高台内端を突出させる。375は外方へ張り出した高台を持つ。体部の立ち上がりに稜が入る。体部外面にはロクロヘラ削り後、ロクロナデが観察される。内面は不定方向のナデを加える。376〜378は土師器。376は土師器皿。底部に糸切り痕が観察される。調整はヨコナデ。377･378は甕。377は風化のため調整は不明。378は外面にハケが観察される。

調査区北側家畜病院建物基礎堀方埋土（図26-379〜381、写真75）

379･380は高台付坏身。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加える。379は高台内端を突出させる。380は体部の立ち上がりに鈍い稜が入る。高台内端がわずかに突出する。381は平瓶か。頸部に１条の凹線を巡らす。調整はロクロナデ。

表土・造成土（図26-382〜383、写真75）

382は坏身。底部から直線的に外方に開いて丸くおさまる。調整はロクロナデ。底部内面には不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のまま。383は高坏。坏部には段を２条持ち、脚部には１条の凹線を持つ。脚端部は下方へ短く屈曲して丸くおさまる。調整はロクロナデ。

【石器】

遺物包含層L6（図26-384、写真75）

384は不明品。表面を研磨している。

表土・造成土（図26-385、写真75）

385は石鏃か。先端を欠く。材質は黒耀石。大分県姫島産と考えられる。

【木製品】

掘立柱建物跡3（図27〜30-386〜391、写真76・77）

386〜388は掘立柱建物の柱。多角形に面取りしてある。面取りした器具痕が残る。386は二方向から面取って柱根基部を尖らす。基部付近には、掘り凹めて、縄かけ溝を設けている。風化が著しいために断面は円形に近い。387は平らな柱根基部を持つ。386同様、縄かけ溝を持つ。388は平らな柱根基部を持つ。上部の欠損が著しいが、基部付近は残りが良い。389･390は不明品。391は木蓋か。平面が円形になるような加工が施されている。

掘立柱建物跡2（図30-392、写真77）

392は松明灯。断面は方形で、加工痕が残る。先端は焼けて丸い。

SP2※掘立柱建物3間仕切り柱か（図30-393、写真77）

393は角杭か。斜め方向の面を持たせ、先端を尖らす。

谷埋土NR1（図31-394〜406、写真78・79）

394は不明品。直方体の木製品。未製品か。刻んだ跡が不定方向に残る。395も不明品。表面に均等

図 27 出土遺物実測図 (木製品)①

な線が施されている。線間の幅は約3.6㎜。欠損が著しく、器形は不明。396も不明品。397は円形曲物。398は松明灯か。先端の中央には溝を設けている。399・402～406は板材か。400・401は手斧か。斜め方向の面を持たせ、先端を尖らす。400にはベルトの役割を持っていたと考えられる木の皮が付着している。

遺物包含層L6（図32～36-407～451、写真80～85）

407～409は断面多角形の杭。先端はやや尖らす。410は断面が楕円形の柱か。斜め方向の面を持たせて基部を尖らす。411・412は角杭。斜め方向の面を持たせて基部を尖らす。413は角杭か。細長い形状を持ち、先端は尖っている。414～416・418～420・423・424は丸杭。414・415は基部を多方向から削って尖らす。416も斜めから切って基部を尖らせている。423・424は一方向から切って面を持たせ、基部を尖らす。417・421は不明品。422は不明品。全体が炭化している。425～428は手斧か。斜め方向の面を持たせて先端を尖らす。428は側面を突出させている。429は不明品。430は刳物。断面台形に加工した角材の中央を彫り込んで成形している。431は丸杭か。432は棒材か。433は不明品。434～440は松明灯か。441～451は板材か。

【本調査地出土遺物について】

今回の調査地からは8世紀を中心とした土器が多く出土した。既往の発掘調査成果から、今次調査地が立地する丘陵上には古代官衙の存在が示唆されており、出土した土器の多くはそれに伴うものと思われる。ここでは、今回出土した土器の特徴を型式毎にまとめることとする。ただし、土師器は状態の良いものが少ないため、須恵器のみを取り上げる。記載にあたっては、分類の定義や名称は奈良国立文化財研究所の分類に準拠した。(西1978)

坏H蓋

ドーム状を呈すもの(44・179・180)、ドーム状を呈すが扁平なもの(178)、天井部から直線気味に下がり、台形状を呈すもの(20)がある。器面調整はロクロナデ、天井部内面には不定方向のナデを加えるもの(178・179)と加えないもの(20・44・180)とがある。天井部外面はヘラ起こし後、無調整であり、全て共通している。

坏G蓋

口縁端部が下方向に向くもの(190・203・205)と外方に伸びるもの(22・94・188・189・191・192・193・295・204・295)とに分けられる。後者には、天井部の一段高まった部分にロクロヘラケズリを施して平坦にしているグループ(188・189・295)、器高が低く口縁端部が著しく突出するグループ(22・204)がある。器面調整はほぼ共通しており、天井部外面にロクロヘラケズリ後にロクロナデを施し、他にはロクロナデのみを施す。205のみ天井部内面に不定方向のナデが確認される。

坏B

完形資料は限られているが、底部の資料は豊富であるため高台に着目したい。高台の形状から大きくは４つにまとめられる。外方に強く張り出す高い高台をもつもの(26・56・57・102・109～111・207・208・210・306・341)、低い高台をもつもの(25・42・58・62・103～105・112～115・131・148～150・173・174・343・344・370・379・380)、特に低い高台をもつもの(28・59～61・63・64・88・151・168・211・212・216・324・330・342・372)、小さい高台をもつもの(27・65・106・116・117・152～154・169・170・302・325・339・345・359・371)である。低い高台のものと特に低い高台のものとには、断面三角形に近い高台を持つグループが認められる。高台の高さや形状は異なるものの調整技法は共通する部分が多い。底部内面にはロクロナ

掘立柱建物跡3　Pit4

0　10cm (1/5)

図 28　出土遺物実測図 (木製品)②

デを施した後に不定方向のナデを加え、底部外面はヘラ起こし後、無調整のままのものが大部分を占める。

坏B蓋

かえりを持つもの(55・183～186・195～199・323・366)、かえりを持たないもの(23・45～47・51～54・141～146・200～202・296)、扁平なもの(48・172・187・335・336・365)に分けられる。かえりを持つものには、器壁が厚いグループ(184・185)、断面三角形の小さなかえりを持つグループ(197・198)がある。製作技法は全体的に共通しており、天井部内面にロクロナデの後に不定方向のナデを加え、他の部分にはロクロナデのみを施す。ただし、不定方向のナデを施す範囲は個体によって多少異なる。

高坏

半球状の坏部を持つもの(218～220)、平らな底部から急角度で立ち上がる坏部を持つもの(221)にまとまる。坏部の形状は異なるが、脚部の形状や調整技法は共通しており、脚部の中央付近に一条の凹線を巡らし、器面調整はロクロナデ。坏部内面には坏の底部内面に多く見られるような不定方向のナデは確認されない。ただし、219は坏部内面中央に一方向ナデが施されている。

以上、型式ごとに形態や調整技法に着目して規格の抽出を試みた。しかし、破片資料が多いために口径や全体的なプロポーションは考慮することができず、局部的な形態や調整技法など、部分的な視点に終始せざるを得なかった。それゆえ抽出した規格の妥当性には不安が残ることは否めないため、年代を絞り込むことは難しいと考える。特に山口県では、大林氏が「土器様相比較同一時期年代論」批判を声高に展開されていることもあって、一つの土器に含まれる様々な属性を局部的に取り上げて陶邑編年など他地域の須恵器編年の年代を当てはめることに慎重になりつつある。事実、今回出土したかえりを持つ坏Ｂ蓋のプロポーションやつまみを見てみても、他地域の編年の各型式における特徴と合わないものもある。陶邑編年をはじめとする既存の編年の各型式における特徴と一致する属性もある一方で、一致しない属性も含んでいるのが実態であると言えよう。すなわち、各属性の変化の方向は変わらないがその進み具合が各地域で異なっているのであろう。ここに、小単位の地域編年を打ち立てる意義があると考える。今後は生産地と消費地が明確な須恵器群を取り上げて、各属性の出土実態を根本に分析を試みていきたい。

【主要参考文献】

1．青島啓(2007) 山口市教育委員会(編)『陶窯跡群Ⅱ』、山口

2．池田善文(1990)美東町教育委員会(編)『長登銅山跡Ⅰ』、美東(山口)

3．池田善文(1993)美東町教育委員会(編)『長登銅山跡Ⅱ』、美東(山口)

4．池田善文(1998)美東町教育委員会(編)『長登銅山跡Ⅲ』、美東(山口)

5．池田善文(2004)「須恵器」山口県(編)『山口県史　資料編考古2』、山口

6．大林達夫(1999a)「周防国府の成立期の土器の年代観・序章」森郁夫先生還暦記念論文集刊行会(編)『瓦衣千年－森郁夫先生還暦記念論文集』

7．大林達夫(2000)「第5章考察1周防国府の年代観・補足」防府市教育委員会(編)『敷山・末田須恵器窯跡調査報告』、防府市埋蔵文化財調査報告0001、防府(山口)

8．大林達夫(2003)「第Ⅳ章考察」防府市教育委員会(編)『向山・柴山古墳群発掘調査報告』、防府市埋蔵文化財調査報告031、防府(山口)

9．菊本裕美(2003)「山口市内出土の須恵器について－防長地域の須恵器生産・流通の構造解明にむけて－」近藤喬一先生退官記

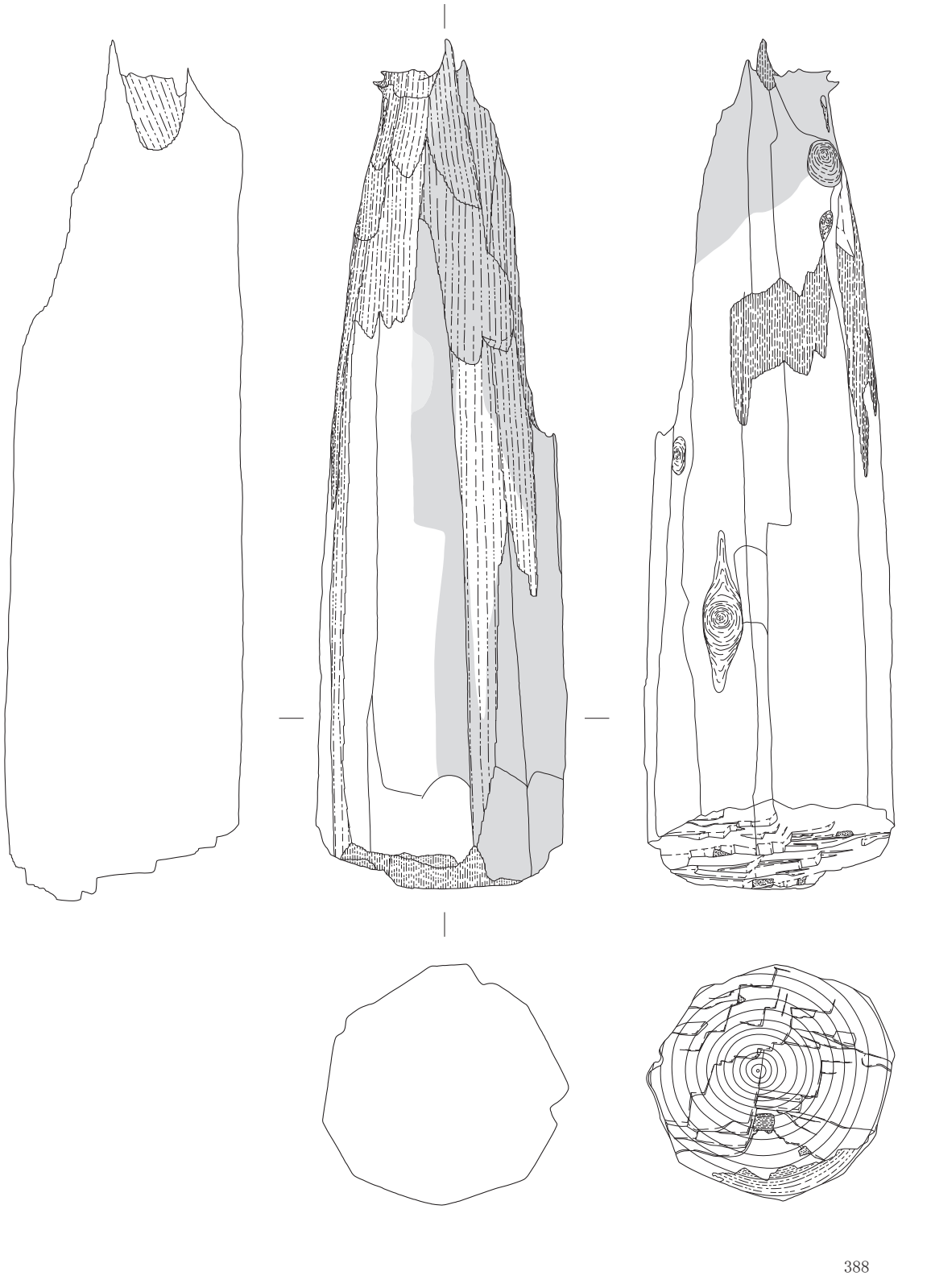


図 29 出土遺物実測図 (木製品)③

念事業会(編)『山口大学考古学論集－近藤喬一先生退官記念論文集－』、山口
10. 小林善也(2008)「須恵器初現期以降の古墳時代集落出土の土器編年試論－周防西部地域－」山口考古学フォーラム(編)『古墳時代集落遺跡出土の須恵器・土師器』、山口考古学フォーラム調査報告書1、山口
11. 田辺昭三(1966)平安考古クラブ(編)『陶邑古窯址群Ⅰ』、奈良
12. 古代の土器研究会(編)(1992)『古代の土器1・都城の土器集成1』、奈良
13. 古代の土器研究会(編)(1993)『古代の土器2・都城の土器集成2』、奈良
14. 古代の土器研究会(編)(1994)『古代の土器3・都城の土器集成3』、奈良
15. 中村　浩(編)(2001)『和泉陶邑窯の歴史的研究』芙蓉書房出版、大阪
16. 西　弘海(1978)「土器の時期区分と形式変化」奈良国立文化財研究所(編)『飛鳥・平城宮発掘調査報告Ⅱ』、奈良

（藤野）

（６）小結

吉田キャンパスは、旧石器時代から近世までの埋蔵文化財を包蔵する複合遺跡であるが、古墳時代前期までの遺構・遺物は主としてキャンパス西部に広がる沖積平地および微高地上に分布し、古墳時代中期以降はキャンパス東部の丘陵台地上に分布することが判明している。特に奈良時代から平安時代にかけての遺構の広がりは、今回の調査地である家畜病院敷地から総合研究棟、第２学生食堂、大学会館敷地という丘陵台地の先端部分に限定して確認されており、集落造営に一定の指針が定められていたことを示唆している。また、その集落跡からは「官」と記された墨書土器や円面硯、木簡、帯飾り、製塩土器、鋳造関連資料など、官衙の存在を予測させる遺物が数多く出土しており、古墳時代までの建物数棟からなる小村から、公的な性格を持つ中心的集落へと大きく変貌して行く様相を見せている。

今回の調査では、キャンパス南東端部から北西へ走る埋没谷の右斜面に掘立柱建物群が存在することが明らかとなった。これらの建物跡は時期を違えながら立て替えを行われたものらしく、現状では所属時期を断定できないが、掘立柱建物跡２が７世紀後半から８世紀前半にかけて、掘立柱建物跡３が８世紀後半以降に、掘立柱建物跡１が10世紀以降に成立したものと想定している。

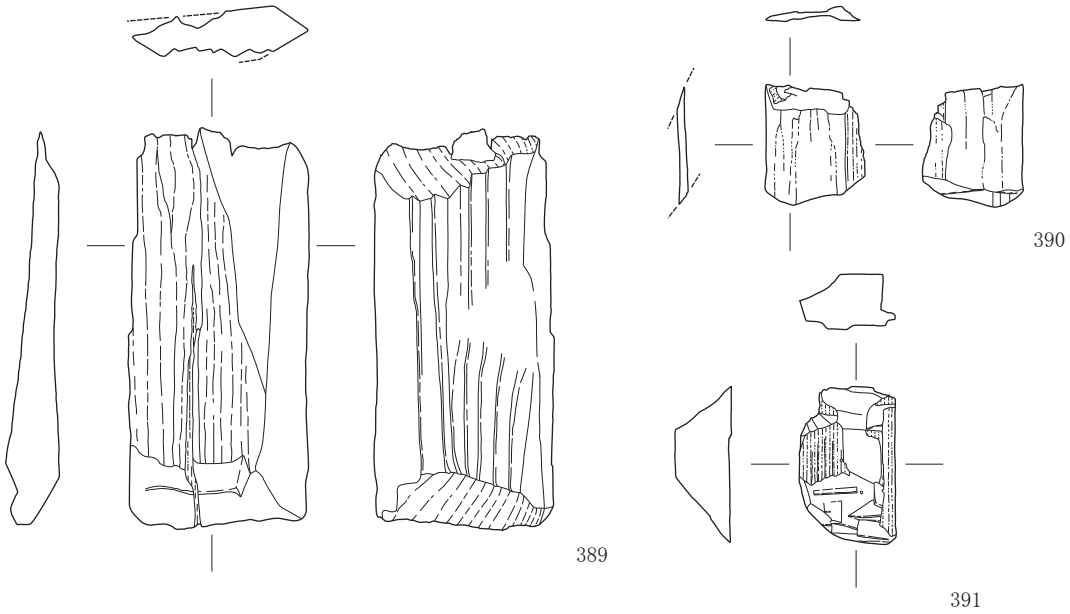
この内問題となるのは、掘立柱建物跡３の性格である。掘立柱建物１・２は１間×２間の小型建物であるが、掘立柱建物３は柱間も大きく、２間×４間以上の建物が復元される。また、遺存していた柱根からも比較的大型の建物上部構造が予想され、なおかつ柱根基部付近に刻まれた縄かけ溝の存在は、遠隔地からの柱材の輸送を物語っている。

同一地での立て替えであるにもかかわらず、ある時期にのみ建物が拡大するという実相の背景を、当調査だけで解明することはできない。当調査地の南東に近接し、同じく古代の竪穴住居群や掘立柱建物群が発見されている神郷大塚遺跡[註1]との検討も含めて、今後の調査研究の課題としたい。

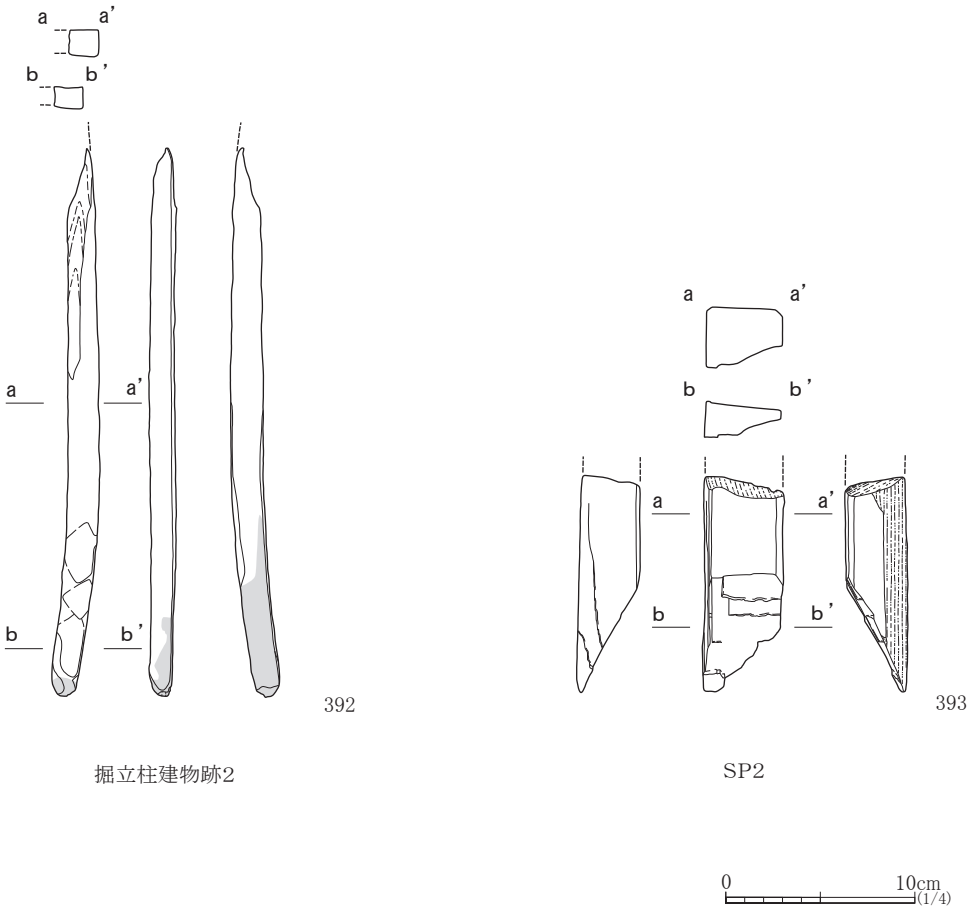
［註］

１）a :青島啓（2006）「神郷大塚遺跡第６次調査」,山口市教育委員会（編）『山口市埋蔵文化財年報５－平成16年度－』,山口
b :西尾健司（2007）「神郷大塚遺跡第６次調査」,山口市教育委員会（編）『神郷大塚遺跡Ⅳ』山口市埋蔵文化財調査報告第96集,山口

（横山）



掘立柱建物跡3



掘立柱建物跡2　　SP2

図 30　出土遺物実測図 (木製品)④

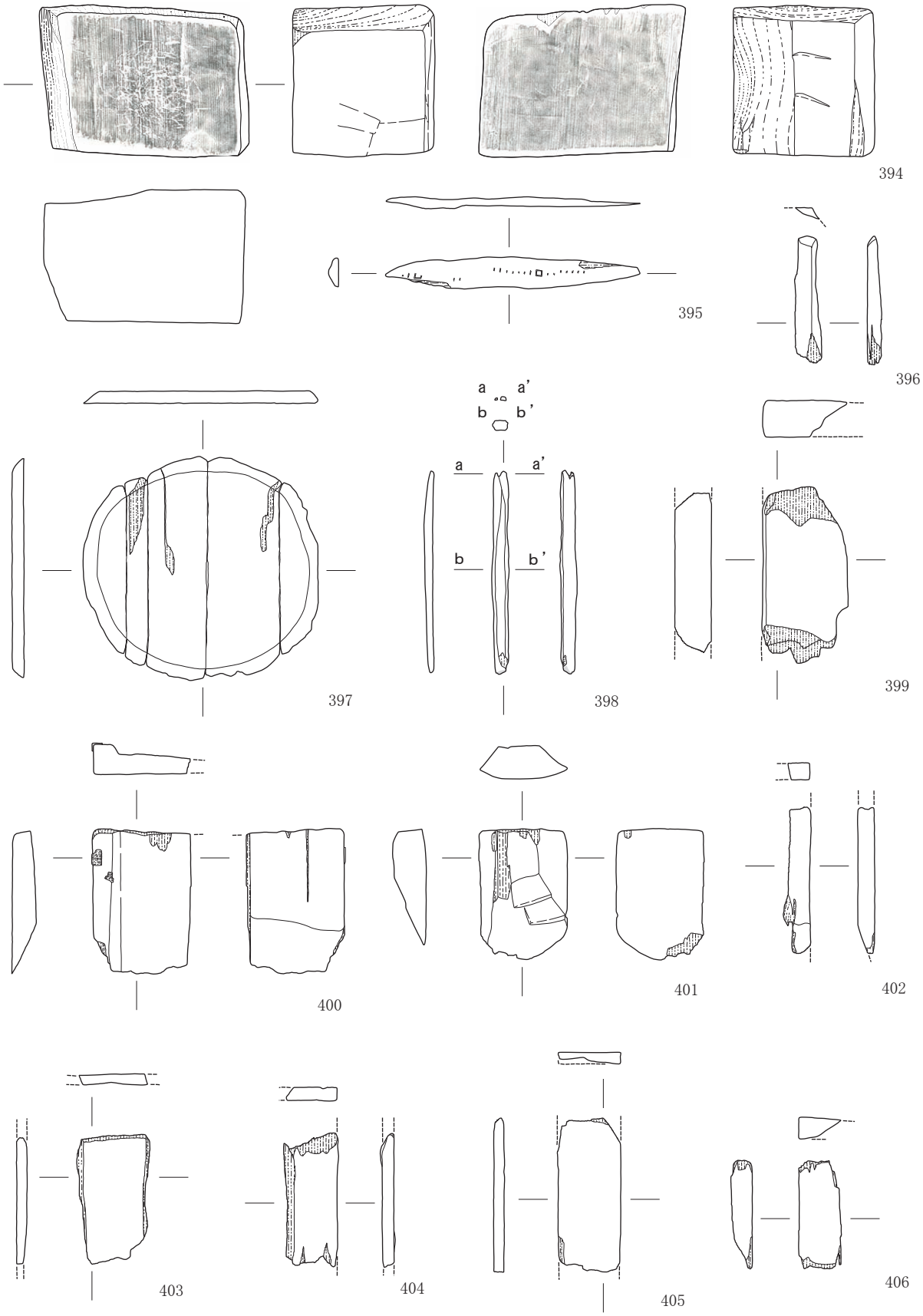


図 31　出土遺物実測図 (木製品)⑤

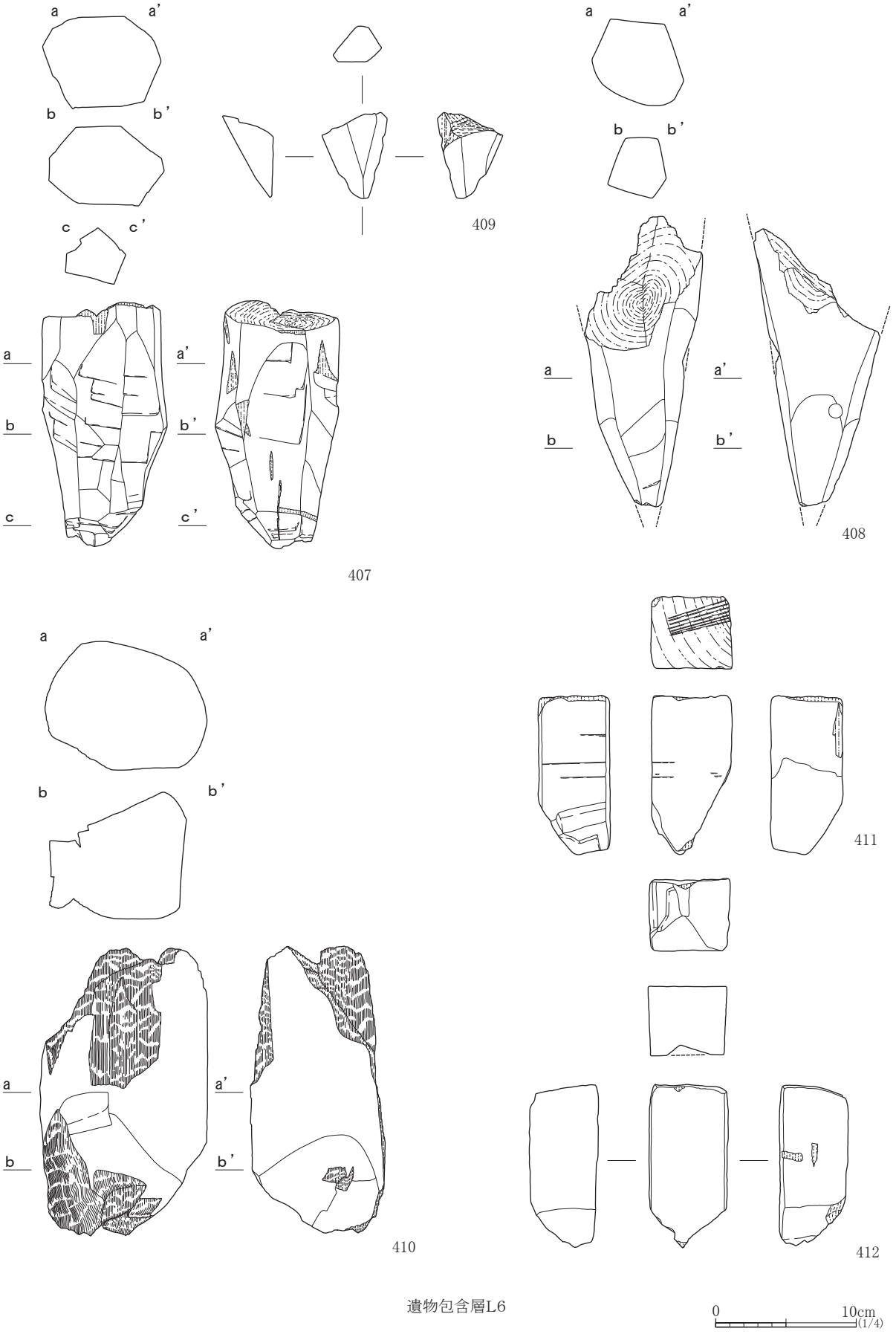
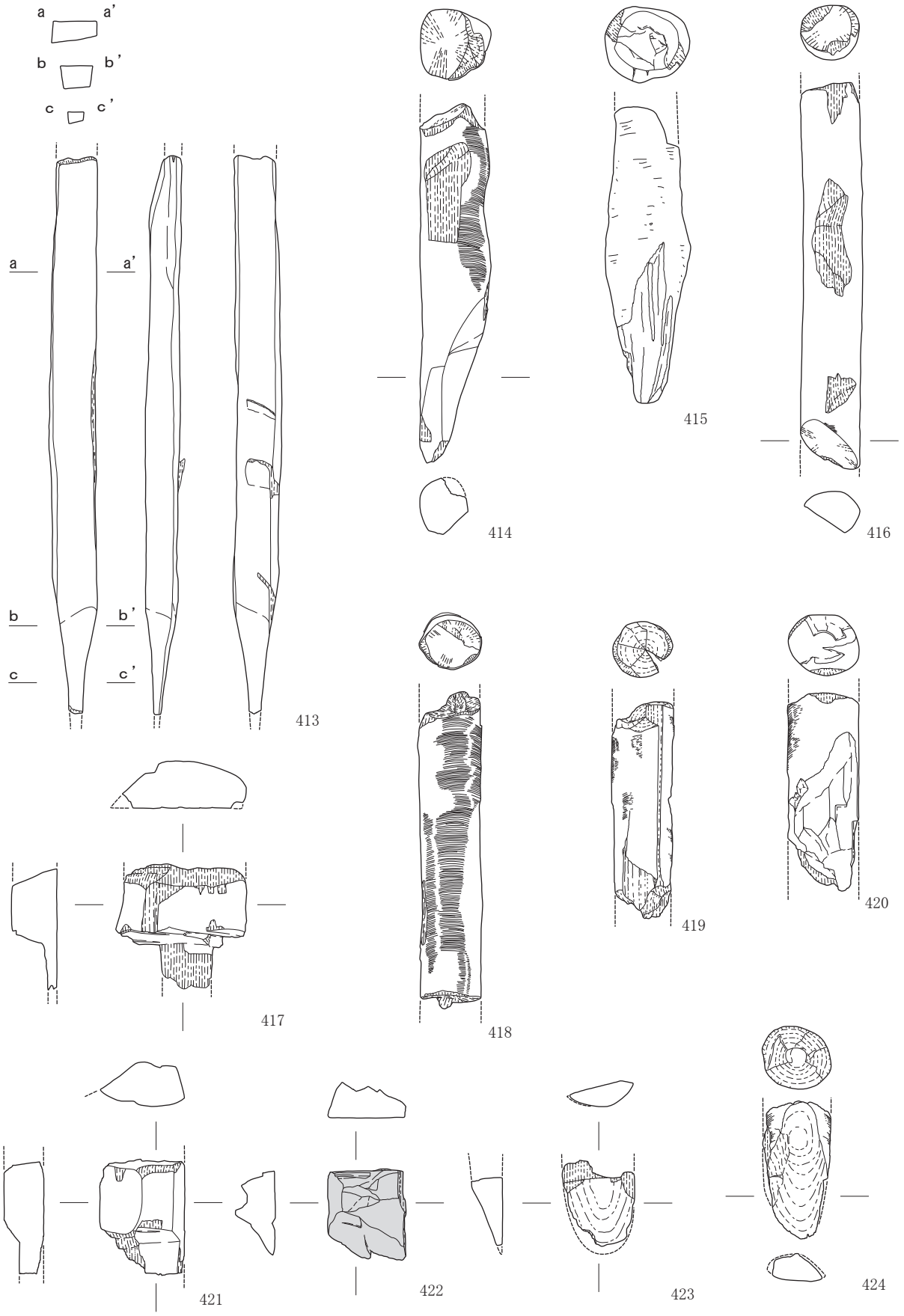


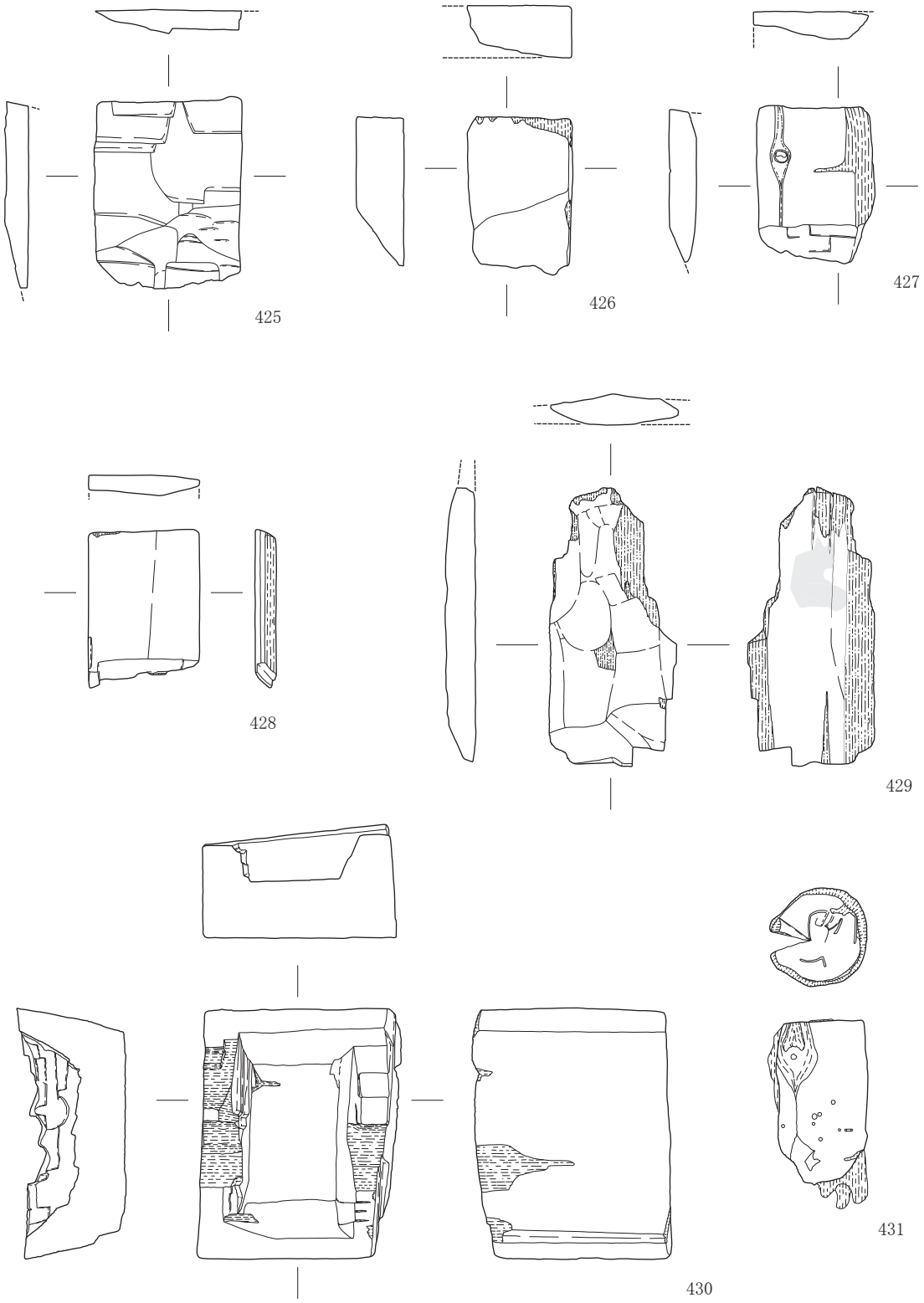
図 32　出土遺物実測図（木製品）⑥



遺物包含層L6

0 10cm (1/4)

図 33　出土遺物実測図（木製品）⑦



遺物包含層L6

0 10cm (1/4)

図 34　出土遺物実測図（木製品）⑧

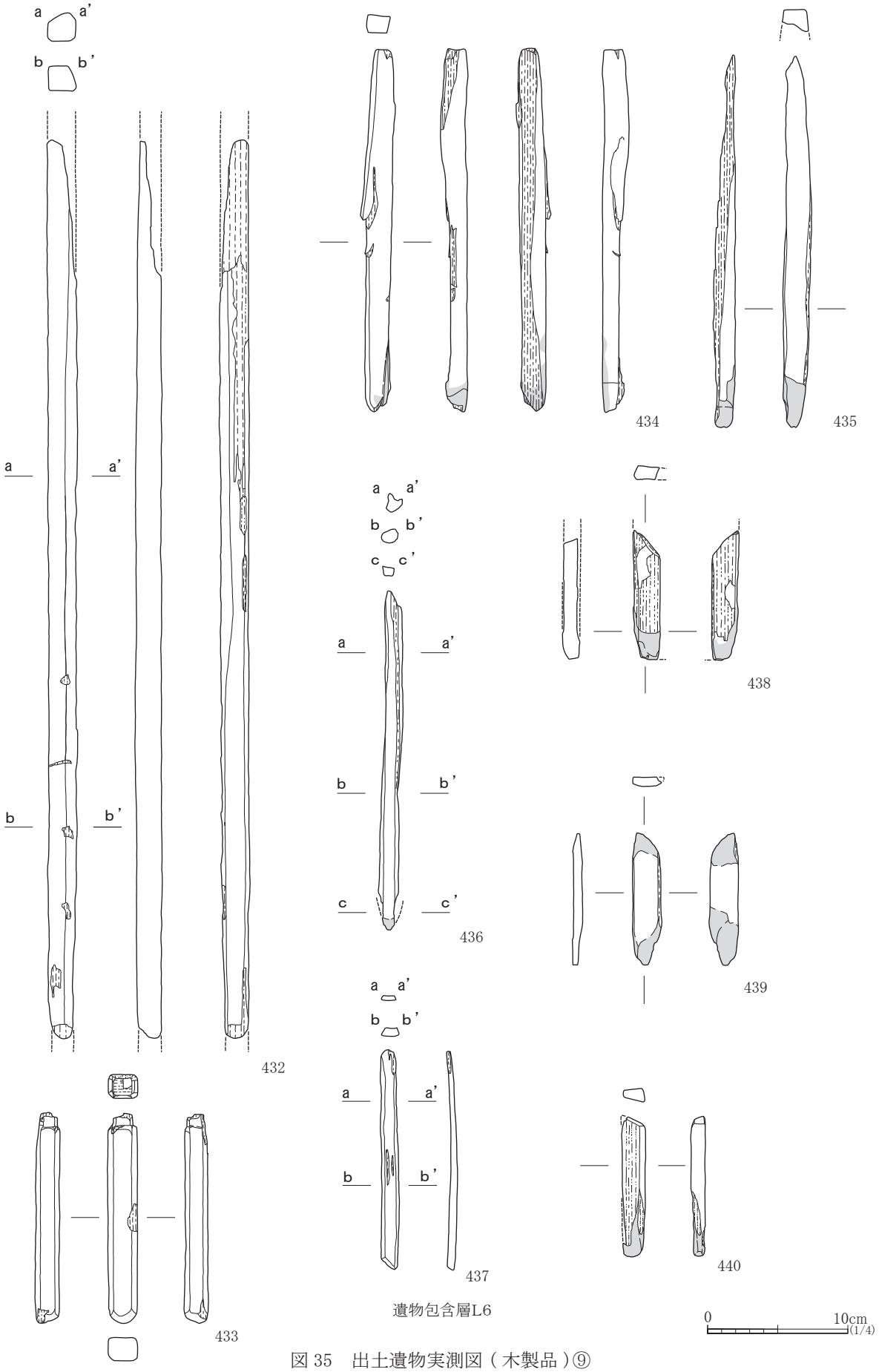


図 35　出土遺物実測図（木製品）⑨

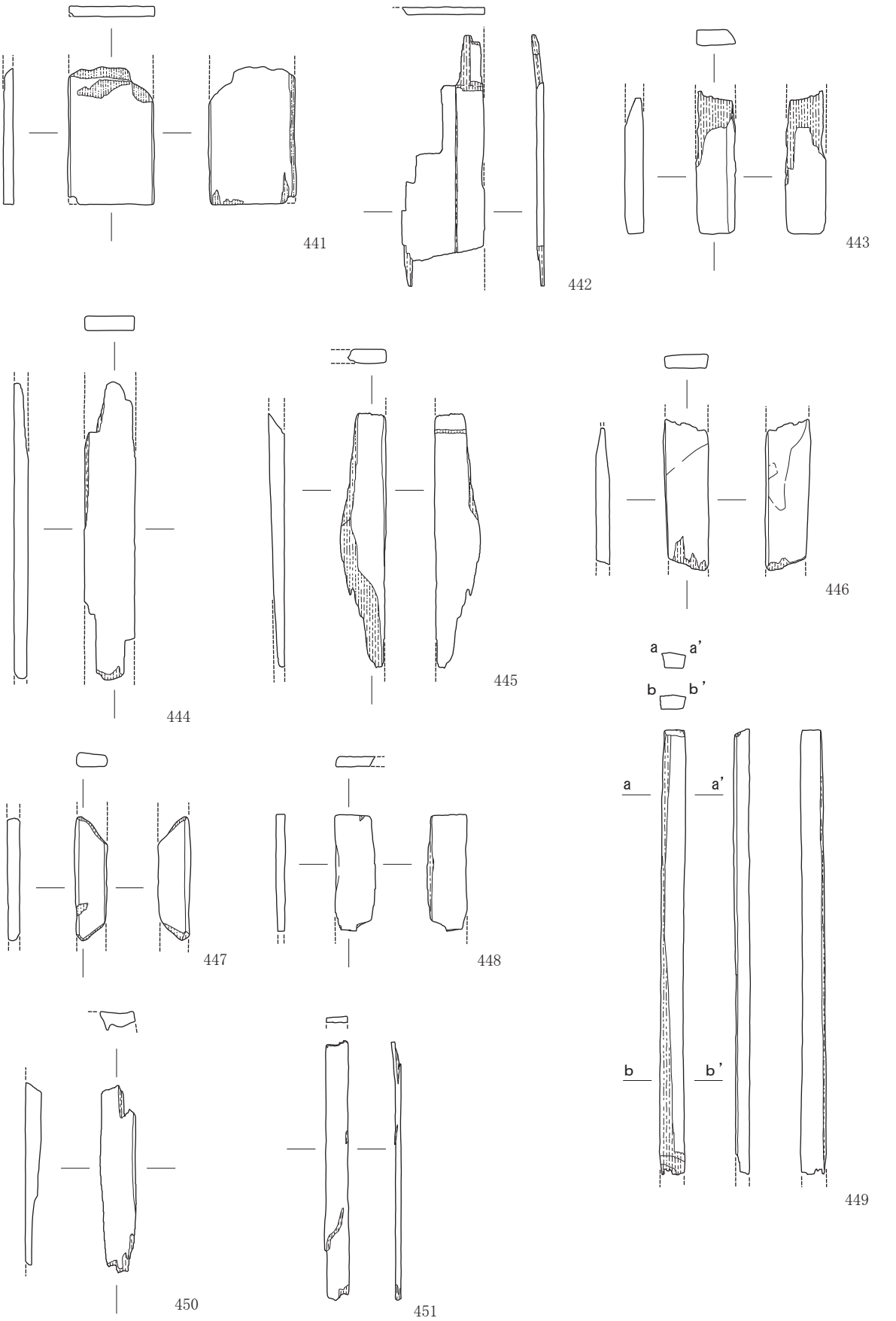
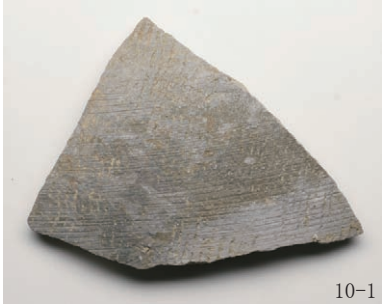


図 36　出土遺物実測図（木製品）⑩

掘立柱建物跡3



掘立柱建物跡2

写真 53　出土遺物（土器）①

16

掘立柱建物跡1

17

SP3

18

土壙4

19-1

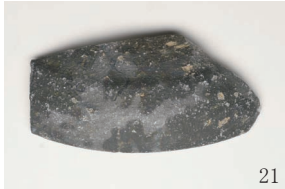
19-2

溝2

20

23-1

23-2


21

22

24

25

26-1

29-1

32-1

26-2

29-2

32-2

27

28

30

31

NR1-L3・遺物包含層L4境界層

写真 54　出土遺物（土器）②

33-1

34-1

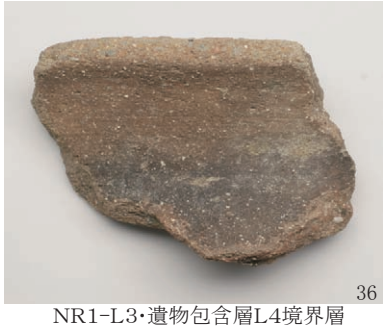
37-1

33-2

34-2

37-2

35


36

38

NR1-L3･遺物包含層L4境界層

39-1

39-2

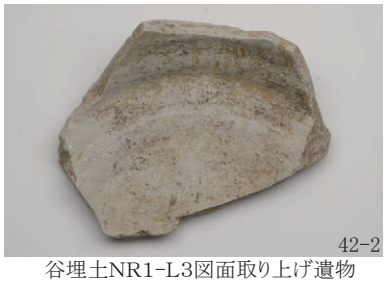
40

41-1

42-1

43-1

41-2


42-2

43-2

谷埋土NR1-L3図面取り上げ遺物

写真 55　出土遺物 (土器)③

谷埋土NR1-L3底面

写真 56　出土遺物（土器）④

谷埋土NR1-L3底面

写真 57　出土遺物（土器）⑤

谷埋土NR1-L3

写真 58　出土遺物（土器）⑥

谷埋土NR1-L3

谷埋土NR1-L2

写真 59　出土遺物（土器）⑦

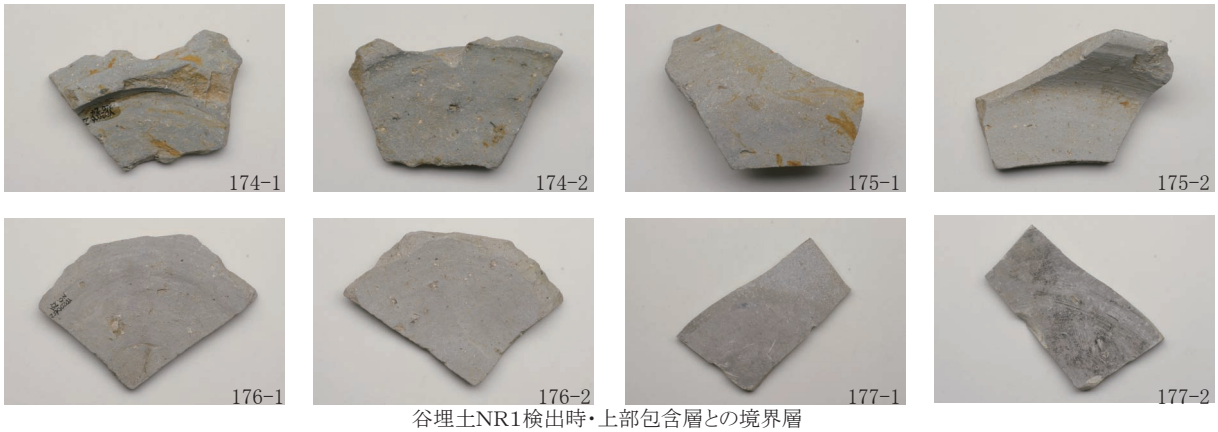
谷埋土NR1-L1

写真 60　出土遺物（土器）⑧

谷埋土NR1-L1

谷埋土NR1-L1・L2境界層

谷埋土NR1※層位不明



谷埋土NR1検出時・上部包含層との境界層

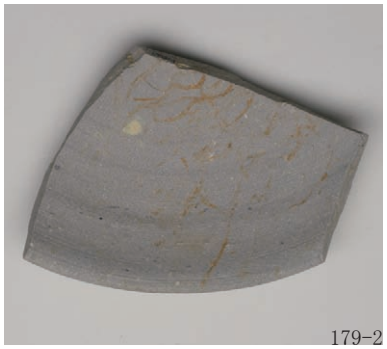
写真 61　出土遺物（土器）⑨

178-1

179-1

180-1

178-2


179-2

180-2

181-1

181-2

181-3

182-1

182-2

194-1

194-2

遺物包含層L6

写真 62　出土遺物（土器）⑩

遺物包含層L6

写真 63　出土遺物（土器）⑪

188-1

189-1

190-1

188-2

189-2

190-2

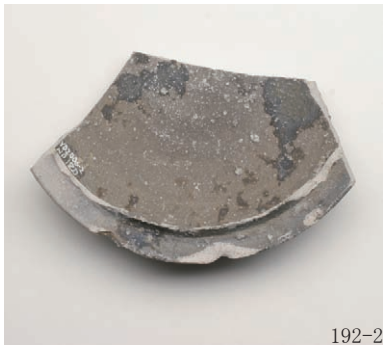
191-1

192-1

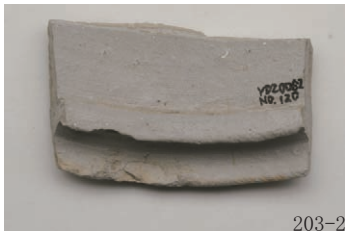
193-1

193-2

191-2


192-2

203-1


203-2

204-1

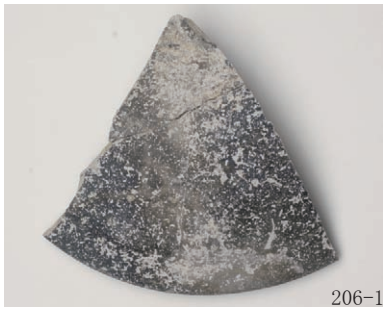
204-2

205-1

205-2

遺物包含層L6

写真 64　出土遺物（土器）⑫


206-1

208-1

209-1

206-2

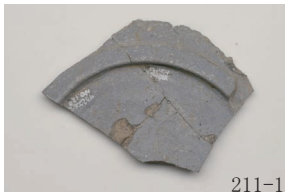
208-2

209-2

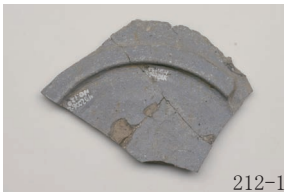
207

210-1

210-2


211-1

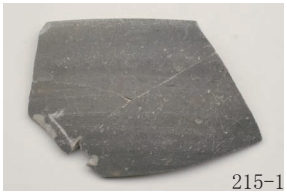
211-2


212-1

212-2

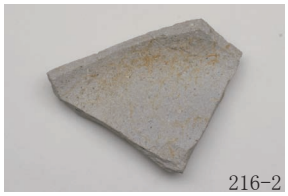
213

214


215-1

215-2

216-1


216-2

217-1

217-2

遺物包含層L6

写真 65　出土遺物（土器）⑬

218

219

220

221

222

223

224

225

227-1

226-1

226-2

227-2

228

229

230

231

232

233

234

遺物包含層L6

写真 66　出土遺物（土器）⑭

遺物包含層L6

写真 67　出土遺物（土器）⑮

260-1

261-1

262-1

260-2

261-2

262-2

263-1

264-1

265-1

263-2

264-2

265-2

266-1

267-1

270-1

266-2

267-2

270-2

遺物包含層L6

写真 68　出土遺物（土器）⑯

268-1

269-1

275-1

268-2

269-2

275-2

271

272

273

274

276-1

276-2

277

283

278-1

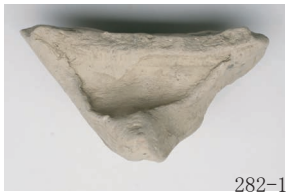
278-2

279-1

279-2

280-1

281-1


282-1

280-2

281-2

282-2

遺物包含層L6

写真 69　出土遺物（土器）⑰

284

285

286

287

289

288

290

291

292-1

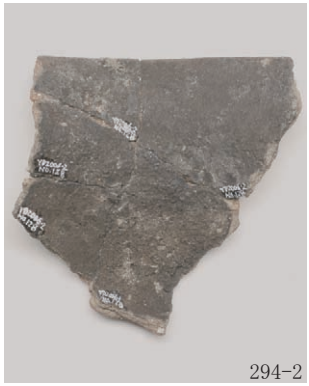
292-2

遺物包含層L6とL5の境界層

293-1

293-2

294-1


294-2

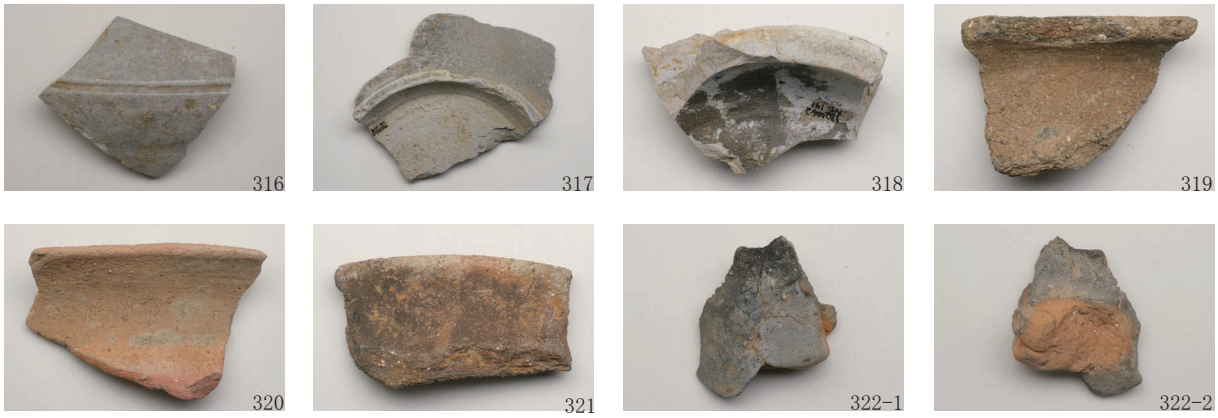
293-3

遺物包含層L6※掘立柱建物跡2・3検出時

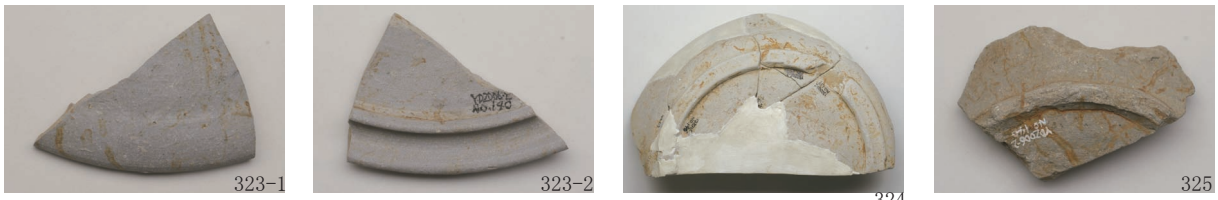
写真 70　出土遺物（土器）⑱

遺物包含層L5

写真 71　出土遺物（土器）⑲

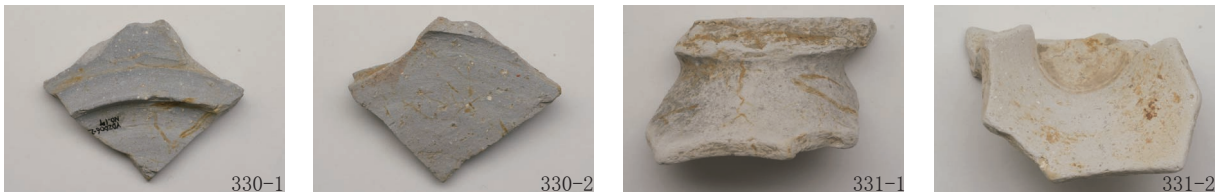


遺物包含層L5



遺物包含層L4

遺物包含層L3



調査区南壁第21層

旧床土L2

写真 72　出土遺物（土器）⑳

旧耕土L1

写真 73　出土遺物（土器）21

353-1

353-2

355-1

355-2

354-1

354-2

356

357

358-1

358-2

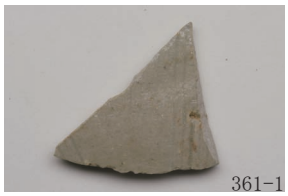
旧耕土L1

359-1

359-2

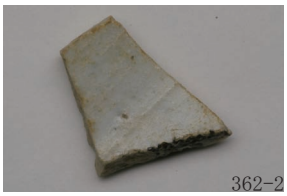
360-1

360-2


361-1

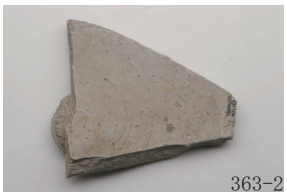
361-2

362-1

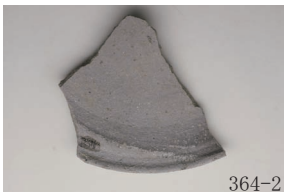

362-2

旧床土L2・遺物包含層L3境界層

363-1


363-2

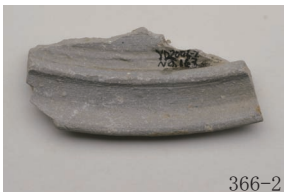
364-1


364-2

365-1

365-2

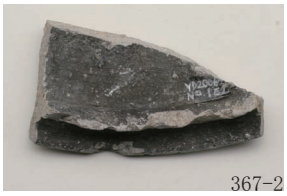
366-1


366-2

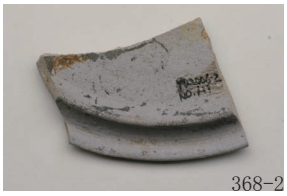
層位不明※調査区壁面精査中出土資料

写真 74　出土遺物（土器）22

367-1


367-2

368-1


368-2

369-1

370

371

372

373

374

375

369-2

376

377

378

層位不明※調査区壁面精査中出土資料

379

380

381-1

381-2

調査区北側家畜病院建物基礎堀方埋土

382-1

382-2

383

表土・造成土

384-1

385-1

385-2

表土・造成土

384-2

遺物包含層L6

写真 75　出土遺物（土器）23（石器）

○出土時の様子

掘立柱建物跡3Pit5

掘立柱建物跡3Pit4

掘立柱建物跡3Pit6

○高級アルコール法による保存処理後の様子

掘立柱建物跡3Pit5

掘立柱建物跡3Pit4

掘立柱建物跡3Pit6

写真 76　出土遺物（木製品）①

389-1

389-2

392-1　392-2

掘立柱建物跡2

390-1

390-2

391

掘立柱建物跡3

393

SP2

写真 77　出土遺物（木製品）②

394-1

394-3

394-2

396-1

396-2

397-1

395-1

395-2

397-2

398-1

398-2

399

谷埋土NR1

写真 78　出土遺物 (木製品)③

400-1

400-2

401-1

402-1

403-1

403-2

401-2

402-2

404-1

404-2

405-1

405-2

406-1

406-2

谷埋土NR1

写真 79　出土遺物（木製品）④

407-1

407-2

408-1

408-2

410

409-1

409-2

412-1

412-2

411-1

411-2

411-3

411-4

遺物包含層L6

写真 80　出土遺物 (木製品)⑤

413-1

413-2

414

415

416

417

418

419

420

421

422

423

424

遺物包含層L6

写真 81　出土遺物（木製品）⑥

425

426-1

426-2

427

428-1

428-2

429-1

429-2

431

遺物包含層L6

写真 82　出土遺物（木製品）⑦

430-1

430-2

432-1

432-2

433-1

433-2

434-1

434-2

437-1

437-2

遺物包含層L6

写真 83　出土遺物（木製品）⑧

435-1

435-2

436-1

436-2

439-1

439-2

438

440

441-1

441-2

442-1

442-2

遺物包含層L6

写真 84　出土遺物（木製品）⑨

443-1

443-2

444-1

444-2

445-1

445-2

446-1

446-2

447-1

447-2

448

450

449-1

449-2

451-1

451-2

遺物包含層L6

写真 85　出土遺物（木製品）⑩

表3 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	掘立柱建物跡3 Pit1	須恵器　甕	口縁部		①灰色(N4) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
2	掘立柱建物跡3 Pit1	須恵器　甕	体部		①②灰色(N4)	精緻	
3	掘立柱建物跡3 Pit6	須恵器　皿蓋か	天井部		①灰白色(N7) ②灰白色(N6)	3mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む	
4	掘立柱建物跡3 Pit2	土師器　甕	口縁部		①②にぶい橙(7.5YR7/4)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を少量含む	
5	掘立柱建物跡2 Pit1	須恵器　高坏	脚部	②(12.0)	①②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
6	掘立柱建物跡2 Pit1	須恵器　高坏	脚部	②(10.4)	①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	
7	掘立柱建物跡2 Pit3	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
8	掘立柱建物跡2 Pit1	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N7)	0.5mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
9	掘立柱建物跡2 Pit1	須恵器　高坏か	口縁部		①灰白色(N7) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
10	掘立柱建物跡2 Pit2	須恵器　甕	体部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を少量含む	
11	掘立柱建物跡2 Pit6	須恵器　ハソウ	底部～体部	②(7.6)	①青灰色(5PB5/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1～2mm程の粗粒砂を若干含む	
12	掘立柱建物跡2 Pit2	土師器　甕	口縁部～体部	①(14.4)	①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②黒色(10YR2/1)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む	
13	掘立柱建物跡2 Pit2	土師器　甕	口縁部		①②灰白色(2.5Y8/1)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む	
14	掘立柱建物跡2 Pit1	土師器　甕	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい
15	掘立柱建物跡2 Pit2	土師器　甕	体部		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	2～3mm程の礫を含む 1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
16	掘立柱建物跡1 Pit6	須恵器　高台付皿か	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を少量含む	風化が著しい
17	SP3	土師器　甕	口縁部		①にぶい赤褐色(2.5YR4/4)　②にぶい赤褐色(5YR4/3)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 2mm程の礫を若干含む	
18	土壙4	須恵器　平瓶	体部		①灰色(N6) ②灰色(7.5Y5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
19	溝2	須恵器　円面硯	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
20	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　坏蓋	完形復元	①(10.4)③3.7	①②暗灰色(N3)	精緻	
21	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N4) ②灰色(N6)	精緻	
22	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　坏蓋	口縁部	①(10.0)	①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
23	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　坏蓋	口縁部	①(16.6)	①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	200と同一個体か
24	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　坏蓋	天井部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
25	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高台付坏身	底部～体部	②(11.6)	①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	1～2mm程度の粗粒砂を若干含む	
26	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高台付坏身	底部～体部	②(8.6)	①②灰白色(N8)	1～2mm程度の粗粒砂を若干含む	
27	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高台付坏身	底部～体部	②(7.1)	①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
28	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高台付坏身	底部～体部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	底部外面にヘラ記号
29	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高台付壺か	底部～体部	②(4.8)	①青灰色(5PB6/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	内面の風化が目立つ
30	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高坏	坏部		①②灰白色(N7)	0.5mm以下の粗粒砂を含む	
31	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N5)	精緻	
32	NR1-L3・遺物包含層L4	須恵器　高台付壺か	底部	②(12.0)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む	317と同一個体か

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
33	NR1-L3・遺物包含層L4	土師器　甕	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	3mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を若干含む	34と同一個体か
34	NR1-L3・遺物包含層L4	土師器　甕	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	33と同一個体か
35	NR1-L3・遺物包含層L4	土師器　甕	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を含む	
36	NR1-L3・遺物包含層L4	土師器　甕	口縁部		①②灰褐色(7.5Y4/2)	1～2mm程度の粗粒砂を多く含む	
37	NR1-L3・遺物包含層L4	弥生土器か　甕	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
38	NR1-L3・遺物包含層L4	弥生土器か　甕	口縁部		①灰黄褐色(10YR4/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
39	NR1-L3図面取り上げ遺物16	須恵器　坏身	底部	②(10.9)	①②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
40	NR1-L3図面取り上げ遺物47	須恵器　坏身	底部	②(9.2)	①灰白色(7.5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
41	NR1-L3図面取り上げ遺物32	須恵器　坏身	底部	②(7.6)	①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
42	NR1-L3図面取り上げ遺物5	須恵器　高台付坏身	底部	②(10.0)	①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
43	NR1-L3図面取り上げ遺物18	土師器　高台付皿	底部		①②灰白色(10YR8/2)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部に糸切り痕
44	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	完形	①12.2③4.2	①灰白色(N7) ②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
45	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部	①15.3	①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	天井部外面にカキ目か
46	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部	①(15.5)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
47	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	完形復元	①(16.0)③3.4	①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
48	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部	①(20.6)	①青灰色(5PB6/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
49	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	天井部		①灰色(N6) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
50	NR1-L3底面	須恵器　蓋か	口縁部	③2.7	①②青灰色(5BP6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
51	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部	③2.2	①灰色(N6) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
52	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰色(N6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	歪みが目立つ
53	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
54	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N6) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
55	NR1-L3底面	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
56	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	完形復元	①(11.6)②6.3 ③4.9	①灰白色(N7) ②灰色(N6)	精緻	
57	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部	②(7.3)	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
58	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.0)	①灰色(N6) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	熔着した他個体あり
59	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部	②(7.8)	①灰色(N5) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
60	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.9)	①青灰色(5B6/1) ②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部外面にヘラ記号
61	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.7)	①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部外面にヘラ記号
62	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部	②(11.7)	①②灰色(N6)	1～2mm程の粗粒砂を若干含む	高台の貼り付け痕明瞭
63	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
64	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部		①青灰色(5B6/1) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
65	NR1-L3底面	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(10Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
66	NR1-L3底面	須恵器　坏身	口縁部		①灰色(N6) ②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
67	NR1-L3底面	須恵器　皿	口縁部～底部	③2.6	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	
68	NR1-L3底面	須恵器　高坏	坏部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
69	NR1-L3底面	須恵器　高坏	脚部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
70	NR1-L3底面	須恵器　高坏	脚部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
71	NR1-L3底面	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
72	NR1-L3底面	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	
73	NR1-L3底面	須恵器　甕	頸部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
74	NR1-L3底面	須恵器　壺か	体部		①②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	体部外面にヘラ記号
75	NR1-L3底面	須恵器　甕	口縁部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
76	NR1-L3底面	須恵器　甕	口縁部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
77	NR1-L3底面	須恵器　長頸壺	頸部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
78	NR1-L3底面	土師器　坏	体部		①②橙色(7.5YR7/6)	1～4mm程度の礫を若干含む	
79	NR1-L3底面	土師器　高坏	脚部		①橙色(5YR7/6) ②灰白色(2.5Y7/1)	精緻	
80	NR1-L3底面	土師器　甕	口縁部		①②暗褐色(10YR3/3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
81	NR1-L3底面	土師器　甕	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黒褐色(2.5Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
82	NR1-L3底面	鞴　羽口	体部		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黄灰色(2.5Y5/1)	1～2mm程の粗粒砂を含む	風化が著しい
83	NR1-L3底面	黒色土器　椀	口縁部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②黒色(10Y2/1)	1～2mm程の粗粒砂を若干含む	
84	NR1-L3底面	土師質土器 高台付椀か	底部	②(6.9)	①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	焼成後に底部穿孔か外面炭付着
85	NR1-L3底面	白磁　椀か	体部		素地　灰白色(N8) 釉　　灰白色(10Y8/1)	精緻	
86	NR1-L3	須恵器　坏蓋	天井部	つまみ径 1.7	①②明青灰色(5PB7/1)	2mm程度の礫を若干含む	
87	NR1-L3	須恵器　坏身	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
88	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.0)	①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
89	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①青灰色(5PB6/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
90	NR1-L3	須恵器　皿	口縁部～底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
91	NR1-L3	須恵器　壺か	底部	②(7.6)	①②青灰色(5PB6/1)	2～3mm程度の礫を若干含む	底部外面にヘラ記号
92	NR1-L3	土師器　坏	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	精緻	風化が著しい
93	NR1-L3	弥生土器　支脚	脚部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1～2mm程度の礫を若干含む	風化が著しい
94	NR1-L3	須恵器　坏蓋	口縁部	①(10.8)	①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
95	NR1-L3	須恵器　坏蓋	天井部	つまみ径 2.3	①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
96	NR1-L3	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
97	NR1-L3	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
98	NR1-L3	須恵器　坏蓋か	天井部		①灰色(10Y6/1) ②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	天井部内面ヘラ記号
99	NR1-L3	須恵器　甕	口縁部		①②灰白色(N7)	精緻	
100	NR1-L3	須恵器　甕	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
101	NR1-L3	須恵器　甕	頸部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
102	NR1-L3	須恵器　高台付杯身か	底部	②(6.1)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
103	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	高台内端が欠損
104	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部	②(9.1)	①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	精緻	焼き膨れが目立つ
105	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.8)	①②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
106	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	完形復元	①(14.4)②(10.1)③5.8	①青灰色(5B6/1) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
107	NR1-L3	須恵器　坏身	底部	②(9.4)	①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
108	NR1-L3	須恵器　高台付皿か	底部		①灰白色(5Y6/1) ②紫灰色(5P6/1)	精緻	自然釉が付着
109	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	精緻	
110	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	精緻	
111	NR1-L3	須恵器　高台付杯身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	高台内端が欠損
112	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
113	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
114	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	344と同一個体か
115	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
116	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
117	NR1-L3	須恵器　高台付坏身	底部		①青灰色(10BG6/1) ②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
118	NR1-L3	須恵器　坏身	底部		①②灰色(N6)	0.5mm以下の粗粒砂若干含め	
119	NR1-L3	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N7)	0.5以下の粗粒砂を若干含む	
120	NR1-L3	須恵器　高坏	脚部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
121	NR1-L3	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	風化が目立つ
122	NR1-L3	須恵器　高坏	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	精緻	
123	NR1-L3	土師器　甕	口縁部～体部	①(13.3)	①にぶい橙色(5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.5mm以下の粗粒砂多く含め	
124	NR1-L3	黒色土器　椀	体部		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒色(10Y2/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	137と同一個体か
125	NR1-L3	土師質土器 高台付皿か	底部	②(7.6)	①②灰白色(10YR8/2)	1mm程度の粗粒砂を多く含む	
126	NR1-L3	緑釉陶器　高台付椀	底部		素地にぶい黄橙(10YR7/3) 釉　オリーブ灰(2.5GY5/1)	精緻	
127	NR1-L2	須恵器　坏身	口縁部～底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
128	NR1-L2	須恵器　坏身	底部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
129	NR1-L2	須恵器　坏身	底部	②(7.8)	①灰白色(10Y6/1) ②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
130	NR1-L2	須恵器　高台付坏身	口縁部～底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
131	NR1-L2	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む 3mm程の礫を若干含む	風化が目立つ
132	NR1-L2	須恵器か　高台付皿	底部		①灰白色(5Y7/1) ②黄灰色(2.5Y4/1)	精緻	風化が著しい
133	NR1-L2	須恵器　壺蓋	口縁部	①(8.7)	①②青灰色(5PB6/1)	精緻	
134	NR1-L2	土師器　皿	口縁部～底部	③2.0	①にぶい橙色(5YR7/4) ②にぶい橙色(7.5Y7/4)	精緻	風化が著しい
135	NR1-L2	土師器　皿か	底部		①②浅黄橙色(7.5Y8/3)	精緻	風化が著しい
136	NR1-L2	土師器　高台付皿か	底部		①②浅黄色(2.5Y8/3)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	風化が目立つ
137	NR1-L2	黒色土器　椀	体部		①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒色(10Y2/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	124と同一個体か
138	NR1-L2	製塩土器	体部		①②明赤褐色(2.5YR5/6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
139	NR1-L1	須恵器　坏蓋	天井部	つまみ径 2.6	①灰色(N6) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
140	NR1-L1	須恵器　坏蓋	天井部	つまみ径 2.1	①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
141	NR1-L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
142	NR1-L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
143	NR1-L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
144	NR1-L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
145	NR1-L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
146	NR1-L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
147	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部	②(11.0)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
148	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①青灰色(5B5/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	高台外面にしぼり痕か
149	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①灰白色(N7) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
150	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	精緻	
151	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
152	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
153	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5B5/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	高台内端が欠損
154	NR1-L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
155	NR1-L1	須恵器　坏身	底部		①②灰色(10Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
156	NR1-L1	須恵器　坏身	底部		①②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	157と同一個体か
157	NR1-L1	須恵器　坏身	底部		①②灰白色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	156と同一個体か
158	NR1-L1	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N7)	精緻	
159	NR1-L1	須恵器　高坏	脚部		①②明紫灰色(5P7/1)	精緻	
160	NR1-L1	緑釉陶器　椀か	体部		素地　浅黄色(2.5Y7/3) 釉　　オリーブ黄(7.5Y6/3)	精緻	風化が著しい
161	NR1-L1	青磁　椀か	口縁部		素地　灰白色(7.5Y7/1) 釉　　灰白色(7.5Y7/2)	精緻	
162	NR1-L1	青磁　椀か	体部		素地　灰白色(7.5Y7/1) 釉　　灰オリーブ(7.5Y7/3)	精緻	
163	NR1-L1	青磁　椀か	体部		素地　灰白色(7.5Y7/1) 釉　　灰白色(7.5Y7/2)	精緻	
164	NR1-L1	青磁　椀か	体部		素地　灰色(10Y5/1) 釉　　灰オリーブ(5Y5/2)	精緻	
165	NR1-L1	土師器　高台付杯身か	底部	②(10.2)	①にぶい浅黄橙(10YR7/3) ②にぶい浅黄橙(10YR7/2)	精緻	風化が目立つ
166	NR1-L1	土師器　杯か	底部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
167	NR1-L1	土師器　皿か	底部	②(6.3)	①②灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい
168	NR1-L1・L2境界層	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.8)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	
169	NR1-L1・L2境界層	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
170	NR1-L1・L2境界層	須恵器　高台付坏身	底部		①にぶい赤褐色(2.5YR5/3)　②青灰色(5PB6/1)	0.5mm以下の粗粒砂を含む	
171	NR1-L1・L2境界層	須恵器　獣硯か	脚部		①灰色(N5) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
172	NR1層位不明	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰色(N5)	2mm程の礫を若干含む	
173	NR1層位不明	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰色(N6)	精緻	
174	NR1検出時・上部包含層との境界層	須恵器　高台付坏身	底部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
175	NR1検出時・上部包含層との境界層	須恵器　皿	口縁部～底部	③2.3	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
176	NR1検出時・上部包含層との境界層	須恵器　皿か	底部	②(10.0)	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
177	NR1検出時・上部包含層との境界層	須恵器　転用硯	天井部		①②灰色(N6)	精緻	内面に墨付着
178	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(14.6)	①灰色(N6) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	外面に墨付着か
179	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(12.8)	①明青灰色(5PB7/1) ②明紫灰色(5P7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
180	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(11.6)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
181	包含層L6	須恵器　短頸壺蓋か	口縁部	①(10.6)③4.5	①灰色(N4) ②灰色(N5)	2mm程の礫を若干含む	
182	包含層L6	須恵器　短頸壺蓋か	口縁部	①(10.7)	①灰白色(N8) ②灰色(N5)	0.5mm以下の粗粒砂を若干含む	
183	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(12.4)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
184	包含層L6	須恵器　坏蓋	完形復元	①14.6③2.9 つまみ径 2.2	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
185	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(7.6)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
186	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(17.7)③2.8	①②灰白色(N8)	精緻	
187	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(18.0)	①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
188	包含層L6	須恵器　坏蓋	完形復元	①10.0③2.9 つまみ径 1.2	①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
189	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(9.7)	①灰白色(N7) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を含む	
190	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(9.5)	①②灰色(N6)	2mm程の礫を若干含む	
191	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(9.5)	①灰色(N4) ②黒褐色(2.5Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	192と同一個体か
192	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(9.2)	①灰色(N4) ②オリーブ黒色(7.5Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	191と同一個体か
193	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部	①(9.8)	①②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
194	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N6) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
195	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N8)	精緻	
196	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
197	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
198	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N5) ②灰白色(5Y8/1)	2mm程の礫を若干含む	
199	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	かえり端部が欠損
200	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②明紫灰色(5P7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	23と同一個体か
201	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
202	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N5)	精緻	焼き膨れが目立つ
203	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
204	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
205	包含層L6	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰色(N6)	精緻	
206	包含層L6	須恵器　坏身	口縁部～底部	①(16.8)	①暗灰色(N3) ②灰色(N6)	0.5mm以下の粗粒砂を若干含む	焼き膨れが目立つ
207	包含層L6	須恵器　高台付坏身	口縁部～底部	①(17.3)②(10.6) ③5.9	①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(10Y7/1)	精緻	
208	包含層L6	須恵器　高台付坏身	口縁部～底部	①(15.0)②(8.9) ③4.2	①②灰白色(N7)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を若干含む	
209	包含層L6	須恵器　高台付坏身	口縁部	①(12.5)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
210	包含層L6	須恵器　高台付坏身	底部	②(7.2)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	
211	包含層L6	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.3)	①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
212	包含層L6	須恵器　高台付坏身	底部	②(7.9)	①青灰色(5PB6/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
213	包含層L6	須恵器　坏身	口縁部		①②灰色(N6)	精緻	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
214	包含層L6	須恵器　坏身	口縁部		①②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	風化が著しい
215	包含層L6	須恵器　椀か	口縁部		①灰色(N4) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	
216	包含層L6	須恵器　高台付坏身	底部		①明青灰色(5PB7/1) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
217	包含層L6	須恵器　椀	底部	②(7.8)	①②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	底部内外面ヘラ記号
218	包含層L6	須恵器　高坏	完形復元	①14.0②(8.9) ③9.8	①灰白(5Y7/1) ②灰色(N6)	精緻	
219	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部～脚部	①(10.1)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	精緻	
220	包含層L6	須恵器　高坏	脚部～坏部	②(8.5)	①灰色(N4) ②灰色(5Y4/1)	精緻	
221	包含層L6	須恵器　高坏	完形復元	①(8.8)②(8.5) ③8.9	①灰色(N6) ②灰白色(10Y7/1)	精緻	
222	包含層L6	須恵器　高坏	坏部		①灰色(N4) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
223	包含層L6	須恵器　高坏	脚部～坏部		①暗灰色(N4) ②灰白色(N8)	精緻	風化が目立つ
224	包含層L6	須恵器　高坏	脚部～坏部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が目立つ
225	包含層L6	須恵器　高坏	脚部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
226	包含層L6	須恵器　短脚高坏か	脚部～坏部		①青灰色(5PB5/1) ②青灰色(5PB6/1)	精緻	
227	包含層L6	須恵器　短脚高坏か	脚部～坏部		①灰色(N5) ②灰白色(N7)	1mm程の礫を若干含む	
228	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部	①(13.9)	①暗灰色(N3) ②灰白色(5Y8/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
229	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部	①(13.7)	①灰色(10Y4/1) ②灰色色(N7)	精緻	
230	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部	①(10.0)	①灰色(N5) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
231	包含層L6	須恵器　高坏	脚部	②(8.4)	①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
232	包含層L6	須恵器　高坏	脚部	②(9.9)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
233	包含層L6	須恵器　高坏	脚部	②(10.0)	①灰黄褐色(10YR6/2) ②黒色(10Y2/1)	0.5mm以下の粗粒砂を含む	
234	包含層L6	須恵器　高坏	脚部	②(10.2)	①灰白色(N8) ②灰色(N4)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
235	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
236	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部		①灰色(N5) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
237	包含層L6	須恵器　高坏か	口縁部		①②暗灰色(N3)	精緻	
238	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
239	包含層L6	須恵器　高坏	口縁部		①灰色(N6) ②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
240	包含層L6	須恵器　高坏か	口縁部		①暗灰色(N3) ②灰白色(N8)	0.5mm以下の粗粒砂を若干含む	
241	包含層L6	須恵器　高坏か	口縁部		①②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
242	包含層L6	須恵器　高坏	脚部		①灰白色(N8) ②灰色(N4)	精緻	
243	包含層L6	須恵器　皿	口縁部～底部	①(23.3)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む 2～3mm程の礫を含む	
244	包含層L6	須恵器　皿	口縁部～底部		①灰色(N5) ②灰色(N6)	精緻	
245	包含層L6	須恵器　平瓶	底部～体部		①灰白色(7.5Y7/1) ②灰白色(N7)	精緻	
246	包含層L6	須恵器　平瓶か	頸部		①②暗灰色(N3)	精緻	
247	包含層L6	須恵器　壺蓋か	口縁部	①(6.5)	①灰色(N4) ②灰色(10Y4/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
248	包含層L6	須恵器　長頸壺	口縁部	①(8.9)	①②灰色(N4)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
249	包含層L6	須恵器　長頸壺	口縁部	①(9.0)	①②青灰色(5PB4/1)	2mm程の礫を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
250	包含層L6	須恵器　長頸壺	口縁部	①(9.8)	①灰色(N6) ②灰色色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
251	包含層L6	須恵器　脚付壺	脚部	②(10.8)	①灰白色(N7) ②灰白色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む	
252	包含層L6	須恵器　高台付壺	底部	②(10.2)	①灰色(N5) ②灰色色(5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 著しい
253	包含層L6	須恵器　甕	口縁部		①灰色(N5) ②灰白色(N8)	精緻	風化が 著しい
254	包含層L6	須恵器　甕	口縁部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
255	包含層L6	須恵器　甕	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む 3mm程の礫を若干含む	
256	包含層L6	須恵器　甕	底部	②(14.0)	①②灰白色(N8)	2mm程の礫を若干含む	風化が 著しい
257	包含層L6	須恵器　甕	底部	②(11.1)	①灰色(N6) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
258	包含層L6	須恵器　小型甕か	口縁部	①(9.9)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
259	包含層L6	須恵器　小型甕か	口縁部		①②灰色(N7)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
260	包含層L6	土師器　皿	口縁部 ～底部	③2.6	①橙色(5YR6/6) ②浅黄橙色(10YR8/3)	1mm以下の粗粒砂を含む	261と 同一個体か
261	包含層L6	土師器　皿	底部～ 体部		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/3)	精緻	260と 同一個体か
262	包含層L6	土師器　皿	口縁部 ～底部	③2.2	①橙色(5YR6/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
263	包含層L6	土師器　皿	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②橙色(7.5YR7/6)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
264	包含層L6	土師器　皿	口縁部		①②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
265	包含層L6	土師器　坏か	口縁部		①②にぶい橙色 (7.5YR7/4)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
266	包含層L6	土師器　坏か	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR 7/2)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	風化が 目立つ
267	包含層L6	土師器　甕	口縁部	①(19.9)	①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	
268	包含層L6	土師器　甕	口縁部 ～体部	①(15.6)	①にぶい黄褐色(10YR4/3) ②黒褐色(10YR3/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	内面に 炭化物付着
269	包含層L6	土師器　甕	口縁部 ～体部	①(15.4)	①にぶい赤褐色(5YR4/3) ②黒褐色(10YR3/1)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む 2mm以下の礫を若干含む	
270	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①灰褐色(7.5YR4/2) ②黒色(10YR2/1)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	風化が 目立つ
271	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①②橙色(7.5YR6/6)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む 2～3mm程の礫を 若干含む	風化が 目立つ
272	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①灰黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.57/2)	1mm以下の粗粒砂を 若干含む	
273	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①褐灰色(10YR4/1) ②黒褐色(10YR3/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
274	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①褐灰色(10YR3/1)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を 多く含む	
275	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②灰褐色(7.5YR6/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	口縁部内面 ヘラ記号
276	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	2mm程の礫を若干含む 1mm以下の粗粒砂を含む	
277	包含層L6	土師器　甕	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	
278	包含層L6	土師器　甕	体部		①②暗赤褐色(5YR3/4)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む 2～4mm程の礫を 若干含む	
279	包含層L6	土師器　甕	体部		①②にぶい黄橙(10YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を含む 2～3mm程の礫を含む	
280	包含層L6	土師器　甕	把手		①にぶい黄橙色(10YR 6/4)　②灰黄色(2.5Y 7/2)	1mm以下の粗粒砂を 多く含む	
281	包含層L6	土師器　甕	把手		①にぶい褐色(7.5YR5/3) ②浅黄色(2.5YR7/3)	1mm以下の粗粒砂を含む	
282	包含層L6	土師器　甕	把手		①②浅黄色(2.5Y7/3)	2mm程の礫を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
283	包含層L6	土師器　鉢	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/3)	2mm程の礫を多く含む	風化が著しい
284	包含層L6・L5境界層	須恵器　短頸壺蓋か	口縁部～底部	①(10.8)③4.5	①②灰白色(N8)	2mm以下の粗粒砂を若干含む	
285	包含層L6・L5境界層	須恵器　皿	口縁部～底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	
286	包含層L6・L5境界層	須恵器　皿	口縁部		①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 2mm程の礫を若干含む	
287	包含層L6・L5境界層	須恵器　高坏	脚部	②(9.2)	①灰白色(N7) ②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
288	包含層L6・L5境界層	須恵器　坏身	完形復元	①(8.2)③3.2	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
289	包含層L6・L5境界層	土師器　甕	口縁部		①②黒褐色(2.5Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	
290	包含層L6・L5境界層	土師器　甕	口縁部		①②灰黄褐色(10YR5/2)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	風化が著しい
291	包含層L6・L5境界層	土師器　甕か	口縁部		①②橙色(7.5YR7/6)	2mm程の礫を含む	風化が著しい
292	包含層L6・L5境界層	土師器　甕	口縁部		①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(2.5Y6/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 2～3mm程の礫を多く含む	
293	L6※掘立柱建物跡2・3検出時	須恵器　皿	口縁部～底部	①(22.7)	①灰白色(10Y8/1) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む 3mm程の礫を若干含む	
294	L6※掘立柱建物跡2・3検出時	土師器　小型壺	口縁部～体部	①(11.7)	①黒褐色(7.5YR3/2) ②黒色(10YR2/1)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	内面に炭化物付着
295	包含層L5	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
296	包含層L5	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
297	包含層L5	須恵器　壺蓋か	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
298	包含層L5	須恵器　蓋か	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
299	包含層L5	須恵器　坏身	口縁部～底部	①(14.4)②(8.4)③4.0	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	
300	包含層L5	須恵器　坏身	口縁部～底部	①(11.0)②(6.6)③4.2	①②灰白色(N7)	2mm以下の粗粒砂を含む	
301	包含層L5	須恵器　坏身	底部	②(6.1)	①②明紫灰色(5P7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
302	包含層L5	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.0)	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
303	包含層L5	須恵器　坏身	口縁部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	粘土継ぎ目明瞭に残る
304	包含層L5	須恵器　坏身	口縁部～体部		①灰色(N5) ②青灰色(5PB5/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
305	包含層L5	須恵器　坏身	底部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	底部内面ヘラ記号
306	包含層L5	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
307	包含層L5	須恵器　高坏	坏部		①②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
308	包含層L5	須恵器　高坏	脚部		①灰色(N6) ②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を若干含む 4mm程の礫を若干含む	
309	包含層L5	須恵器　高坏	脚部	②(7.7)	①暗灰色(N3) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
310	包含層L5	須恵器　高坏	脚部	②(7.0)	①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
311	包含層L5	須恵器　高坏	口縁部		①灰色(N5) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
312	包含層L5	須恵器　高坏	口縁部		①灰白色(N7) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
313	包含層L5	須恵器　高坏	脚部		①灰色(N6) ②灰色(10Y5/1)	0.5～1mm程の粗粒砂を含む	
314	包含層L5	須恵器　高坏	脚部		①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
315	包含層L5	須恵器　ハソウ	体部		①灰白色(N8) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
316	包含層L5	須恵器　長頸壺	体部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	精緻	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
317	包含層L5	須恵器　高台付壺か	底部	②(10.7)	①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	32と同一個体か
318	包含層L5	須恵器　高台付壺	底部		①灰白色(N8) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
319	包含層L5	土師器　甕	口縁部		①②にぶい黄褐(10YR5/3)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
320	包含層L5	土師器　甕	口縁部		①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	2mm以下の粗粒砂を含む	風化が著しい
321	包含層L5	土師器　甕	口縁部		①②褐色(7.5YR4/4)	1mm以下の粗粒砂を多く含む 2mm程の礫を若干含む	
322	包含層L5	鞴　羽口	体部		①橙色(5YR6/6) ②青灰色(5PB6/1)	精緻	
323	包含層L4	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
324	包含層L4	須恵器　高台付坏身	口縁部～底部	①(14.3)②(9.4)③3.8	①②灰白色(N8)	2mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
325	包含層L4	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(N7.5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
326	包含層L3	須恵器　坏蓋	口縁部		①青灰色(5B7/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
327	包含層L3	須恵器　坏身	口縁部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
328	包含層L3	須恵器　高台付皿	口縁部～底部	③2.6	①②青灰色(5B5/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
329	包含層L3	陶器　高台付椀	底部	②(6.2)	素地　淡黄色(2.5Y8/4) 釉　淡黄色(2.5Y8/4)	精緻	
330	調査区南壁第21層	須恵器　高台付坏身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	60と同一個体か
331	調査区南壁第21層	須恵器　短脚高坏	脚部		①②灰白色(N8)	精緻	風化が著しい
332	旧床土L2	須恵器　坏身	底部	②(5.9)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	
333	旧床土L2	土師質土器か 高台付椀	底部	②(5.2)	①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰白色(10YR8/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	
334	旧耕土L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①青灰色(10GB6/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
335	旧耕土L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②青灰色(5B6/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
336	旧耕土L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰色(10Y6/1)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
337	旧耕土L1	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(10Y6/1) ②明青灰色(5B7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
338	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部	②(9.8)	①②灰白色(N8)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が著しい
339	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部	②(7.3)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	内面に付着物あり
340	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
341	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部		①明青灰色(5PB7/1) ②灰白色(2.5Y8/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	
342	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	風化が著しい
343	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を含む	
344	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰白色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	114と同一個体か
345	旧耕土L1	須恵器　高台付坏身	底部		①灰色(N6) ②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
346	旧耕土L1	須恵器　坏身	底部		①②灰白色(7.5Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
347	旧耕土L1	須恵器　短頸壺	口縁部	①(9.8)	①明青灰色(5B7/1) ②灰白色(N7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
348	旧耕土L1	陶器　擂鉢	底部		①②赤褐色(7.5YR3/3)	精緻	卸目7反時計回り
349	旧耕土L1	青磁　椀	体部		素地灰白色(5Y8/1) 釉　オリーブ灰(2.5GY4/1)	精緻	
350	旧耕土L1	青磁　皿か	底部		素地　灰白色(5Y8/1) 釉　灰白色(5Y7/2)	精緻	
351	旧耕土L1	土師器　鉢	口縁部		①②灰白色(10YR8/1)	2mm以下の粗粒砂を若干含む	

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
352	旧耕土L1	瓦質土器　鍋	口縁部		①②灰色(10Y4/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
353	旧耕土L1	瓦質土器　湯釜	口縁部	①(12.3)	①②黒色(N2)	精緻	
354	旧耕土L1	瓦質土器　湯釜	体部		①②黒色(N2)	精緻	
355	旧耕土L1	瓦質土器　足鍋	脚部		①②オリーブ黒色(10Y3/1)	精緻	風化が目立つ
356	旧耕土L1	瓦質土器　足鍋	脚部		①にぶい黄橙色(10YR6/4)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が目立つ
357	旧耕土L1	瓦質土器　足鍋	脚部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	精緻	風化が目立つ
358	旧耕土L1	瓦質土器　足鍋	脚部		①灰黄色(2.5Y7/2)	1mm以下の粗粒砂を含む	風化が著しい
359	旧床土L2・包含層L3	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.0)	①灰色(N6) ②灰色色(N7)	精緻	
360	旧床土L2・包含層L3	須恵器　壺か	底部		①灰色(10Y5/1) ②明青灰色(5PB7/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む マンガンを多く含む	
361	旧床土L2・包含層L3	青磁　椀	体部		素地灰白色(7.5Y7/1) 釉　灰オリーブ(7.5Y6/2)	精緻	
362	旧床土L2・包含層L3	青白磁　椀	体部		素地　灰白色(5Y8/2) 釉　　明緑灰色(10GY7/1)	精緻	
363	層位不明	須恵器　坏蓋	天井部	つまみ径 2.6	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
364	層位不明	須恵器　坏蓋	口縁部		①明青灰色(5PB7/1) ②青灰色(5PB6/1)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	歪みが大きい
365	層位不明	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
366	層位不明	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
367	層位不明	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰白色(N7) ②暗灰色(N3)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
368	層位不明	須恵器　坏蓋	口縁部		①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
369	層位不明	須恵器　短頸壺蓋か	口縁部	①(4.6)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む 2mm程の礫を若干含む	
370	層位不明	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.0)	①②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を含む	
371	層位不明	須恵器　高台付坏身	底部	②(7.3)	①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
372	層位不明	須恵器　高台付坏身	底部		①②灰色色(10Y7/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	
373	層位不明	須恵器　甕	口縁部		①灰白色(N7) ②灰色(N6)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
374	層位不明	須恵器　高台付壺か	底部		①青灰色(5PB6/1) ②灰色色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
375	層位不明	須恵器　高台付壺か	底部		①青灰色(5B6/1) ②青灰色(5PB6/1)	0.5mm以下の粗粒砂を若干含む 2～3mm程の礫を若干含む	
376	層位不明	土師器　皿	底部	②5.8	①灰黄色(2.5Y6・2) ②灰黄褐色(10YR4/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	底部外面に糸切り痕
377	層位不明	土師器　甕	口縁部		①浅黄橙色(10YR8/3)	精緻	風化が著しい
378	層位不明	土師器　甕	口縁部		①②にぶい黄橙(10YR7/2)	1mm以下の粗粒砂を多く含む	
379	家畜病院基礎埋土	須恵器　高台付坏身	底部	②(8.3)	①②灰白色(N7)	1mm以下の粗粒砂を若干含む	
380	家畜病院基礎埋土	須恵器　高台付坏身	底部		①②明青灰色(5PB7/1)	精緻	
381	家畜病院基礎埋土	須恵器　平瓶か	口縁部		①②灰色(N5)	1mm以下の粗粒砂を含む	粘土継ぎ目明瞭に残る
382	造成土	須恵器　坏身	口縁部～底部	③3.4	①②暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)	精緻	
383	造成土	須恵器　高坏	脚部～坏部	②(7.7)	①灰白色(N7) ②オリーブ黒色(10Y3/1)	1mm以下の粗粒砂を含む	

表4 出土遺物(石器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
384	包含層L6	不明品		表面を研磨している
385	造成土	石鏃か	残存長3.1 幅3.0 厚み1.7	先端が欠損

表5 出土遺物(木製品)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
386	掘立柱建物跡3 Pit5	柱	残長60.5 最大径19.7	表面に煤が付着している
387	掘立柱建物跡3 Pit4	柱	残長75.7 最大径21.5	表面に煤が付着している
388	掘立柱建物跡3 Pit6	柱	残長69.8 最大径20.3	表面に煤が付着している
389	掘立柱建物跡3 Pit1	不明品	残長20.2 残幅9.2 残厚1.9	
390	掘立柱建物跡3 Pit1	不明品		
391	掘立柱建物跡3 Pit3	木蓋か	残長8.3 残高3.0	
392	掘立柱建物跡2 Pit6	松明灯	残長29.0 残幅1.6 残厚1.4	一方の先端に煤が付着している
393	SP2	角杭	残長11.3 残幅4.0 残厚3.2	
394	谷埋土NR1	不明品	長さ10.5 幅13.9 厚み9.2	不定方向に切り込み痕が残る
395	谷埋土NR1	不明品	残長17. 5 幅2. 1 厚み0.7	
396	谷埋土NR1	不明品	残長8.8	
397	谷埋土NR1	円形曲物	最大径16.1 厚み0.9	
398	谷埋土NR1	松明灯か	長さ13.9 幅1.1 最大厚0.6	一方の先端に煤が若干付着している
399	谷埋土NR1	板材か	残長12.1 残幅5.8 厚み2.5	
400	谷埋土NR1	手斧か	残長10.0 残幅6.7 最大厚2.1	ベルトの役割をしたと考えられる木の表皮が付着している
401	谷埋土NR1	手斧か	長さ8.0 幅6.1 最大厚2.3	
402	谷埋土NR1	板材か	残長10.0 残幅1.5 厚み1.2	
403	谷埋土NR1	板材か	残長4.1 残幅4.7 厚み0.7	
404	谷埋土NR1	板材か	残長8.2 残幅3.5 厚み0.9	
405	谷埋土NR1	板材か	残長10.6 幅4.3 厚み0.7	
406	谷埋土NR1	板材か	残長7.5 残幅2.9 厚み1.5	
407	包含層L6	杭	残長17.4 幅8.9 厚6.4	
408	包含層L6	杭	残長19.6 残幅7.6 残厚6.1	
409	包含層L6	杭か	残長6.1 残幅4.6 残厚4.6	
410	包含層L6	柱か	残長20.5 幅11.9 厚み9.0	
411	包含層L6	角杭	残長11.3 幅5.7 厚み5.0	
412	包含層L6	角杭	残長11.6 幅5.6 厚み4.9	
413	包含層L6	角杭か	残長39.4 幅3.1 最大厚1.6	
414	包含層L6	丸杭	残長25.3 最大径5.0	
415	包含層L6	丸杭	残長20.9 最大径6.0	

遺物番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
416	包含層L6	丸杭	残長27.3　最大径4.2	
417	包含層L6	不明品	残長8.8　残幅8.8　厚み3.2	
418	包含層L6	丸杭か	残長22.4　最大径4.5	
419	包含層L6	丸杭	残長15.3　最大径4.2	
420	包含層L6	丸杭	残長14.0　最大径5.0	
421	包含層L6	不明品	残長8.1　残幅6.0　残厚3.1	
422	包含層L6	不明品	残長6.3　残幅5.5　残厚2.8	全体が炭化している
423	包含層L6	丸杭	残長6.0　最大径5.1	
424	包含層L6	丸杭	残長9.7　最大径4.8	
425	包含層L6	手斧か	残長22.1　残幅9.2　残厚1.5	
426	包含層L6	手斧か	残長10.0　残幅6.6　厚み3.3	
427	包含層L6	手斧か	残長9.9　残幅7.2　最大厚1.7	
428	包含層L6	手斧か	残長10.0　幅7.0　厚み1.2	
429	包含層L6	不明品	残長12.4　残幅8.0　最大厚2.0	表面に煤が付着している
430	包含層L6	刳物	長さ15.8　幅12.3　厚み6.9　深さ2.7 内法 上端長さ13.1 上端幅8.0 下端長さ8.5 下端幅5.4	
431	包含層L6	丸杭か	残長11.9　最大径6.5	
432	包含層L6	棒材か	残長64.0　幅2.0　厚み1.8	
433	包含層L6	不明品	残長25.9　幅1.8　厚み1.3	
434	包含層L6	松明灯か	残長25.1　残幅1.2　残厚1.0	一方の先端に煤が付着している
435	包含層L6	松明灯か	残長31.2　幅1.8　厚み0.9	一方の先端に煤が付着している
436	包含層L6	松明灯か	残長26.5　残幅1.9　残厚1.6	一方の先端に煤が付着している
437	包含層L6	松明灯か	長さ15.0　幅2.1　厚み1.6	
438	包含層L6	松明灯か	残長15.7　幅1.1　厚み0.6	一方の先端に煤が付着している
439	包含層L6	松明灯か	残長17.2　幅1.5　厚み0.4	両端に煤が付着している
440	包含層L6	松明灯か	残長13.0　残幅2.5　残厚1.3	一方の先端に煤が付着している
441	包含層L6	板材か	残長9.6　幅6.0　厚み0.7	
442	包含層L6	板材か	残長17.6　残幅5.8　厚み0.5	
443	包含層L6	板材か	残長10.0　幅1.7　厚み1.3	
444	包含層L6	板材か	残長20.7　幅3.5　厚み1.0	
445	包含層L6	板材か	残長17.8　残幅3.2　厚み1.0	
446	包含層L6	板材か	残長10.6　幅3.1　厚み1.0	
447	包含層L6	板材か	残長8.7　幅2.3　厚み1.0	
448	包含層L6	板材か	残長8.2　残幅2.8　厚み0.7	
449	包含層L6	板材か	残長9.3　残幅2.0　厚み0.7	一方の先端に煤が付着している
450	包含層L6	板材か	残長9.2　幅1.9　厚み1.0	
451	包含層L6	板材か	残長10.0　幅1.6　厚み1.0	

（６）付篇

山口県吉田遺跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

１.試料

試料は山口県吉田遺跡（平成18年度実施農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査：山口大学吉田キャンパス）から出土した建築部材３点である。

２.観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３.結果

樹種同定結果（針葉樹１種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis．SP）

（遺物 NO.1-1〈掘立柱建物跡3Pit5出土資料〉,1-2〈掘立柱建物跡3Pit6出土資料〉,2〈掘立柱建物跡3Pit4出土資料〉）

（遺物 NO.1-1〈掘立柱建物跡3Pit5出土資料〉,1-2〈掘立柱建物跡3Pit6出土資料〉,2〈掘立柱建物跡3Pit4出土資料〉）

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からややスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ、アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

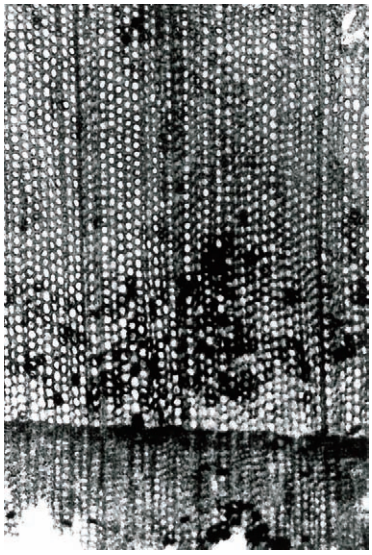
島地　謙・伊東隆夫　「日本の遺跡出土木製品総覧」　雄山閣出版（1988）
島地　謙・伊東隆夫　「図説木材組織」　地球社（1982）
伊東隆夫　「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」　東京大学木質科学研究所（1999）
北村四郎・村田　源　「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」　保育社（1979）
深澤和三　「樹体の解剖」　海青社（1997）
奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」（1985）
奈良国立文化財研究所　「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」（1993）

◆使用顕微鏡◆

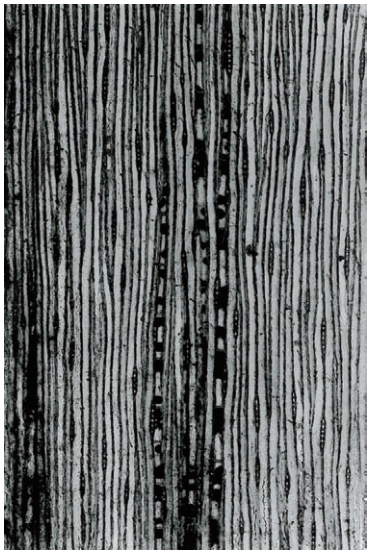
Nikon　MICROFLEX　UFX－DX　Type　115

山口大学吉田遺跡出土木製品同定表

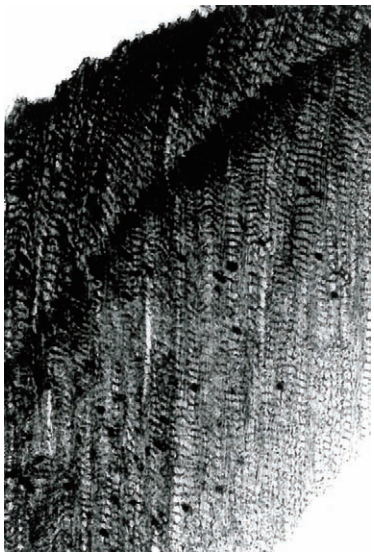
No	品名	樹種
1-1	柱材	ヒノキ科アスナロ属
1-2	柱材	ヒノキ科アスナロ属
2	柱材	ヒノキ科アスナロ属


木口 ×40

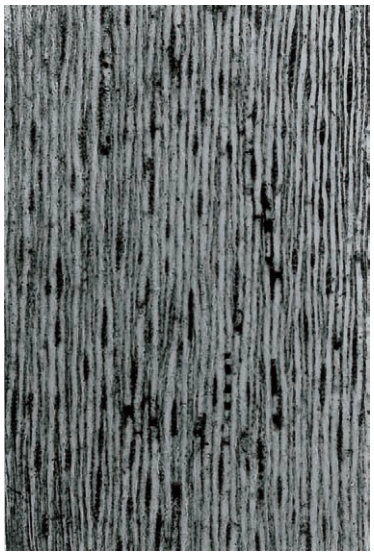
柾目 ×100


板目 ×40

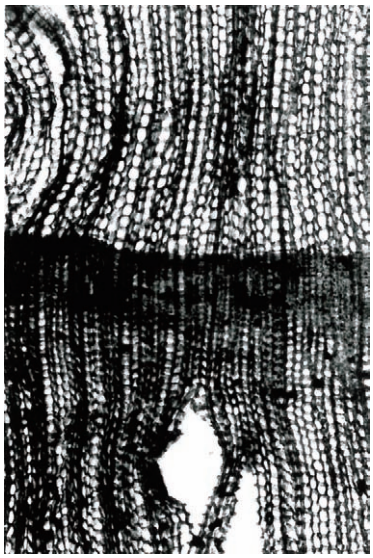
NO.1－1 ヒノキ科アスナロ属

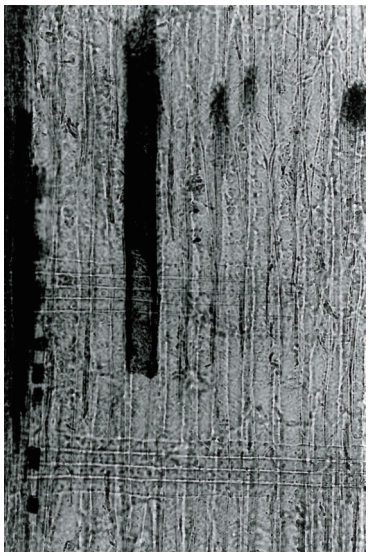

木口 ×40

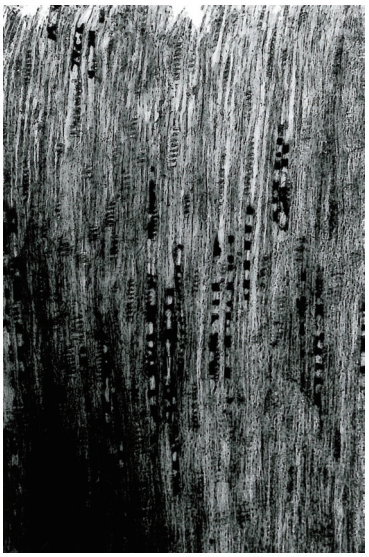
柾目 ×100


板目 ×40

NO.1－2 ヒノキ科アスナロ属


木口 ×40


柾目 ×100


板目 ×40

NO.2 ヒノキ科アスナロ属

３.農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内S-20

調査面積　約19㎡

調査期間　平成18年11月10日

調査担当　横山成己

調査結果　農学部附属家畜病院南面に建物が増築されたことに伴い、新規の配管工事が実施されることとなった。その掘削深度から、造成土下の遺物包含層および谷埋土を破壊する可能性があり、工事立会を行うこととなった。調査対象地は、病院建物南西側の幅0.6m×長さ31m区間である。

土層断面記録は図37のＡ地点を基準とし、Ｈ地点までの８地点で行っている。調査地は南東から北西へ急傾斜で降下しているため、ここでは標高により報告を行う。

Ａ地点は地盤高27.706m、以下はアスファルト及び造成土、27.011mで明黄色の地山が検出されている。3.5m先のＢ地点は地盤高27.98m、以下アスファルト及び造成土、27.2mで遺物包含層上面を確認した。6.5m先のＣ地点は地盤高28.036m、以下アスファルト及び造成土、27.409mで遺物包含層上面を確認。11m先のＤ地点は地盤高28.351m、以下アスファルト及び造成土、27.634mで遺物包含層上面を確認。16m先のＥ地点は地盤高28.648mで以下造成土、28.305mで旧耕土上面、28.17mで旧床土上面、28.057mで遺物包含層上面、27.707mで谷埋土上面を検出した。23m先のＦ地点は地盤高28.924mで以下表土及び造成土、28.333mで旧耕土上面、28.253mで旧床土上面を確認。29m先のＧ地点は地盤高29.332mで以下表土及び造成土、28.369mで旧耕土上面、28.208mで旧床土上面を確認。31m先のＨ地点は地盤高29.369mで以下表土及び造成土、28.27mで旧耕土上面を確認した。この結果、調査区北西端部は大学移転前の耕土及び床土が削平を受けているが、全面にわたり遺構・遺物が埋存する可能性が高いことが判明した。今後周辺で更なる開発等が実施される場合は遺跡調査が必要である。

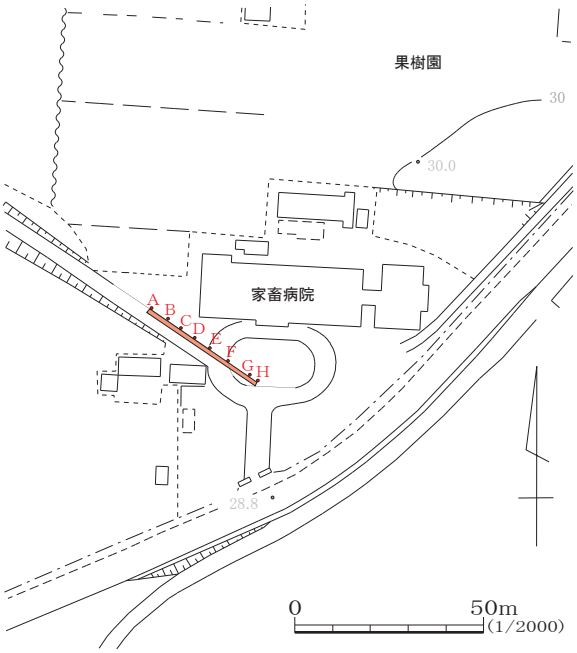


図 37　調査区位置図

写真 86　Ａ地点土層断面（南から）

写真 87　Ｅ地点土層断面（南から）

４.教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う本発掘調査

調査地区　吉田構内K・L－16区

調査面積　約84㎡

調査期間　平成18年6月12日～8月8日

調査担当　田畑直彦

調査結果

（１）調査の経緯（図38、写真88）

平成17年度に行った予備発掘調査の結果、共通教育本館南東部に設定したD～F調査区で遺構と遺物包含層が確認されたため、工事に先立って本発掘調査が実施されることが決定された[註1]（平成18年5月9日埋蔵文化財資料館専門委員会承認）。これを受けて今回、埋蔵文化財資料館が本発掘調査を行った。

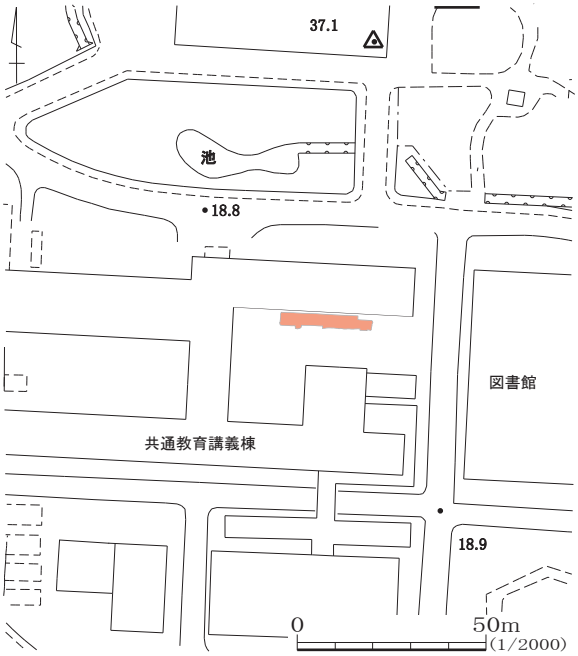


図38　調査区位置図

写真 88　調査前全景（西から）

（２）基本層序

基本層序は下記の通りである。

第１層　表土（層厚約5～30㎝）

第２層　造成土（2－1～4に細分、層厚約30～70㎝）

第３層　旧耕土（水田耕土か　3－1～2に細分、層厚約5～20㎝）

第４層　遺物包含層（4－1～3に細分、層厚約5～40㎝）

第５層　弥生時代以降の遺構面形成層（5－1～5に細分、層厚約10～20㎝以上）

第６層　地山（6－1～15に細分、層厚10㎝以上）

調査区は建物建設時に大規模な攪乱を受けている。調査区東部では第2層の直下が遺構検出面であり、y=558以西で第4層が残存している状況であった。また、調査区中央部からやや西寄りにかけては浄化槽・既設配管による攪乱が著しいため、東西方向の土層を連続的に確認することができなった。5層は従来地山と捉えられてきた土層と近似するが、B－B’断面で5－1層が縄文時代河川埋土の上面に堆積している状況が確認できた。このため、5層は弥生時代以降の遺構面形成層と捉え、これに近い標高で検出された東側の5－2～4層も5層に位置づけたが、上記の攪乱により5－1層との対応関係が不明確であるため、5－2～4層は6層に含まれる可能性がある。

（３）遺構

調査の結果、縄文時代河川1条、古墳時代の河川、ピット、杭列、水田暗渠を検出した。

縄文時代河川

調査区西端部で、後述する古墳時代河川掘削後に検出した。同河川検出面が縄文時代河川最上層に相当する。この層はオリーブ灰色（2.5GY6/1）シルトに黒褐色（10YR3/1）シルトをブロック状に含

んでいたことから、古墳時代河川完掘後、確認のためアウトフレームの基礎掘削が予定されていたA－A’断面以東についてさらに掘削を行い土層の確認を行った。その結果、最上層からは遺物は出土しなかったものの、その下のオリーブ灰色（2.5GY5/1）粗砂は流木などの植物遺体を含んでいた（写真92）。また、これより下位の土層（図39キ～シ）はシルトと粗砂の互層となっており、次第に湧水が顕著となった。なお遺物として、縄文時代晩期の土器が最下部（図39コ・サ・シ）から出土したが、これらの層は特に湧水が激しかったため、出土層位を明確に確認することができなかった。

縄文時代河川はごく一部の調査にとどまったため、その規模不明であるが、B－B’断面で東肩が確認できた。以上からこの河川は少なくとも幅約7.5m、深さ約1.1mの規模であり、さらに調査区西側に広がっていると考えられる。今回調査区と調査区西端から約4m西側に位置する予備発掘調査のD調査区[註2]では、古墳時代河川検出面が近似していることから、少なくともここまでは広がる可能性が高い。また、調査区から南西約70mに位置する教養部複合棟（現メディア基盤センター）敷地[註3]、南東約60mに位置する教育総合研究センター渡り廊下新設地点[註4]で縄文時代晩期の河川が検出されており、同一の河川である可能性が考えられる。

古墳時代河川

上記のように調査区西部では縄文時代河川最上層を検出面とする。また、その上面に堆積する遺物包含層である4－1層：黒褐色（10YR3／1）シルトは予備発掘調査のD調査区の5－1層と同一層と考えられる。ただし、予備発掘調査のD調査区では、5－1層が古墳時代河川の検出面であったが、今回の調査区では古墳時代河川の埋土上に堆積している点が異なる。両調査区間を調査していないため、両者が別の土層である可能性も残るが、河川の開析、埋没が繰り返されていたことを示す可能性が高い。

調査区西部で検出した河川は西側から北東方向へ流路方向を持つ。調査区内で確認できた最大幅は約1.4m、深さは約0.45mである。埋土は粗砂、シルトの互層であり、埋土下部を中心に弥生土器・土師器、須恵器片などが多数出土した。

一方、調査区東部、Y＝555付近でも古墳時代河川の東肩を検出した。水田暗渠、既設配管による攪乱を受けているため、検出幅は南北方向約1.8mにすぎない。また、河川の肩から西側は浄化槽による攪乱がみられるため、調査区西部の河川と同一なのか、別の河川なのか定かではない。加えて、調査区東部では遺物が少ないため、調査区西部との時期差も定かではない。このため本報告では両者を古墳時代河川と一括し、西・東で区別しておく。

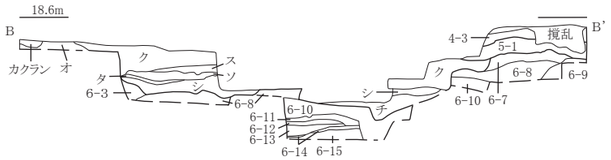
ピット

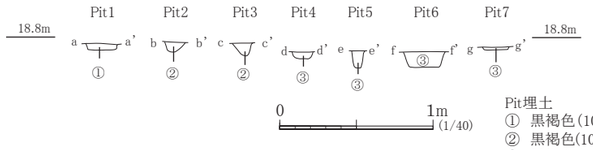
ピットは調査区東部で7基検出した。Pit1は直径約24㎝、深さ4.7㎝。Pit2は平面規模10×14㎝、深さ7.0㎝。Pit3の平面規模は12×13㎝、深さ7.9㎝。Pit4は直径15㎝、深さ4.3㎝。Pit5は直径10㎝、深さ11.9㎝。Pit6の平面規模は24×42㎝、深さ10.5㎝。Pit7の平面規模は20㎝×不明、深さ2.0㎝。

埋土はPit1が黒褐色（10YR3/1）シルト、Pit2～3が黒褐色（10YR3/1）シルトとオリーブ黄色（5Y6/3）シルトとのブロック土、Pit4～7が黒褐色（10YR3/1）粘質土と灰黄色（10YR4/2）粘質土とのブロック土であった。いずれのピットも深さは10㎝前後と浅く、遺物も出土していないが、埋土の色調から弥生時代～古代に属する可能性が高い。

その他の遺構

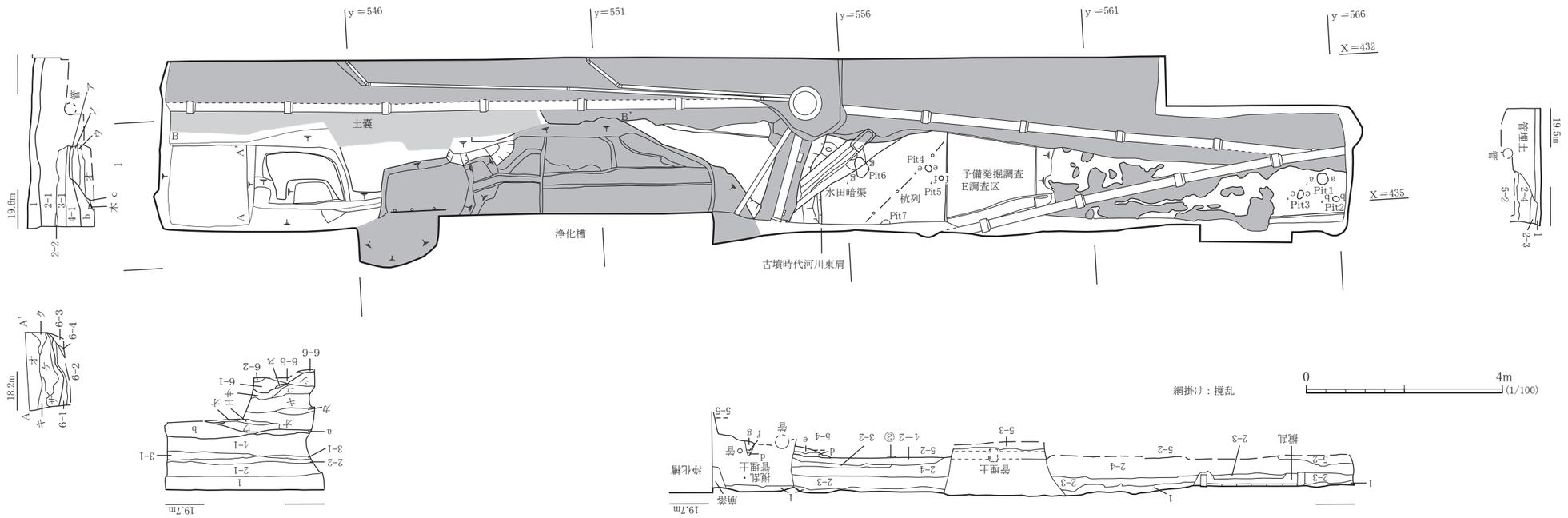
その他の遺構として、ｙ＝555～558付近で水田暗渠・杭跡を検出した。水田暗渠は統合移転直前まで使用されていたものである。また、杭列も水田暗渠に並行していることから水田暗渠とほぼ同時期のものと考えられる。





Pit埋土
① 黒褐色(10YR3/1)シルト
② 黒褐色(10YR3/1)粘質土とオリーブ黄色(5Y6/3)シルトとのブロック土
③ 黒褐色(10YR3/1)粘質土と灰黄褐色(10YR4/2)粘質土とのブロック土

図 40 Pit1 ～ Pit6 断面図



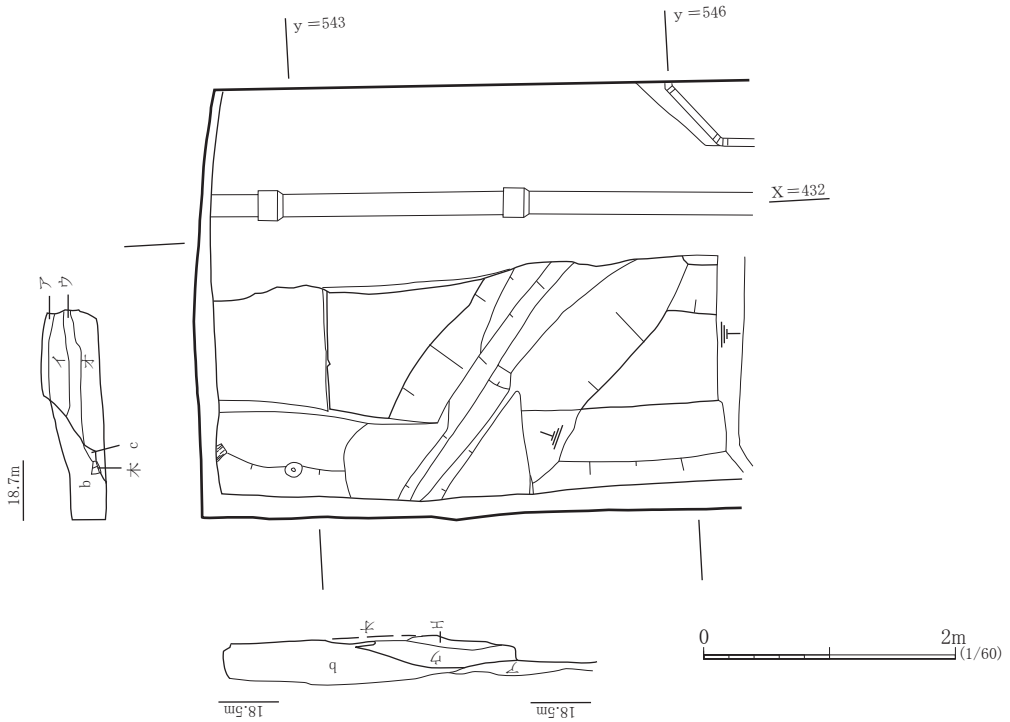
1 表土(マサ土)
2－1 造成土 灰色(5Y4/1)土、耕土・床土を含む～5cm大の礫を含む
2－2 造成土 灰色(5Y4/1)土、耕土・床土を含む(礫をほとんど含まない)
2－3 造成土 マサ土
2－4 造成土 暗緑灰色(7.5GY4/1)土にマサ土を含む
3－1 耕土 灰色(7.5Y5/1)シルト
3－2 耕土 灰オリーブ色(5Y5/3)シルト
4－1 遺物包含層 黒褐色(10YR3/1)シルト
4－2 遺物包含層 黄灰色(2.5Y4/1)シルト
4－3 遺物包含層か 褐灰色(10YR6/1)シルト
5－1 弥生時代以降遺構面形成層 灰黄色(2.5Y7/3)粘土
5－2 弥生時代以降遺構面形成層 黄褐色(2.5Y5/3)シルト
5－3 弥生時代以降遺構面形成層 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
5－4 弥生時代以降遺構面形成層 オリーブ色 (5Y6/6)細砂
5－5 弥生時代以降遺構面形成層 浅黄色(2.5Y7/3)粘土

6－1 地山 青灰色(5B6/1)粗砂(3cm大の礫を多く含む)
6－2 地山 灰色(5Y6/1)粗砂
6－3 地山 青灰色(10BG6/1)礫
6－4 地山 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
6－5 地山 オリーブ色(5Y6/6)礫
6－6 地山 明黄褐色(2.5Y6/6)シルト
6－7 地山 オリーブ灰色(10Y6/2)粗砂
6－8 地山 オリーブ色(5Y6/6)礫
6－9 地山 灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト
6－10 地山 青灰色(5BG6/1)礫
6－11 地山 黄橙色(10YR8/8)粘土
6－12 地山 明緑灰色(7.5GY7/1)シルト
6－13 地山 青灰色(5B6/1)粘土
6－14 地山 オリーブ黄色(7.5Y6/3)シルト
6－15 地山 オリーブ灰色(10Y6/2)粗砂

古墳時代河川埋土
a 黒褐色(2.5Y3/1)シルト(同色の粗砂、植物遺体を含む)
b 黒褐色(2.5Y3/1)シルト、暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂の互層(植物遺体を多く含む)
c 暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂
d 黒褐色(2.5Y3/1)粘質土
e 灰色(7.5Y4/1)粗砂と灰色(7.5Y6/1)粘土のブロック土
f 灰色(7.5Y4/1)粗砂
g 灰色(10Y5/1)粗砂

縄文時代河川埋土
ア オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトに黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含む
イ オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト
ウ 黒褐色(10YR2/1)シルトに青灰色(5BG6/1)シルトを少量含む
エ 暗灰黄色 (2.5Y5/2)粗砂
オ 青灰色(5BG6/1)シルト
カ オリーブ灰色(2.5GY5/1)粗砂(植物遺体を含む)
キ 灰色(7.5Y6/1)粗砂
ク 黒色(10YR2/1)シルト
ケ 青灰色(5BG6/1)粗砂
コ 灰白色(7.5Y7/1)粗砂
サ 黒褐色(2.5Y3/1)シルト、青灰色(5B6/1)粗砂とのブロック土
シ 灰色(5Y6/1)粗砂 黒色(10YR2/1)シルト・青灰色(5B6/1)シルトブロックを含む
ス 青灰色(5B6/1)細砂
セ オリーブ灰色(5GY5/1)粗砂
ソ 黒色(10YR2/1)シルト(同色の粗砂、植物遺体を含む)
タ 青灰色(5B5/1)粗砂、植物遺体を含む
チ 黒色(10YR2/1)シルトと青灰色(5B6/1)シルトとの互層(植物遺体を含む)

図 39 調査区平面図・断面図



古墳時代河川埋土
a　黒褐色(2.5Y3/1)シルト、同色の粗砂、植物遺体を含む
b　黒褐色(2.5Y3/1)シルト、暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂の互層、植物遺体を多く含む
c　暗灰黄色(2.5Y5/2)粗砂

ア　縄文時代河川埋土　オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルトに黒褐色(10YR3/1)シルトをブロック状に含む
イ　縄文時代河川埋土　オリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト
ウ　縄文時代河川埋土　黒褐色(10YR2/1)シルトに青灰色(5BG6/1)シルトを少量含む
エ　縄文時代河川埋土　暗灰黄色 (2.5Y5/2)粗砂
オ　縄文時代河川埋土　青灰色(5BG6/1)シルト

図 41　古墳時代河川平面図・断面図

（4）遺物

縄文時代河川、古墳時代河川、遺物包含層などから縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土した。大半は図化できない小片であり、摩滅した土器片が目立つ。

1～7は縄文時代河川出土遺物でいずれも縄文時代晩期の土器である。1は縄文時代晩期中葉の深鉢口縁部、2は縄文時代晩期末の刻目突帯文土器深鉢口縁部。3は深鉢口縁部。4は深鉢胴部で外面に二枚貝条痕を施す。5は浅鉢胴部で上半で屈曲する。6は深鉢底部である。 7は丸底の深鉢底部。外面はタテミガキ、内面はナデを施す。

8～21のうち、8（浄化槽撹乱清掃時出土）、9（4－2層出土）のほかは、古墳時代河川出土遺物である。なお、8は出土状況から本来は古墳時代河川埋土に含まれていた可能性が高い。

8・9は弥生時代中期の垂下口縁壺口縁部で口縁部外面に山形文を施す。10は弥生時代中期の跳ね上げ口縁の甕。11は弥生時代前期の壺頸部。頸部に削出突帯を施し、突帯上に沈線を1条以上施す。12は弥生時代中期の垂下口縁部の頸部で、内面にM字状突帯を施す。また、外傾接合が確認できる。13は弥生時代中～後期の壺胴部で外面に5条の沈線を施す。14は弥生時代後期の甕胴部で外面に列点文を施す。15は弥生時代中期の壺もしくは鉢の底部である。厚底で外面が張り出す。16は弥生時代中期の甕の底部。17は弥生時代前～中期の壺底部。外傾接合が観察できる。18は古墳時代中期の土師器甕口縁部。内外面にナデを施し、先端を外面に折り曲げる。19は古墳時代中期の土師器高坏口縁部で、ヨコナデにより口縁部外面を緩やかに外反させる。20は須恵器坏蓋片。21は須恵器坏身片。20は古墳時代後期前半～中頃、21は古墳時代後期後半頃に属するものと考えられる。

写真89 調査区全景（西から）

写真90 調査区北壁土層断面（南西から）

写真91 調査区南西隅土層断面（北東から）

写真92 縄文時代河川流木検出状況（北東から）

写真93 調査区北西隅土層断面（南東から）

写真94 調査区中央部北壁土層断面①（南西から）

写真95 調査区中央部北壁土層断面②（南西から）

写真96 調査区西部遺物包含層検出状況（北東から）

写真97 調査区西部古墳時代河川完掘状況（北東から）

写真98 古墳時代河川東肩検出状況①（北東から）

写真99 古墳時代河川東肩検出状況②（南西から）

写真100 調査区中央部遺構完掘状況（北から）

写真101 調査区東部遺構完掘状況（北東から）

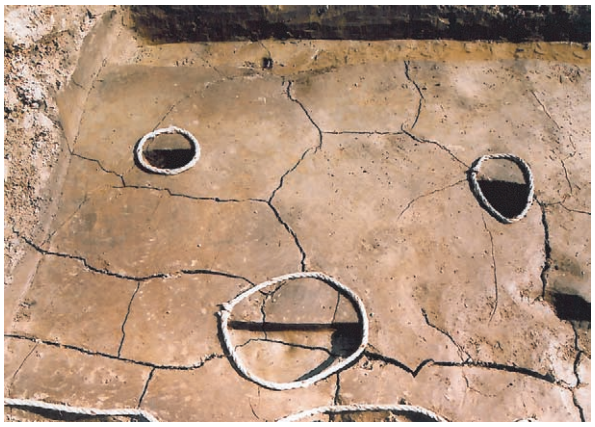


写真102 Pit1～3半裁状況（北から）

写真103 Pit4～6半裁状況（北から）

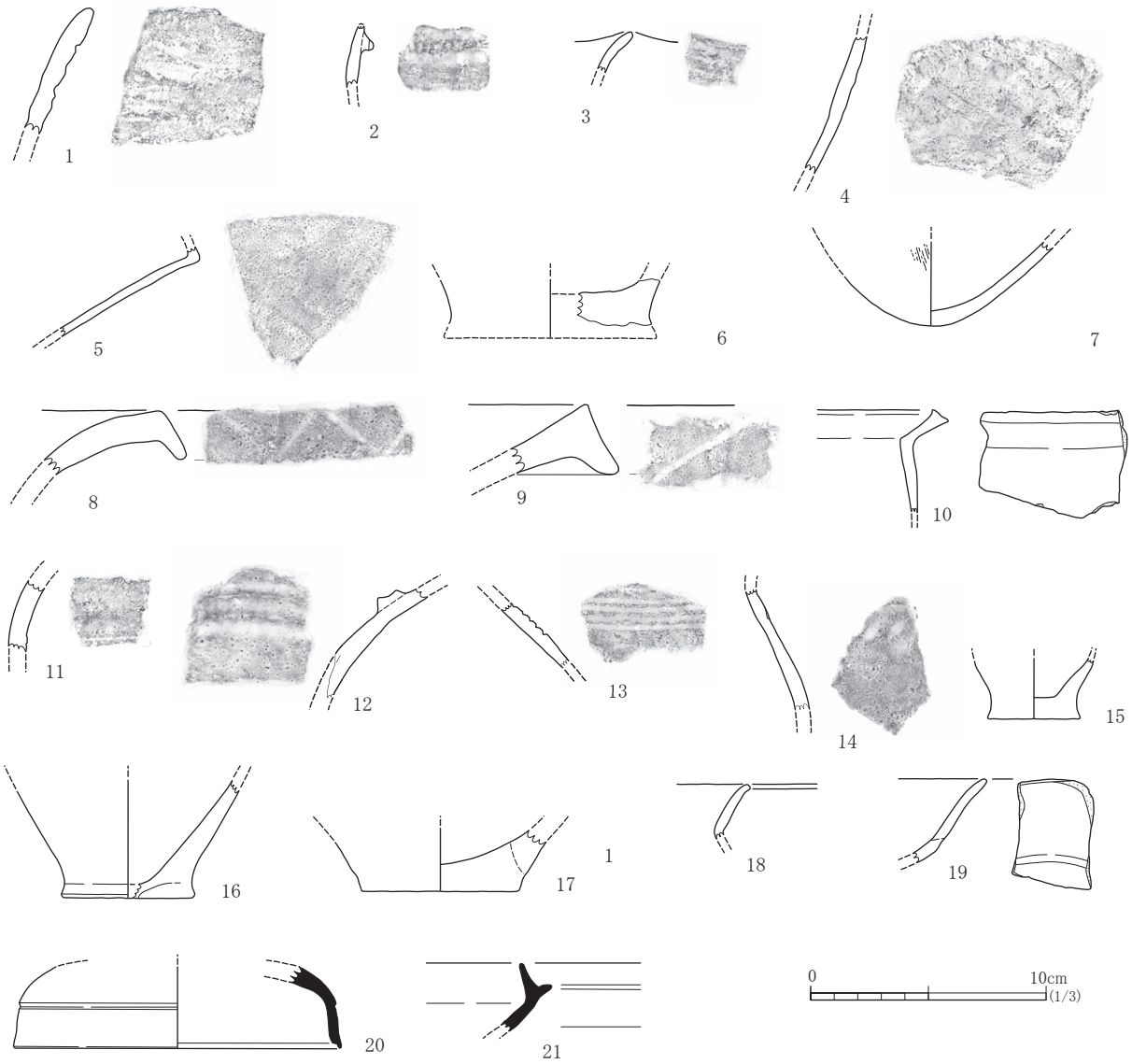


図 42 出土遺物実測図

（5）小結

今回の調査区のうち大半は攪乱を受けていたが、縄文時代河川、古墳時代河川、弥生時代～古代のものと考えられるピットなどを検出した。縄文時代河川は教養部複合棟（現：メディア基盤センター）敷地、教育総合研究センター渡り廊下新設地点で検出された縄文時代河川と同一の可能性が考えられる。また、古墳時代河川については西部・東部との関連は明らかにできなかったが、いずれも本館北側で検出された河川と一連の河川であろう。一方、調査区東部ではピットが検出されていることから、本来は微高地であり、居住域であった可能性が指摘できよう。

以上、予備発掘調査に続き、今回の本発掘調査においても吉田構内中心部における埋蔵文化財の状況を明らかにする上で大きな成果があった。調査区周辺では今回検出した河川、関連遺構等が分布していることは確実であり、今後も慎重な調査が必要である。

なお、上記の調査結果を受け、埋蔵文化財資料館専門委員会で今回の調査区における埋蔵文化財の保護について審議・判断した結果、調査区全体において攪乱が激しく、遺構等の残存状況が不良であることから、発掘調査による記録保存を行うこととなった。

写真 104 出土遺物①

写真 105 出土遺物②

［註］

1）田畑直彦（2007）「第1章第2節5教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口

2）前掲註1

3）河村吉行(1988)「第3章　吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口

4）本書次節参照

5）本書次節参照

表6 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	縄文河川	縄文土器　深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
2	縄文河川	縄文土器　深鉢	口縁部		①灰黄褐色(10YR5/2) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
3	縄文河川	縄文土器　浅鉢か	口縁部		①灰黄褐色(10YR5/2) ②灰黄灰色(10YR6/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
4	縄文河川	縄文土器　深鉢	胴部		①浅黄橙色(10YR8/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
5	縄文河川	縄文土器　浅鉢	胴部		①灰色(5Y5/1) ②灰色(5Y6/1)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
6	縄文河川	縄文土器　深鉢	底部		①浅黄色(2.5Y8/3) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
7	縄文河川	縄文土器　深鉢	底部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y5/1)	0.1～1mmの砂粒を多く含む	丸底
8	浄化槽撹乱清掃時	弥生土器　壺	口縁部		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
9	4－2層	弥生土器　壺	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
10	古墳河川(西部)	弥生土器　壺	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
11	古墳河川(西部)	弥生土器　壺	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
12	古墳河川(西部)	弥生土器　壺	胴部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
13	古墳河川(西部)	弥生土器　甕	口縁部		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
14	古墳河川(西部)	弥生土器　甕	胴部		①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰黄色(2.5Y6/1)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
15	古墳河川(西部)	弥生土器 壺または鉢	底部	②(5.2)	①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
16	古墳河川(西部)	弥生土器　甕	底部	②(7.6)	①②灰白色(5Y7/1)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
17	古墳河川(西部)	弥生土器　壺	底部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
18	古墳河川(西部)	土師器　甕	口縁部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
19	古墳河川(西部)	土師器　高坏	口縁部		①橙色(5Y6/6) ②黄橙色(10YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
20	古墳河川(東部)	須恵器　坏蓋	口縁部		①灰色(N4/0) ②灰色(N5/0)	精緻	
21	古墳河川(西部)	須恵器　坏身	口縁部		①②灰色(N4/0)	精緻	

5．教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う立会調査

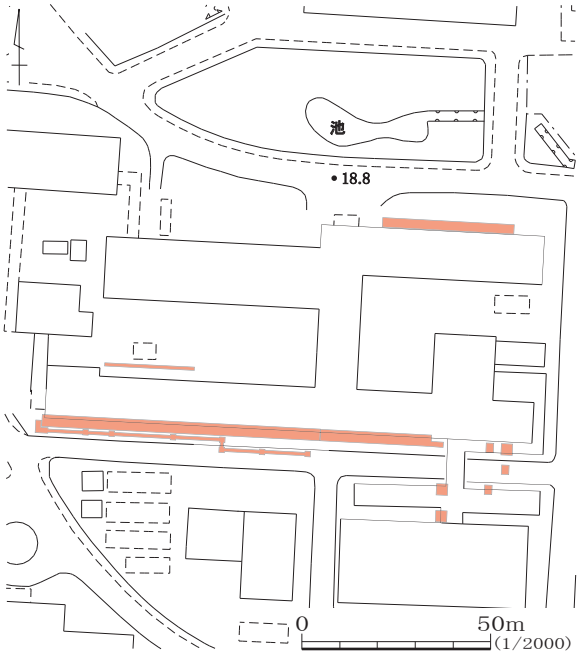


図43 調査区位置図

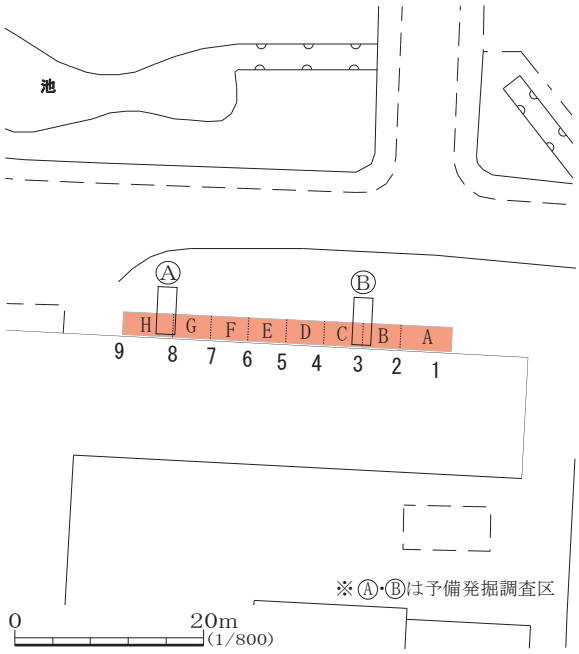


図 44 1 区地区割図

調査地区　吉田構内J・K・L－16区、I・J・K・L－17区

調査面積　約480㎡

調査期間　平成18年9月11～13、15、20、26～28、10月10～12、24、25、30日、平成19年1月9、15、16日

調査担当　田畑直彦

調査結果

（1）調査の経緯（図43～45）

平成17年度に行った予備発掘調査の結果、共通教育本館北側（A～C調査区）、共通教育講義棟北側（G・H調査区）、共通教育講義棟南側（I・J）調査区については、工事施工時に立会調査が実施されることが決定された[註1]（平成18年5月9日埋蔵文化財資料館専門委員会承認）。これを受けて今回、埋蔵文化財資料館が立会調査を行った。なお、調査区は広範囲に及ぶため、以下では1～5区に分けて報告を行う。

（2）1区

共通教育本館北側の調査区である。予備発掘調査時には弥生土器、土師器を含む河川が検出されたが、既設の共同溝による撹乱が著しかったことから立会調査を行うこととなった。工事は、既設の基礎（4ｍ間隔）の北側にアウトフレーム用の基礎を新設するものである。また、掘削は最大で現地表下約170㎝にまで及ぶため、掘削後に壁面に鋼管を打ち込み、その間に板を入れることにより壁面を補強する方法で行われた。以上の工程から調査にあたっては、4ｍ間隔の基礎を基準に1A～1Hの地区に分けて行った。調査の結果、調査区全体で予備発掘時に検出した河川を検出した。また、埋土からは弥生土器、土師器、石器、建築部材と思われる木製品などが大量に出土した。出土遺物は弥生時代中期～古墳時代前期までの土器が主体で、須恵器や古代以降の土器の土器は含まれていない。河川埋土の上層が削平を受けているため下限は確定できないが、本館南側で検出された河川から出土した遺物と同時期の遺物を含む。

1A～G区では現地表下約70～120㎝までが造成土でその直下で河川を検出した。河川の埋土は黒褐色（2.5Y3/1）シルト、粗砂、灰色（5Y6/1）粗砂、もしくはこれらのブロック土が主体である。また、1E～H区東部を除く地点では、現地表下約140～170㎝で青灰色（5B6/1・7/1)シルトもしくは粗砂の地山を検出した。1H区では現地表下60㎝付近まで旧水田床土であるオリーブ灰色（5Y6/3）シルトが残

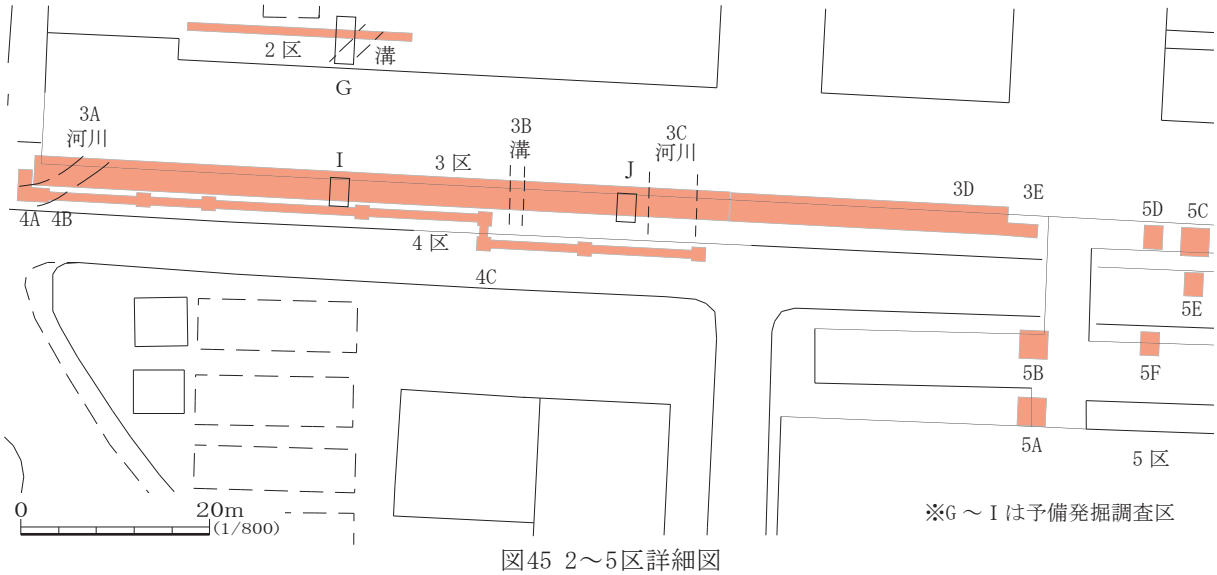


図45 2～5区詳細図

存しており、その直下で河川埋土が検出された。なお、1H区西部では現地表下約142cmで緑灰色(5G6/1)シルトの地山を検出した。

調査の結果、河川は1E～H区東部にかけて深くなっており、地山を確認することができなかった。上記の地区のほぼ南側に本発掘調査時に検出された河川が位置することからも、今回検出した河川と本発掘調査[註2]で検出した河川が一連であることはほぼ確実と考えられる。

（3）2区

共通教育講義棟北側の調査区である。工事は既設の排水管と同じ位置で排水管を新設するものであったが、G調査区で検出された弥生時代中期後半の溝の延長部分が検出される可能性が考えられた、H区の北側で立会調査を行った。その結果、G調査区の北東において幅約270～300cmの溝の延長部分を確認し、埋土上面からは弥生土器の小片が2点出土した。

（4）3区・4区

共通教育講義棟南側の調査区で、基本層序は予備発掘調査のI、J調査区と同じである。3区はアウトフレームの基礎の新設、4区は排水管の新設に伴い掘削が行われた。両区は隣接しているため、まとめて報告を行う。3A地点では現地表下約70cm、4A、4B地点では現地表下約100cmで同一と考えられる河川検出した。幅は3m前後と推測される。3A地点では河川直上までが造成土で、黒褐色（10YR3/1）粗砂の河川埋土が厚さ20cm以上あることを確認した。また、この層からは須恵器坏口縁部片が出土した。一方、4A地点では現地表下約105cmまでが造成土、約105cmから154cmまでが河川埋土である灰黄褐色（2.5Y6/2）粗砂、約154cm～173cmまでが褐灰色（10YR5/1）シルト、約173cm～190cmが灰黄褐色（10YR5/2）シルトであった。また、4B地点でも現地表下約120cm～150cmで灰色（7.5Y5/1）粗砂、黄灰色（2.5Y4/1）シルト、黒褐色（10YR3/1）シルト、灰オリーブ（7.5Y5/3）粗砂の河川埋土を確認したが、地山が確認できなかったため、深さは不明である。

3B地点では現地表下約134cmで幅約125cm、深さ約25cmの溝を検出した。埋土は灰色（10Y5/1）粗砂で、出土遺物はない。3C地点では、幅約5.5m、最深部約43cmの河川を検出した。埋土は灰色（10Y6/1）粗砂、オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルトなどからなり、I、J調査区でも検出された黒褐色(10YR3/1)シルトを検出面とする。出土遺物はない。地山は黄橙色（10YR7/8）粘土である。

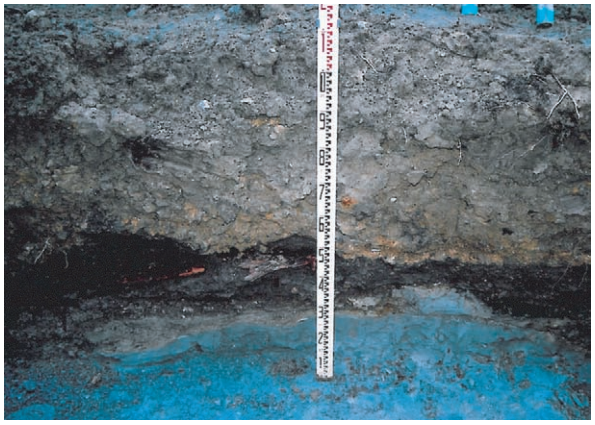


写真106 1A区北壁土層断面（南から）

写真107 1D区遺物出土状況（南から）

写真108 1D区土層断面（南東から）

写真109 1G・H区北壁土層断面（南西から）

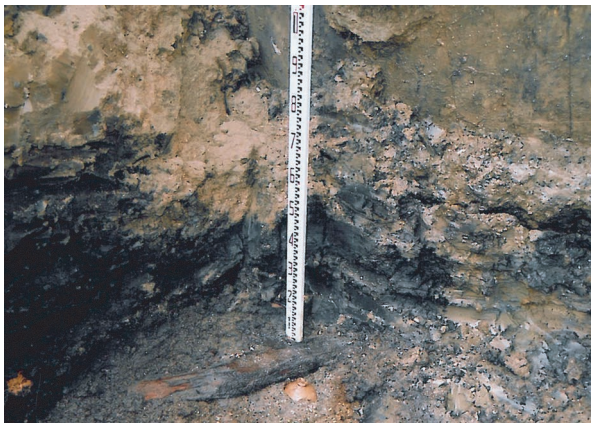


写真110 1G区遺物出土状況（南西から）

写真111 1G・H区北壁土層断面（南西から）

写真112 2区南壁土層断面（北東から）

写真113 3A地点南壁土層断面（北西から）

写真114 4A地点西壁土層断面（東から）

写真115 4B地点北壁土層断面（南東から）

写真116 3C地点南壁土層断面（北東から）

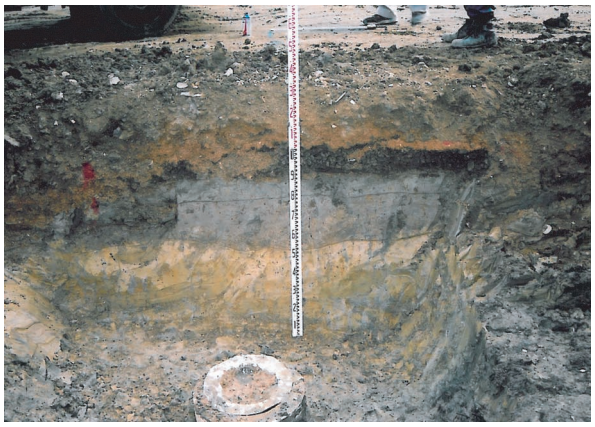


写真117 3D地点南壁土層断面（北から）

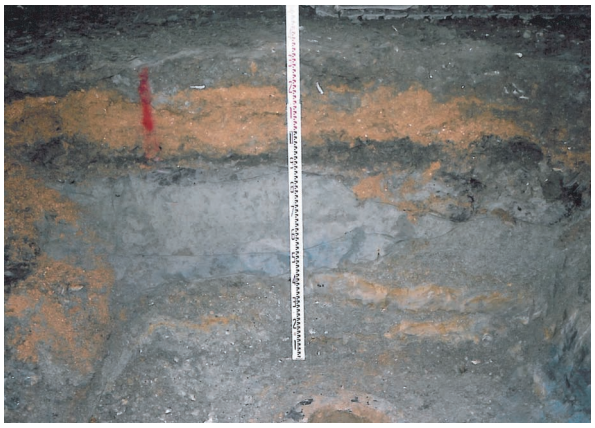


写真118 3E地点南壁土層断面（北から）

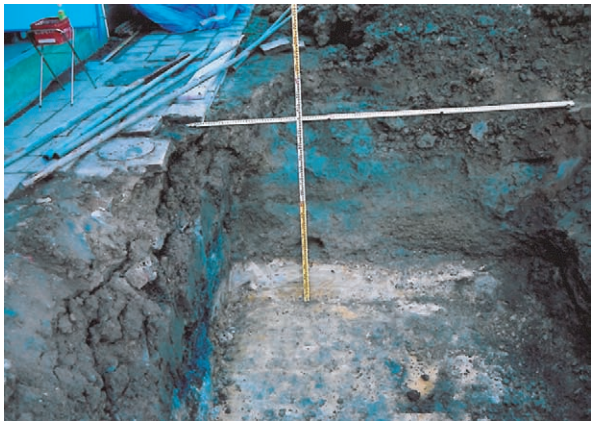


写真119 5A地点西壁土層断面（東から）

写真120 5B地点西壁土層断面（東から）

写真121 5C地点南壁土層断面（北から）

4C地点では、現地表下約112㎝でにぶい黄橙色（10YR7/3）シルトの地山を検出面として、12×22㎝の楕円形のピットを検出した。深さは3㎝で埋土は褐灰色（10YR4/1）シルトであった。出土遺物はなく時期は不明である。

3C地点以東3D地点までは造成土、耕土、黒褐色シルト、地山を確認したが、3E地点では現地表下約50～130㎝で緑灰色（5G6/1）シルト、青灰色（5B6/1）シルト、灰色（10Y6/1）シルト、オリーブ黄色（7.5Y6/3)シルトの堆積を確認した。これらの層から遺物は出土しなかったが、縄文時代以前の河川堆積によるものと考えられる。

（５）5区

渡り廊下の基礎が新設される5A～5F地点で調査を行った。5A地点は現地表下約52㎝までが造成土である。以下の2層は縄文時代以前の河川埋土で、約52～63㎝が青灰色（5B6/1）シルト、約63～127㎝が浅黄色（2.5Y7/3）細砂、粗砂との互層（暗灰黄色（2.5Y4/2）シルトをブロック状に含む）である。その直下、約127㎝～167㎝が地山である黄橙色（10YR8/6）粘土であった。5B地点は5A地点とほぼ同じ層序であった。5C地点は現地表下12㎝までが造成土で、約12～20㎝が3・4区で検出された黒褐色（10YR3/1）シルト、約20～25㎝が遺物包含層の可能性があるオリーブ灰色（2.5GY4/1）シルトである。以下の6層は縄文時代以前の河川埋土で、約25～32㎝が青灰色（5B6/1）シルト、約32～40㎝が緑灰色(5GY6/1)シルト､約40～54㎝がオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト､約54～83㎝が灰黄色(2.5Y7/2)粗砂、約83～119㎝が暗灰黄色（2.5Y5/2、7/2）シルト･粗砂の互層、約119～140㎝が黄褐色（2.5Y5/4）粗砂である。その直下、約140～160㎝が地山である灰白色（2.5Y8/1）粘土であった。5D～5F地点でも現地表下７～37㎝以下で縄文時代以前の河川堆積土を確認し、5E地点では現地表下152㎝、5F地点では134㎝で地山を確認した。なお、5D地点では現地表下164㎝まで掘削したが、地山は確認できなかった。また､5D地点では南壁で河川最上層である灰黄色（2.5Y6/2）シルトを検出面として､幅約130㎝、最深部約21㎝で埋土が黒色（2.5Y2/1）シルトの遺構断面を確認した。

遺物は5A地点で河川埋土から土器片が2点出土したに過ぎない。これらは小片のため時期等は不明である。

（６）遺物

今回の立会調査では1区河川から大量に遺物が出土した。2～5区から出土した遺物は少ない。

1は3A区河川出土の須恵器坏口縁部。2以下は1区河川出土遺物である。2は弥生時代前期の壺頸部。3は弥生時代前期の壺胴部で、貝殻腹縁による綾杉文を施す。4は弥生時代中期の垂下口縁壺の口縁部で1条単位の山形文を施す。5は弥生時代中期の須玖系壺の頸部である。2条のM字状貼付突帯を施す。6は弥生時代中期の広口壺である。口縁部は大きく外反し、頸部に断面三角形の貼付突帯1条を施す。外面はタテハケを施す。口縁部・頸部内面はヨコハケ、胴部内面はタテハケを施す。7、8は弥生時代中期の垂下口縁壺の頸部で、断面三角形の2条の貼付突帯を施す。なお、8は粘土帯接合部分で剥離しているのが確認できる。上部が欠損しているが、剥離面の長さは現状で約7.5㎝を測ることから、やや太い粘土紐を用いていたものと考えられる。また、剥離面にもタテハケが施されている。9は弥生時代中期の跳ね上げ口縁の甕口縁部。10は弥生時代前期～中期の鉢口縁部。外傾接合であることが確認できた。11・12は弥生時代前期～中期の甕底部。13は弥生時代前期～中期の壺もしくは鉢の底部。14・15は弥生時代後期の複合口縁壺の口縁部。14は立ち上がり部分で剥離している。外面にヘラ描による鋸歯文を施す。16は弥生時代終末期の高坏口縁部。外面にタテミガキ、内面に左上がりのミガキを施す。17は弥生時代後期～終末期の高坏脚部。18は弥生時代後期の甕。胴部外面には荒いタテハケ･

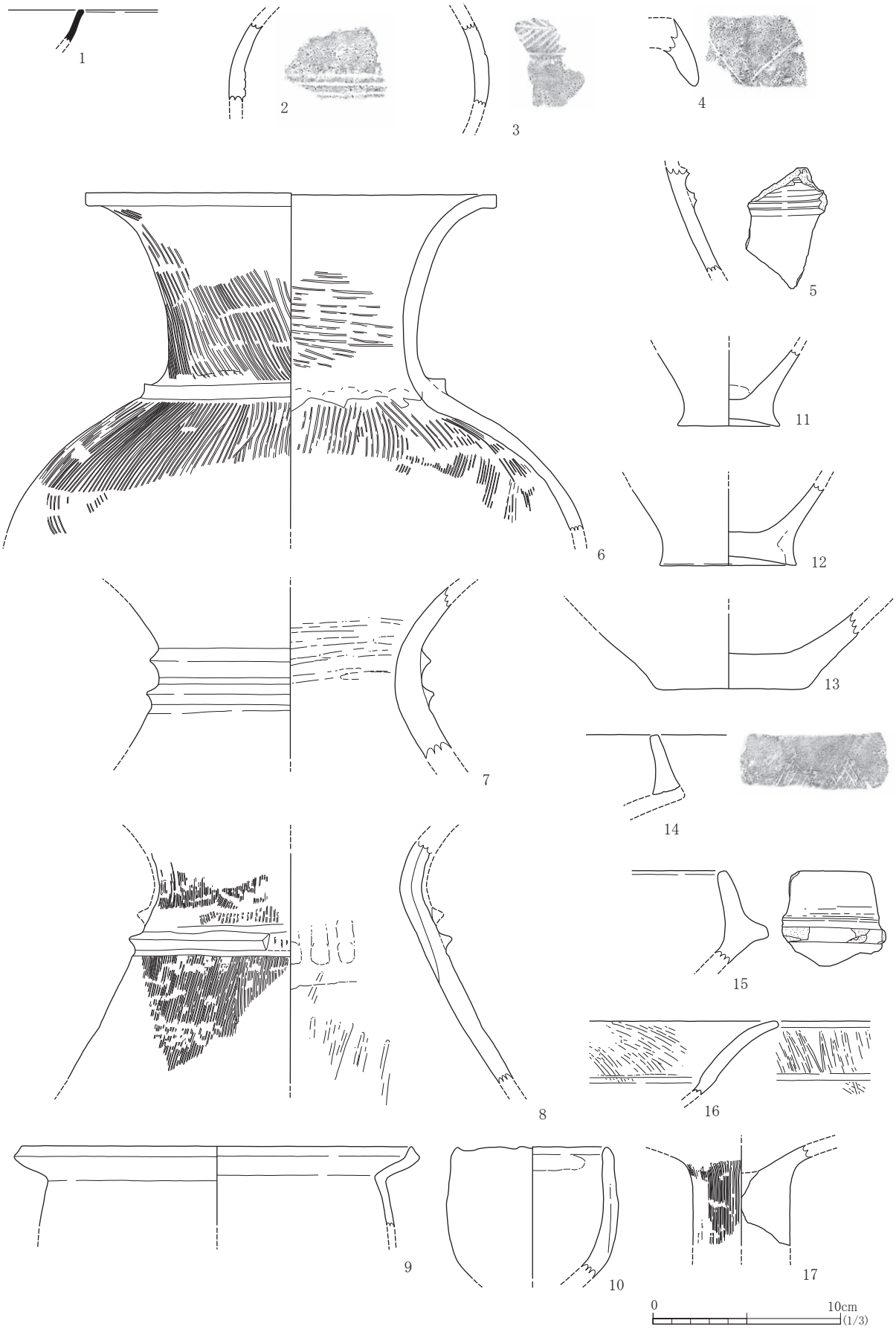


図 46 出土遺物実測図①

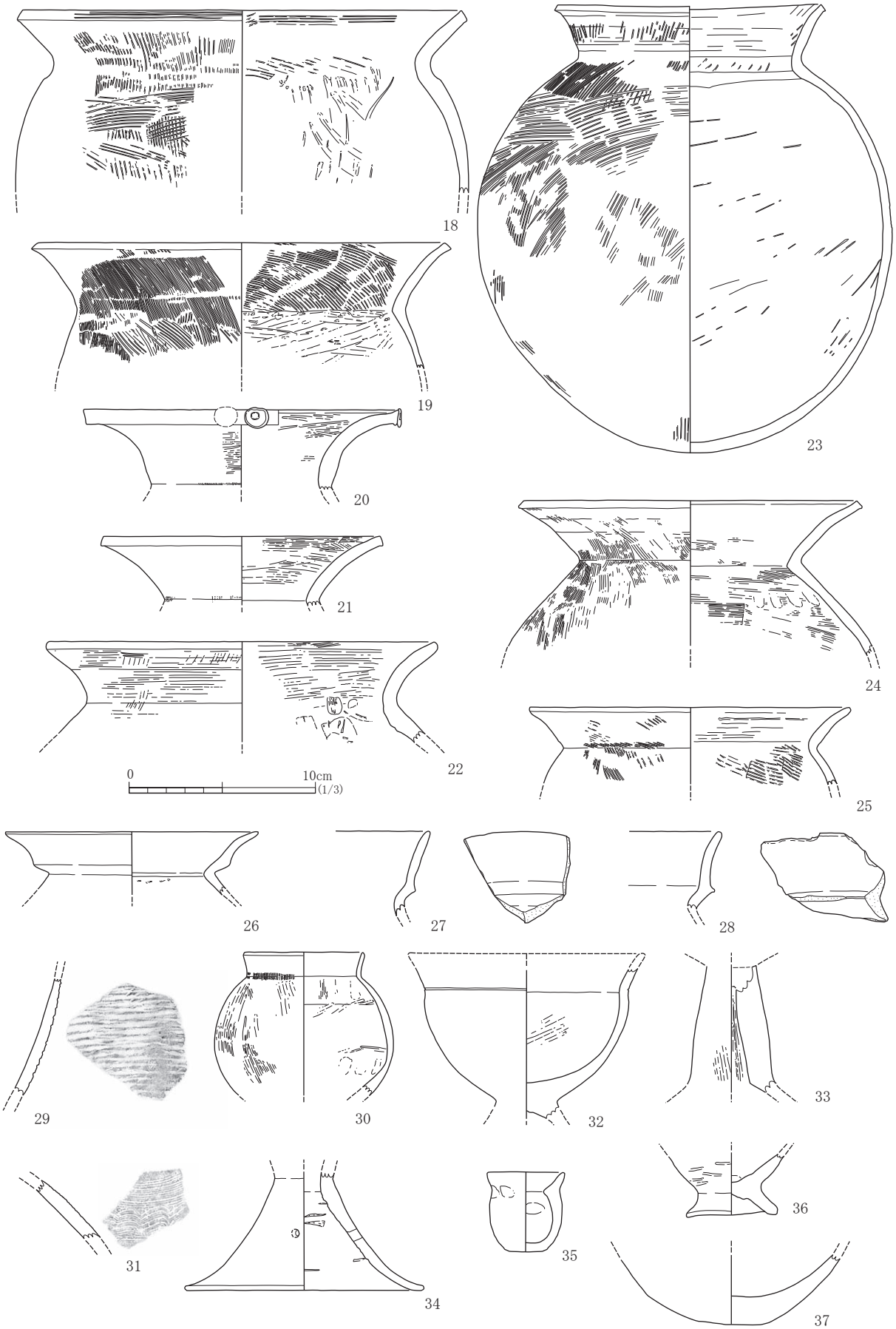


図 47 出土遺物実測図②

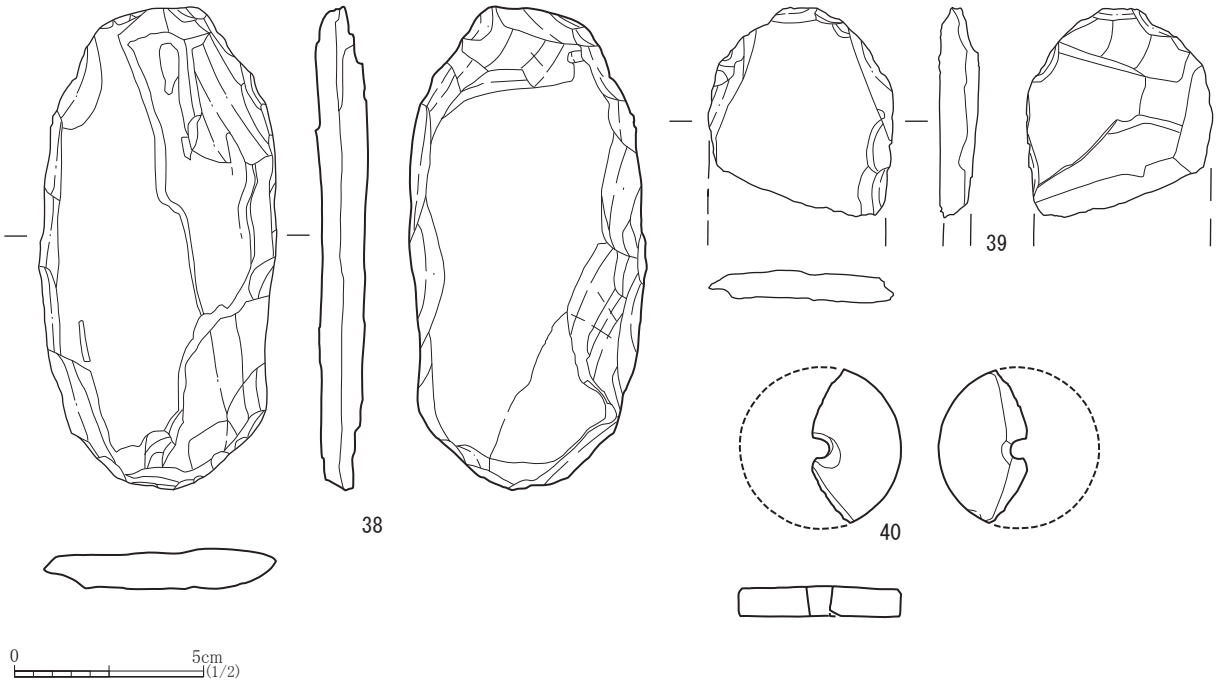
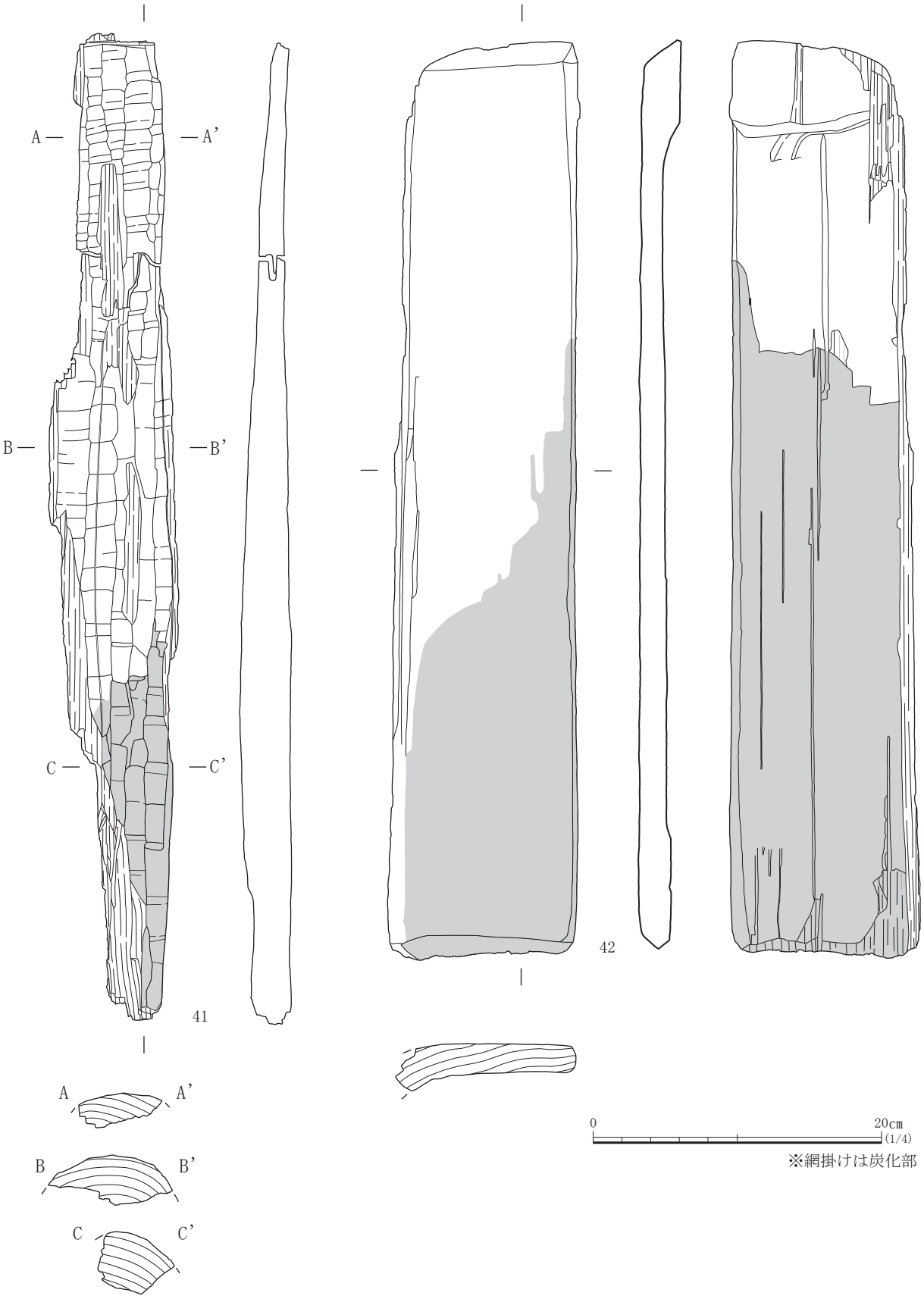


図 48 出土遺物実測図③

ヨコハケ、内面には荒いケズリを施す。19は弥生時代終末期の甕。口縁部は舌状に外反し、外面にはタテハケ、口縁部内面には左上がりのハケ、胴部内面には斜方向のケズリを施す。20、21は土師器壺口縁部。21は口唇部に2個単位の円形浮文を施す。現状では1個のみが残存している。上記を含めて、以下の土師器の時期は全て古墳時代前期に位置づけられる。22は土師器甕口縁部で、内外面に入念なヨコナデ、胴部内面に荒いケズリを施す。23は土師器甕。ほぼ完形に近い状態で出土した。胴部は丸底で下半部は被熱により赤変しており、口縁部外面～胴部上半外面はススが付着している。外面にはタテハケ・斜方向のハケ、胴部内面にはケズリが施される。24、25は土師器甕。24は布留系甕の口縁部を模倣するが、胴部内面にはヨコハケを施す。26～28は弥生時代終末～古墳時代前期の山陰系の甕。いずれも風化が激しい。29は土師器甕胴部。外面に横方向のタタキを施し、ススが付着している。30は土師器短頸壺で球状の胴部に短い口縁部がつく。外面はタテハケの後、細かなタテミガキを施す。31は土師器壺胴部。12条単位の櫛描直線文・波状文を施す。32は弥生時代終末～古墳時代前期の台付鉢。33は土師器高坏脚部。34は土師器高坏脚部で、1個単位の透かし穴を施す。35はミニチュア土器。弥生時代後期～古墳時代前期か。36は弥生時代終末～古墳時代前期の台付鉢底部。胴部外面に横方向のタタキが施される。37は弥生時代終末～古墳時代前期の甕底部。底部はほぼ丸底化しており、底面を中心に被熱している。

38・39は結晶片岩製の打製石斧。38はほぼ完形で正面・裏面に素材面をそのまま残す。39は下半部が欠損している。40は角閃石安山岩製の紡錘車。

41は柱材で、樹種は針葉樹である。中心部は欠損しているため、直径は不明。手斧痕が残存するほか、上端部を1段低く刳込んでいる。また、下端部は被熱により炭化している。42は用途不明の板材で、樹種は針葉樹である。裏面は上端から約6cm以下を1段低く刳込んでいる。正面は約1/2、裏面は約2/3が被熱により炭化している。41･42とも時期は不明。



※網掛けは炭化部

※網掛けは炭化部

図 49 出土遺物実測図④

写真 122 出土遺物①

写真 123 出土遺物②

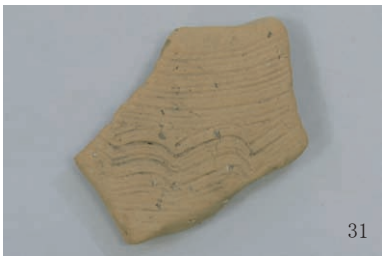


写真 124 出土遺物③

38-1

38-2

39-1

39-2

40-1

40-2

42-3

41-1

41-2

42-1

42-2

写真 125 出土遺物④

表7 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	地区	遺構	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	3A	河川	須恵器　坏	口縁部		①②灰白色(N7/0)	精緻	
2	1B・C	河川	弥生土器　壺	頸部		①②にぶい黄橙色(10YR7/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
3	1D	河川	弥生土器　壺	胴部		①②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
4	1C	河川	弥生土器　壺	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
5	1A	河川	弥生土器　壺	頸部		①灰黄褐色(2.5Y5/2) ②灰黄褐色(10YR6/2)	0.1～3mmの砂粒を少量含む	
6	1D	河川	弥生土器　壺	口縁部～胴部	①(21.9)	①②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
7	1E・F	河川	弥生土器　壺	頸部		①褐灰色(10YR6/1) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
8	1B・C	河川	弥生土器　壺	頸部		①灰黄褐色(2.5Y6/2) ②灰黄褐色(10YR5/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
9	1G・H	河川	弥生土器　甕	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
10	1C	河川	弥生土器　鉢	口縁部～胴部		①黄灰色(2.5Y6/1) ②黄灰色(2.5Y4/1)	0.1～4mmの砂粒を多く含む	
11	1G・H	河川	弥生土器　甕	底部	②(5.4)	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～2mmの砂粒を多く含む	
12	1G・H	河川	弥生土器　甕	底部	②(7.2)	①浅黄色(2.5YR7/3) ②灰白色(2.5Y8/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
13	1B	排土採集	弥生土器壺または鉢	底部	②(8.2)	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②黄灰色(2.5YR5/1)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
14	1G・H	河川	弥生土器　壺	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
15	1C	河川	弥生土器　壺	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
16	1C・D	河川	弥生土器　高坏	坏部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄色(2.5YR6/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
17	1D・E	河川	弥生土器　高坏	脚部		①にぶい橙色(7.5YR7/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
18	1E	河川	弥生土器　甕	口縁部～胴部	①(23.6)	①灰黄色(2.5Y6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
19	1D	河川	弥生土器　甕	口縁部～胴部	①(21.8)	①灰黄色(2.5Y6/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
20	1F	河川	土師器　壺	口縁部	①(17.0)	①橙色(7.5YR7/6) ②浅黄橙色(10YR8/4)	0.1～3mmの砂粒をごく少量含む	
21	1D	河川	土師器　壺	口縁部	①(14.9)	①灰黄色(2.5Y6/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	
22	1B・C	河川	土師器　甕	口縁部～胴部	①(20.6)	①灰白色(2.5Y8/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
23	1D・E	河川	土師器　甕	口縁部～底部	①14.2　③24.1	①黒色(2.5Y2/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1～5mmの砂粒を多く含む	外面スス付着
24	1C・D	河川	土師器　甕	口縁部～胴部	①(17.2)	①灰黄色(2.5Y6/2) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
25	1B・C	河川	土師器　甕	口縁部～胴部	①(17.2)	①灰黄色(2.5Y6/2) ②暗灰黄色(2.5Y5/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
26	1A	河川	土師器　甕	口縁部～胴部	①(13.6)	①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	山陰系か
27	1D	河川	土師器　甕	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	山陰系
28	1F	河川	土師器　甕	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	0.1～1mmの砂粒を多く含む	山陰系
29	1D	河川	土師器　甕	胴部		①褐灰色(10YR5/1) ②灰黄色(2.5Y5/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
30	1E	河川	土師器　壺	口縁部～胴部	①(6.6)	①浅黄橙色(10YR8/4) ②浅黄橙色(7.5YR8/4)	0.1～1mmの砂粒を少量含む	
31	1E・F	排土採集	土師器　壺	胴部		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
32	1G・H	河川	弥生土器または土師器　鉢	口縁部～底部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～6mmの砂粒を多く含む	
33	1G・H	河川	土師器　高坏	脚部		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.1～1mmの砂粒を少量含む	
34	1D	河川	土師器　高坏	脚部	③(9.0)	①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	

遺物番号	地区	層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
35	1E・F	河川	弥生土器または土師器ミニチュア	底部	①(3.9)②(2.2) ③(4.2)	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄橙色(10YR8/4)	0.1～3mmの砂粒を少量含む	
36	1A	河川	弥生土器または土師器　鉢	底部	③4.9	①灰黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1～3mmの砂粒を多く含む	
37	1G・H	河川	弥生土器または土師器　甕	底部		①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②黄灰色(10YR8/3)	0.1～4mmの砂粒を多く含む	

表8 出土遺物(石器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
38	1H	河川	打製石斧	全長12.8　最大幅6.3 最大厚1.4	147.2	結晶片岩	
39	1G・H	河川	打製石斧	最大長5.5　最大幅4.9 最大厚1.1	35.72	結晶片岩	
40	1D	河川	紡錘車	全長2.8　最大幅1.2 最大厚0.8	8.73	角閃石安山岩	

表9 出土遺物(木器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	地区	遺構	器種	法量(cm)	材質	備考
41	1A	河川	柱	最大長103.7　最大幅13.3 最大厚6.2	針葉樹	一部炭化している
42	1A	河川	板材か	最大長64.3　最大幅13.2 最大厚2.8	針葉樹	一部炭化している

（7）小結

今回の立会調査では、本発掘調査の成果と合わせて、これまで状況が不明確であった吉田構内中心部の埋蔵文化財の分布を探る上で大きな成果を得ることができた。1区では本発掘調査で検出した河川と一連と考えられる河川を検出し、弥生時代前期～古墳時代前期の遺物が多量に出土した。時期は不明であるが、柱材や板材などの木製品が出土したことも注目されよう。遺物は本発掘調査出土遺物と比較して、残存状況が良好な物が多いことからも主に調査区北側に位置する丘陵部から廃棄されたものと推測される。2区では予備発掘調査で検出した弥生時代中期後半の溝の延長部分を検出し、3・4区では時期は定かでないが溝、河川を検出した。また、3区の東端、5区では縄文時代と推測される河川を検出した。この河川は本発掘調査で確認された縄文時代河川と同一である可能性が高く、メディア基盤センター敷地[註3]で検出された縄文時代河川に連なると推測される。以上により、調査区周辺においては今後の地下掘削工事においても埋蔵文化財の保護に十分な注意が必要である。

［註］

1）田畑直彦(2007)「第1章第2節5教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴う予備発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口

2)前節参照

3)河村吉行(1988)「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口

６．資料館（東亜経済研究所）新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区　吉田構内L－20・21区

調査面積　約100㎡

調査期間　平成18年12月5日～平成19年1月10日

調査担当　田畑直彦

調査結果

（１）調査の経過

経済学部商品資料館北側の空閑地に資料館（東亜経済研究所）新営工事が実施されることを受け（発掘調査を要する工事計画として、平成18年6月6日に埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認）、工事予定地の予備発掘調査を実施することとなった。

平成5年に実施された商品資料館敷地における試掘調査では、南北に長い調査区が設定され、古墳時代以前と考えられる2条の河川が検出されている。[註1] 今回も調査区設定にあたっては、南北に長い調査区を設定した。Ａ調査区は幅2m、長さ28m、Ｂ調査区は幅2m、長さ22mである。Ａ調査区は商品資料館敷地のＣ調査区の約9m北側、B調査区は商品資料館敷地のB調査区の約2.5m北側に位置する。調査面積は約100㎡である。なお、調査前まで調査区内には盛土が施され、多数の樹木が植栽されていたため、これらを除去した後に調査区の掘削を行った。

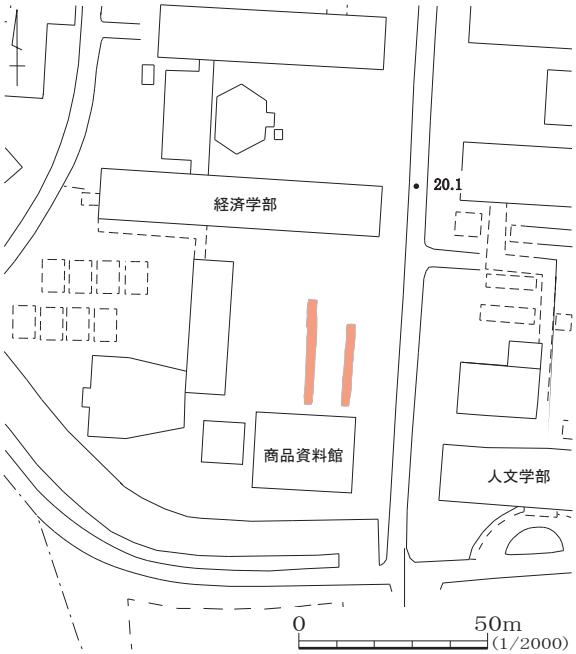


図50 調査区位置図

写真 126 調査前全景（北から）

写真 127 調査区全景（北から）

（２）基本層序

調査区の基本層序は下記の通りである。

第1層　造成土
第2層　旧水田耕土
第3層　旧水田床土
第4層　旧水田床土ないし耕土
第5層　河川堆積土
第6層　地山

Ａ調査区では、統合移転時の造成土と考えられる第1層の下に第3層・第4層があり、第2層は削平されている。Ｂ調査区では第2層が比較的良好に残存していた。第4層は統合移転直前まで存在した水田以前の耕作に伴う土層と考えられる。出土遺物がないため時期は不明であるが、近世以降の可能性が高い。

第5層はＡ調査区でのみ確認した。河川堆積土と考えられるが、出土遺物がないため時期は不明である。第5層上面の検出標高は約19.7mで、Ａ調査区北端における層厚は約0.2m、中央部における層厚は約0.3m、南端における層厚は約0.8mと北から南にかけて厚くなる。河川床面となる第6層上面の標

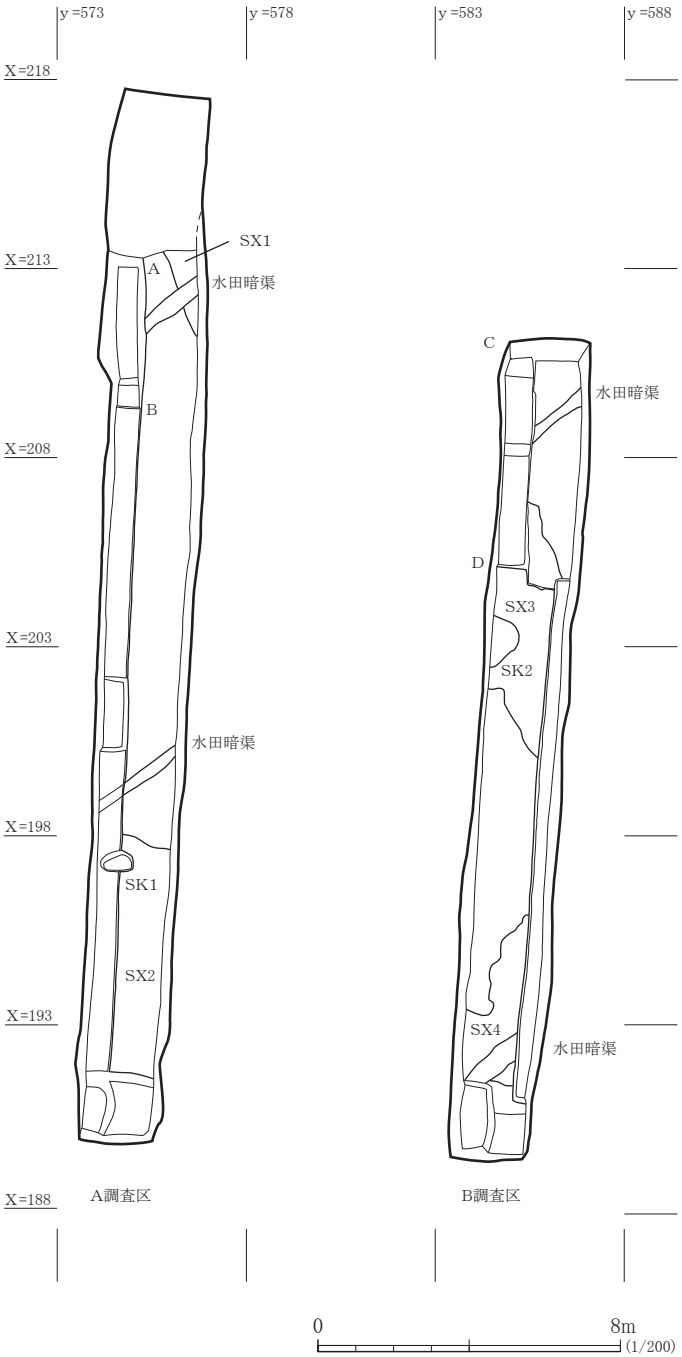


図 51 調査区平面図

写真 128 A調査区全景（北東から）

写真 129 B調査区全景（北西から）

高はA調査区北端部で、約19.3m、A調査区中央部で約19.3m、A調査区南端部で18.9mである。この河川は商品資料館敷地E調査区で検出された河川と同一である可能性が高い。なお、B調査区では標高19.7mで検出されるのはいずれも第4層であることから、第5層は水田耕作に伴う造成により削平されたと考えられる。

第6層は地山でいずれも硬くしまりのある粘土・シルト・砂層の互層となっており、河川堆積に由来する土層である。第6層上面の検出標高はB調査区北部で19.5m、B調査区南部で約19.8mである。商品資料館敷地の調査成果でも指摘されているように、自然地形は東から西へ、また南から北へ傾斜しており、河川は南東から北西方向に流れていたと考えられる。

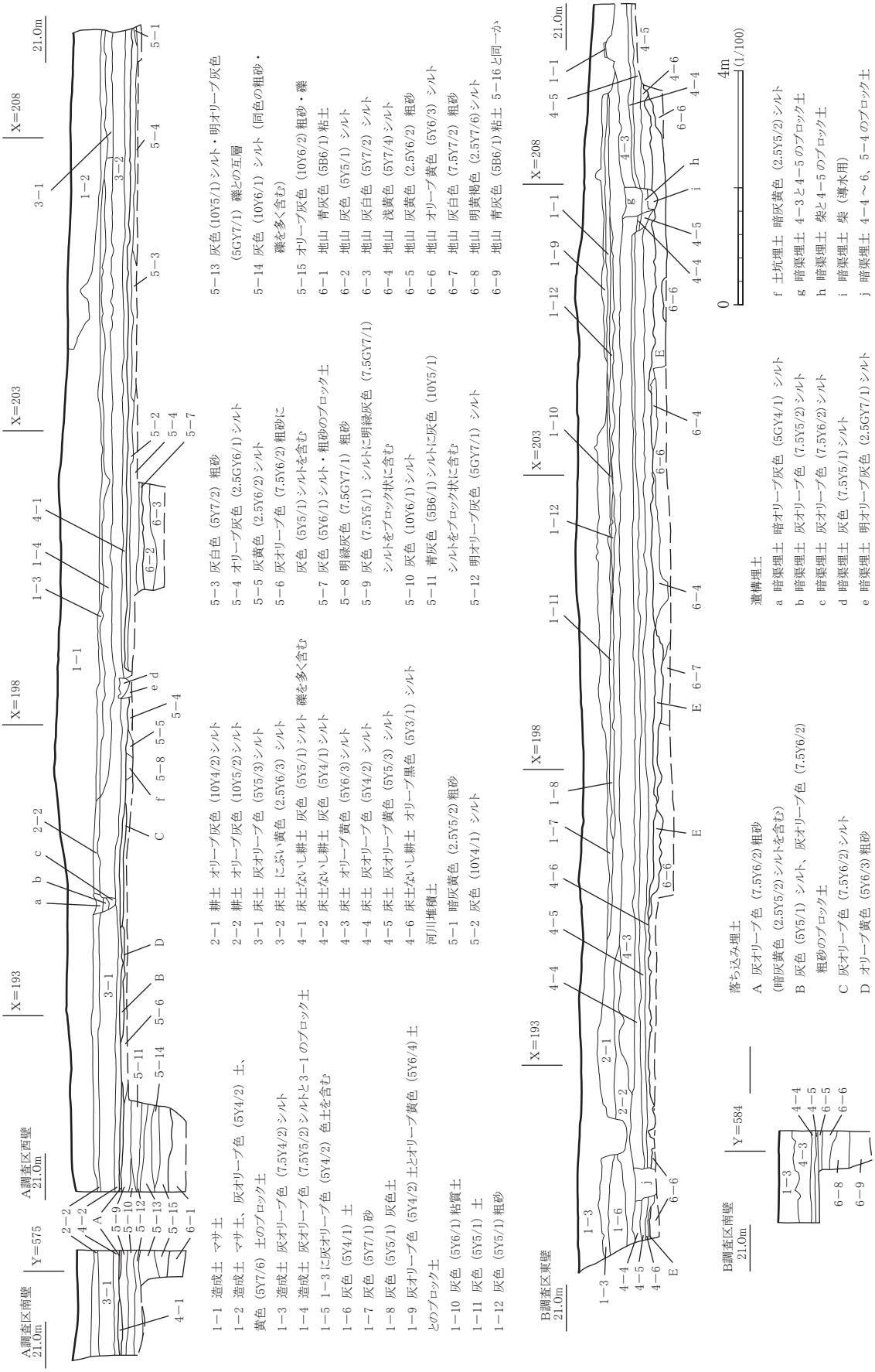
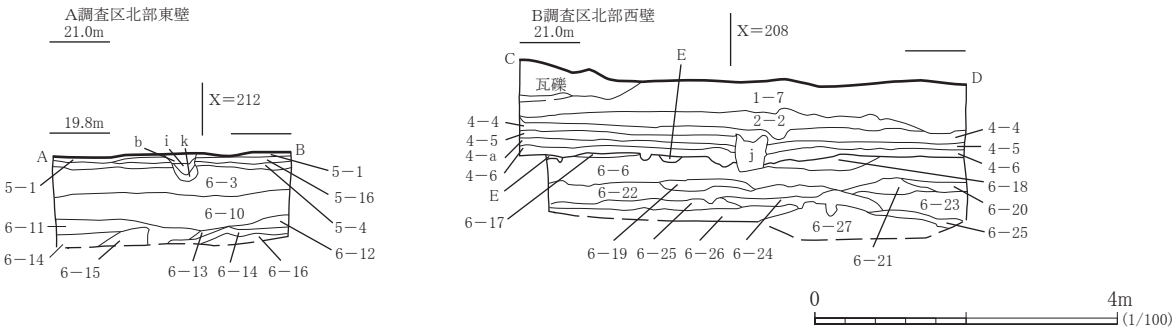


図 52 調査区土層断面図①



1−7 造成土 灰色（5Y7/1）粗砂
2−2 耕土 オリーブ灰色（10Y4/2）シルト
4−4 床土 灰オリーブ色（5Y4/2）シルト
4−5 床土 灰オリーブ色（5Y5/3）シルト
4−6 床土ないし耕土 オリーブ黒色（5Y3/1）シルト
4−a 床土 4−4と同じ
河川堆積土
5−1 暗灰黄色（2.5Y5/2）粗砂
5−4 オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
5−16 灰黄色（2.5Y6/2）シルト
6−3 地山 灰白色（5Y7/2）シルト
6−6 地山 オリーブ黄色（5Y6/3）シルト
6−10 地山 明オリーブ灰色（5GY7/1）シルト 粗砂（礫を多く含む）
6−11 地山 青灰色（5G5/1）シルトに灰色（N5/0）シルトを斑状に含む
6−12 地山 明オリーブ灰色（5GY7/1）粗砂（礫を多く含む）
6−13 地山 5−cと同じ 5−cより粗砂を多く含む
6−14 地山 青灰色（5G5/1）シルトに灰色（N5/0）シルト、
明黄褐色（2.5Y7/6）シルトをブロック状に含む
6−15 地山 オリーブ黄色（7.5Y6/3）礫
6−16 地山 オリーブ灰色（10Y6/2）礫
6−17 地山 浅黄色（2.5Y7/4）シルト
6−18 地山 灰白色（7.5Y7/1）粗砂
6−19 地山 明オリーブ灰色（5GY7/1）シルト
6−20 地山 明オリーブ灰色（2.5GY7/1）シルト
6−21 地山 オリーブ灰色（5GY6/1）礫（同色のシルトを含む）
6−22 地山 オリーブ灰色（5GY6/1）礫
6−23 地山 明青灰色（5B7/1）粘土
6−24 地山 明オリーブ灰色（2.5GY7/1）粗砂に明青灰色（5B7/1）細砂を含む
6−25 地山 オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト
6−26 地山 明青灰色（10BG7/1）粗砂
6−27 地山 浅黄色（2.5Y7/4）・明黄褐色（2.5Y7/4）礫
遺構埋土
b 暗渠埋土 灰オリーブ色（7.5Y5/2）シルト
i 暗渠埋土 柴（導水用）
j 暗渠埋土 4−4、6、5−4のブロック土
k 暗渠埋土 灰色（5Y6/1）シルトと5−18のブロック土

図 53 調査区土層断面図②

（3）遺構・遺物

第5層上面で時期不明の落ち込み4基と土壙2基、統合移転前の水田暗渠4条を検出した。落ち込みのうち、SX−1・2は灰オリーブ色・灰色・オリーブ黄色の粗砂・シルトが埋土である。いずれも部分的な検出にとどまったため、幅は不明である。このうち掘削を行ったSX−2の検出標高は約19.7mで、深さは削平を受けているため、約0.1mであった。このため遺構の性格が不明であるが、恐らく本来は河川であった可能性が高い。商品資料館敷地で検出された河川も幾度もの流路が切り合っていたことが指摘されているが、今回調査区でも同様な状況であったと推測される。

SX−3〜5の検出標高は約19.6mで、最深部の深さは0.3m以上である。また、SX-3は幅約3.2mである。埋土は旧水田床土ないし耕土と考えられる4−6層：オリーブ黒色シルトと地山である6−6層：オリーブ黄色（5Y6/3）シルトとのブロック土である。このため、整地等、耕作に伴う遺構である可能性も考えられる。SX−1〜5からは遺物は出土しなかった。

土壙はA調査区でSK−1、Ｂ調査区でＢ調査区でSK−2を検出した。共に遺物は出土しなかった。SK−1は直径約0.88m、短径約0.48m、深さ約0.1mで、埋土は灰褐色（7.5YR4/2）シルトであった。近代以降の遺構と考えられる。SK−2は一部を検出したのみで規模は不明である。埋土は4−5層と同じ灰オリーブ黄色（5Y5/3）シルトであり、水田耕作に伴う遺構と考えられる。掘削は行っていない。

水田暗渠は検出した4条全てが北東−南西方向に掘削されており、商品資料館敷地で検出された水田暗渠とも方向が一致する。

写真130　Ａ調査区東壁（Ａ－Ｂ）土層断面（西から）

写真131　Ａ調査区南西隅土層断面（北東から）

写真132　Ｂ調査区北西隅土層断面（南東から）

写真133　Ｂ調査区東壁土層断面（北西から）

（４）小結

平成6年度に発掘調査が行われた商品資料館敷地では、今回調査区とほぼ同じ標高で東－西方向に流れていた河川が2条検出され、埋土からは土器片が1点出土している。また、今回調査区から約50m西に位置する経済学部講義棟敷地では、「小規模な沼沢地あるいは谷状のやや落ち込んだ地形」が検出されており、埋土から土器が少量出土している[註2]。この講義棟の南東側に隣接する経済学部プレハブ校舎新営に伴う試掘調査でも河川堆積土から縄文時代後・晩期の土器、古墳時代土師器、須恵器が出土している[註3]。しかし、今回の調査で検出した遺構・河川から遺物は出土しなかった。また、A調査区で3ヶ所、Ｂ調査区で2ヶ所において深掘りを行って第6層を精査したが、遺物は全く出土しなかった。

ただし、上記の河川についてはまだ不明な点が多く、調査区周辺における今後の地下掘削工事においては埋蔵文化財の保護と遺存状況に十分配慮する必要がある。

［註］

1）豆谷和之（1994）「第4章第1節　経済学部商品資料館新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅣ』,山口

2）河村吉行（1992）「第3章　第1節吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅣ』,山口

3）田畑直彦（2004）「第8章5　平成13年度山口大学構内遺跡調査の概要」, 山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅥ・ＸⅦ』,山口

7．プレハブ倉庫移設工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内I－16区

調査面積　約29㎡

調査期間　平成18年5月11日

調査担当　田畑直彦

調査結果　教育総合研究センター改修Ⅱ期工事に伴いプレハブ倉庫の移設が計画された。工事は同センター東端にあるプレハブ倉庫を100m離れた北西側へ移設するというものである。調査区は平成17年度に調査を行った教育総合研究センター改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査区[註1]の東隣にあたり、遺構・遺物の存在が予想されたため、立会調査を行った。

調査の結果、掘削深度は現地表下約30㎝であったため造成土の範囲内にとどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。

今回の工事では埋蔵文化財は確認されなかったが、上記の平成17年度の調査から、調査区の現地表下1m前後で埋蔵文化財が存在する可能性が高く、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

［註］

1）田畑直彦（2007）「第1章第2節1 教育総合研究センター改修Ⅰ期工事に伴う予備発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』,山口

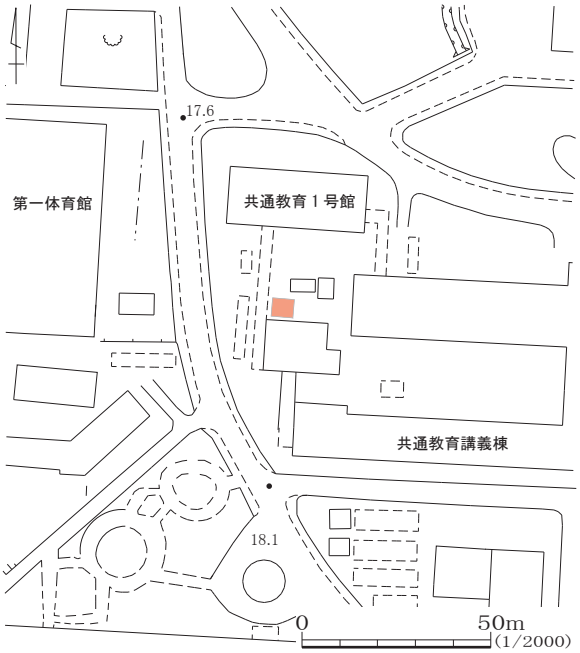


図54 調査区位置図

写真 134 調査区全景（西から）

写真 135 調査区北東隅土層断面（南西から）

８.第一学生食堂改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内J－20区

調査期間　平成18年5月30日、7月3日

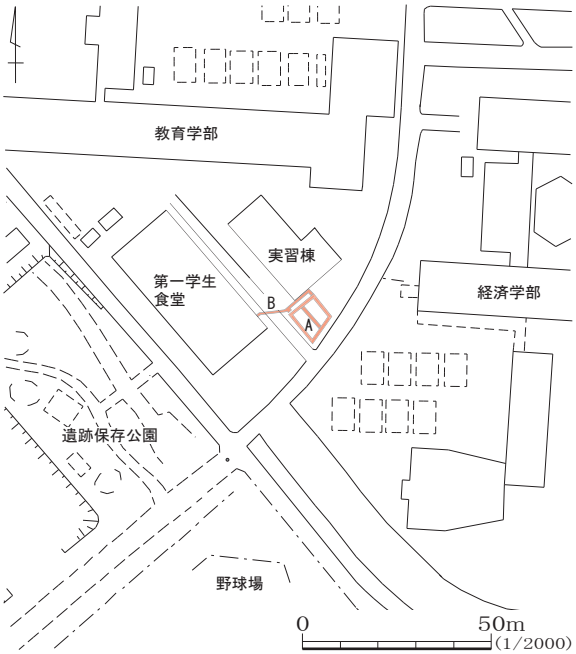


図 55　調査区位置図

写真 136 A地点土層断面（南西から）

写真 137 B 地点土層断面（北から）

調査面積　約75㎡

調査担当　田畑直彦

調査結果　第一学生食堂の改修工事が計画された。工事は食堂内の売店を撤去して、食堂スペースを拡張し、教育学部美術科実習棟の南側隣接地に売店用のプレハブ建物を新設するというものである。

第一学生食堂拡張工事に伴い、昭和43年に吉田遺跡調査団によって実施された発掘調査では、「狭い小川跡や湿地があって、弥生式土器や土師器が数多く流れ込んでいた」と報告されている[註1]。また、昭和56年に実施した同実習棟新営工事に伴って実施された発掘調査では、河川、溝、土坑、柱穴等が検出され、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器などが出土している[註2]。このため調査区内においては、遺構・遺物の存在はほぼ確実と推測されたが、掘削が小規模であるため立会調査を行うこととなった。

調査の結果、プレハブ建物予定地（A地点）では掘削が現地表下約20～50㎝、配管工事に伴う掘削は現地表下約60～110㎝であったが、大半が造成土の範囲内であった。しかし、A地点では現地表下35㎝で層厚14㎝の黒褐色（2.5Y3/1)シルト、その下位で、層厚14㎝のオリーブ灰色（2.5GY6/1)シルトを検出した。これらは河川ないし溝の埋土と考えられる。黒褐色シルトからは土器片が1点出土した。

今回の調査で確認された埋蔵文化財は僅かであったが、今後とも埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

［註］

1）小野忠熙（1970）「山口大学構内 吉田遺跡の性格」,山口大学（編）『学園だより』,山口

2）河村吉行（1982）「第3章第4節教育学部構内J－19・20区の発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』,山口

９.図書館前広場環境整備工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内L－17・18区

調査面積　約55㎡

調査期間　平成18年7月7日、8月9日

調査担当　田畑直彦

調査結果　工事は図書館前広場の人工池を埋め立てて広場として整備するとともに、広場の北西側に階段（Ａ地点）、南西側（Ｂ地点）にスロープを造成するものである。また、これに付随して案内板を移設する工事が行われた（Ｃ地点）。

人工池並びにこれに隣接する図書館敷地では、いずれも工事にあたって発掘調査は行われておらず、図書館前広場における地下の状況は不明確であったため、立会調査を行った。

調査の結果、Ａ地点では現地表下約120㎝、Ｂ地点では約68㎝、Ｃ地点では約53㎝まで掘削が行われたが、いずれも造成土の範囲内にとどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。

また、過去の工事図面から図書館前広場では人工池の造成に伴い、大規模な掘削が行われたことが判明している。このため、埋蔵文化財が存在したとしても相当な破壊を受けていることが推測される。ただし、農学部連合獣医学科棟[註1]、メディア基盤センター棟[註2]（旧教養部複合棟）で検出されている縄文時代河川の延長部分が存在する可能性もあり、今後とも引き続き埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

［註］

1）豆谷和之（1994）「第2章　吉田農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』,山口

2）河村吉行（1988）「第3章　吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』,山口

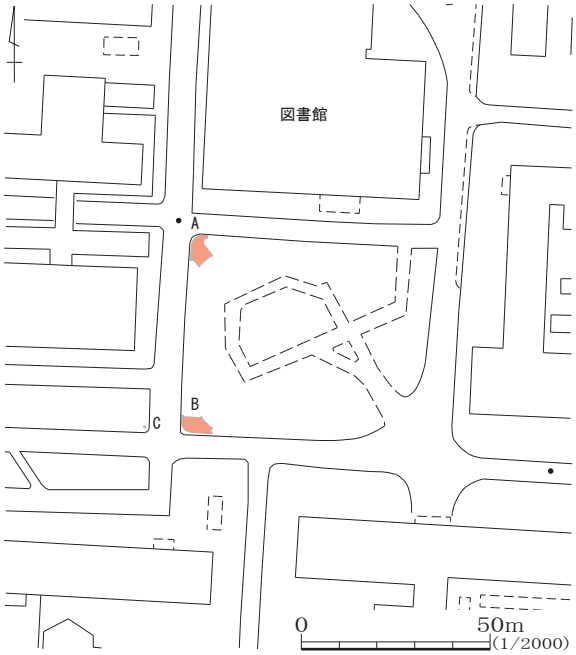


図56 調査区位置図

写真 138 Ａ地点全景（北から）

写真 139 Ｂ地点土層断面（南東から）

10. プレハブ校舎新営工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内F－14・15、G－15区

調査期間　平成18年7月21日、8月7日

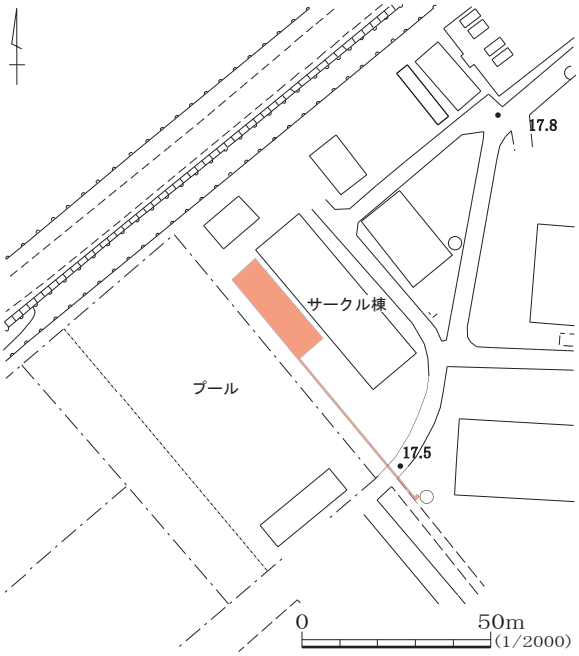


図 57　調査区位置図

写真 140　調査区北部土層断面（南西から）

写真 141　調査区東壁土層断面（北西から）

調査面積　約400㎡

調査担当　田畑直彦

調査結果　教育総合研究センター改修工事に伴い、工事の間講義室が不足するため、サークル棟とプールの間にプレハブ講義棟（改修工事終了後はサークル棟として使用）の新営工事が計画された。この場所は盛土により西側のグラウンドよりも約１ｍ高い。このため、工事による埋蔵文化財への影響は極めて少ないものと推測されたが、掘削範囲が広範囲に及ぶため、立会調査を行うこととなった。工事による掘削は建物の基礎部分が現地表下約60㎝、配管・桝設置工事による掘削が現地表下約75～105㎝であった。

調査の結果、掘削範囲内はすべて造成土の範囲内であり、埋蔵文化財への支障はなかった。調査区の西側では、平成7年度に公共下水道布設に伴う発掘調査で弥生時代前期の遺構が多数検出されている[註1]。調査区内においてもこれらと一連の遺構が分布している可能性があるため、埋蔵文化財の取り扱いには十分な注意が必要である。

［註］

1）田畑直彦（2004）「第８章　1　平成7年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＶ・ＸＶI』,山口

11. 人文学部外灯用電源敷設工事に伴う立会調査

図 58　調査区位置図

写真 142　調査風景（北から）

調査地区　吉田構内M-20区

調査面積　約6㎡

調査期間　平成19年２月19日

調査担当　横山成己

調査結果　人文学部と理学部校舎の中間に位置する外灯に電源施設を敷設する工事計画が立案された。掘削深度は現地表下40㎝と浅く、開発範囲も狭いものであったが、埋蔵文化財資料館専門委員会により立会調査が必要と判断された。

当開発地周辺では、昭和58年に理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査[註1]が実施されている。今回の開発地と位置的に交錯するＦ区の調査成果では、地表下に旧耕土と地山を確認したと報告されているが、旧耕土以下地山までの層位に不明確な点があるため、工事掘削時に立会調査を行った。

調査の結果、現地表下40㎝までは表土及び造成土であることが確認されるに止まった。本来であれば部分的に深掘りを行い、造成土以下の層位を確認すべき事案であるが、工事自体が重機を用いずの掘削であることからこれを断念せざるを得なかった。今後、調査区周囲に開発の手が及ぶ場合は旧耕土以下の層位の確認が必要と考える。

［註］

1）河村吉行（1985）「第９章昭和58年度山口大学構内の立会調査,第１節吉田構内の立会調査,１理学部大学院校舎新営および付随工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

12. テニスコートフェンス改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内Ｂ-17、Ｃ-17、Ｃ-18区

調査面積　約10㎡

調査期間　平成19年３月13・14日

調査担当　横山成己

調査結果　吉田構内西端部に位置するテニスコートの防球フェンス改修工事が計画されたことを受け、工事掘削時に立会調査を実施した。

当該地周辺では過去に本発掘調査が実施されておらず、地下の状況に不明確な点が多い。立会調査の記録を辿ると、平成６年に実施されたテニスコート改修工事に伴う立会調査[註1]並びに公共下水道接続工事（汚水管雨水排水施設設置）に伴う立会調査が数少ない調査成果と言える。報告によると、テニスコート敷地ではその南半部において現地表下0.5～0.8mで緑灰色粘土もしくは暗褐色粘土の地山が検出されており、地山上には水田耕土が0.1～0.4mの厚みで残存すると記述されている。また、テニスコートの南東に接する陸上競技場の西端部では、現地表下約1.6mにおいて旧河川の堆積層が確認されている。この堆積層からは弥生時代から古墳時代にかけての土器が出土しており、河川の所属時期を把握する上での貴重な資料となっている。

今回の開発工事では、テニスコート南西側道路沿い10ヶ所（Ａ～Ｊ地点）に、フェンスの支柱埋設のため、各所直径約0.8mの範囲で、現地表下約3.2mの深度までボーリング掘削が行われた。立会調査では、掘削範囲が狭小であるため、手の届く範囲での断面精査と土層の肉眼観察しか実施できなかったが、以下にその成果を記す。

調査地点の標高は約17mを測る。Ａ地点では、現地表下約0.6mまでは確実に造成土であることを確認しており、以下の堆積状況については不明であるが、九田川の護岸工事に伴う埋土と推測される。Ｂ・Ｃ地点では現地表下0.9mまでは造成土であり、以下は不明。ただし、ボウリング掘削により排出された土を観察すると深部には地山が存在するものと思われる。Ｄ地点では現地表下0.75mまでが造成土であったが、下位に約0.15mの厚みの旧耕土、0.05mの厚みの旧床土を確認することができた。床土以下は断面精査が行えなかったが、青

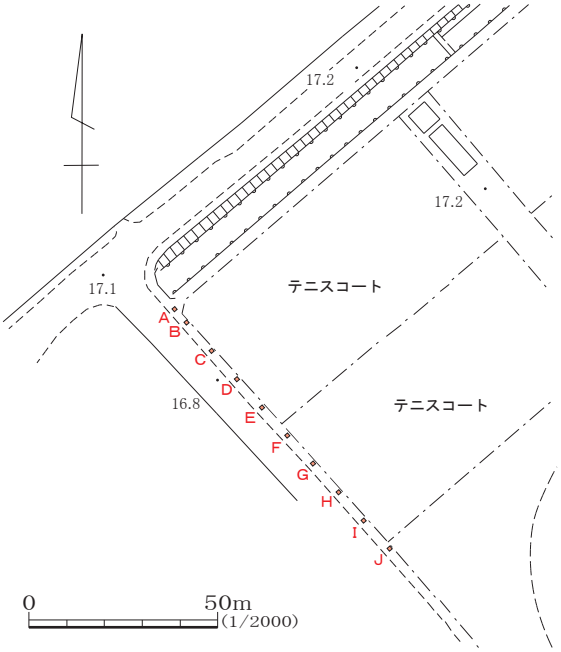


図 59　調査区位置図

写真 143　Ｄ地点土層断面（南西から）

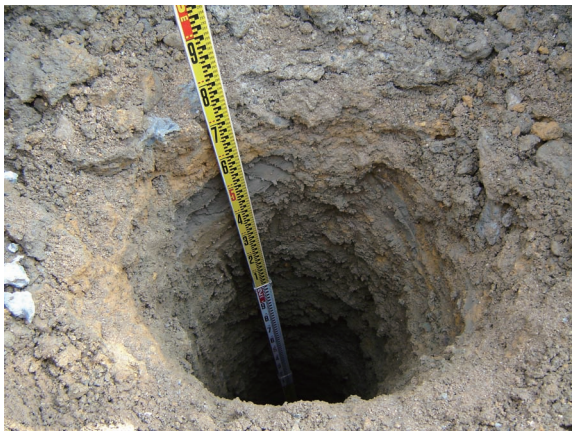


写真 144　Ｇ地点土層断面（南西から）

灰色粘土が排出されていることから、テニスコート南半部で確認されている層位と同じ状況と推察される。Ｅ地点もほぼ同様であり、現地表下0.7mまでが造成土、その下位に灰オリーブ粘質土を確認した。Ｆ地点では現地表下0.95mまでが造成土、下位に0.13m厚の旧耕土、0.05m厚の旧床土、さらに遺物包含層の可能性を含む0.15m厚以上の黒褐色粘土層を確認した。Ｇ地点では現地表下0.85mまでが造成土、下位に0.15m厚の旧耕土、0.1m厚の旧床土を確認した。床土以下の層序については、排出土の土質から上部に青灰色粘土が、下部に拳大の川原石を含む砂礫層が堆積しているものと考えられる。Ｈ地点では現地表下1mまで造成土である。下位に旧耕土および旧床土が存するようであり、現地表下1.2m付近から青灰色粘土層に変化しているものと思われるが詳細は不明である。Ｉ地点は現地表下0.4mまでが造成土、以下は灰オリーブ弱粘質土、さらに最深部付近では砂礫層に変化しているようである。Ｊ地点は現地表下1.2mまでが側溝の堀方埋土であり、以下は灰オリーブ粘性砂質土であった。

以上、各地点の調査成果を記した。排出土中に遺物は確認できなかったが、河川堆積土もしくは遺物包含層の可能性を残す堆積層も確認されており、周辺での開発工事計画には注意が必要である。

［註］

1）豆谷和之・村田裕一（2000）「第５章平成６年度山口大学構内の立会調査,第１節吉田構内の立会調査,３テニスコート改修工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅣ』,山口

2）豆谷和之・村田裕一（2000）「第５章平成６年度山口大学構内の立会調査,第１節吉田構内の立会調査,17公共下水道接続工事（汚水管雨水排水施設設置）に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅣ』,山口

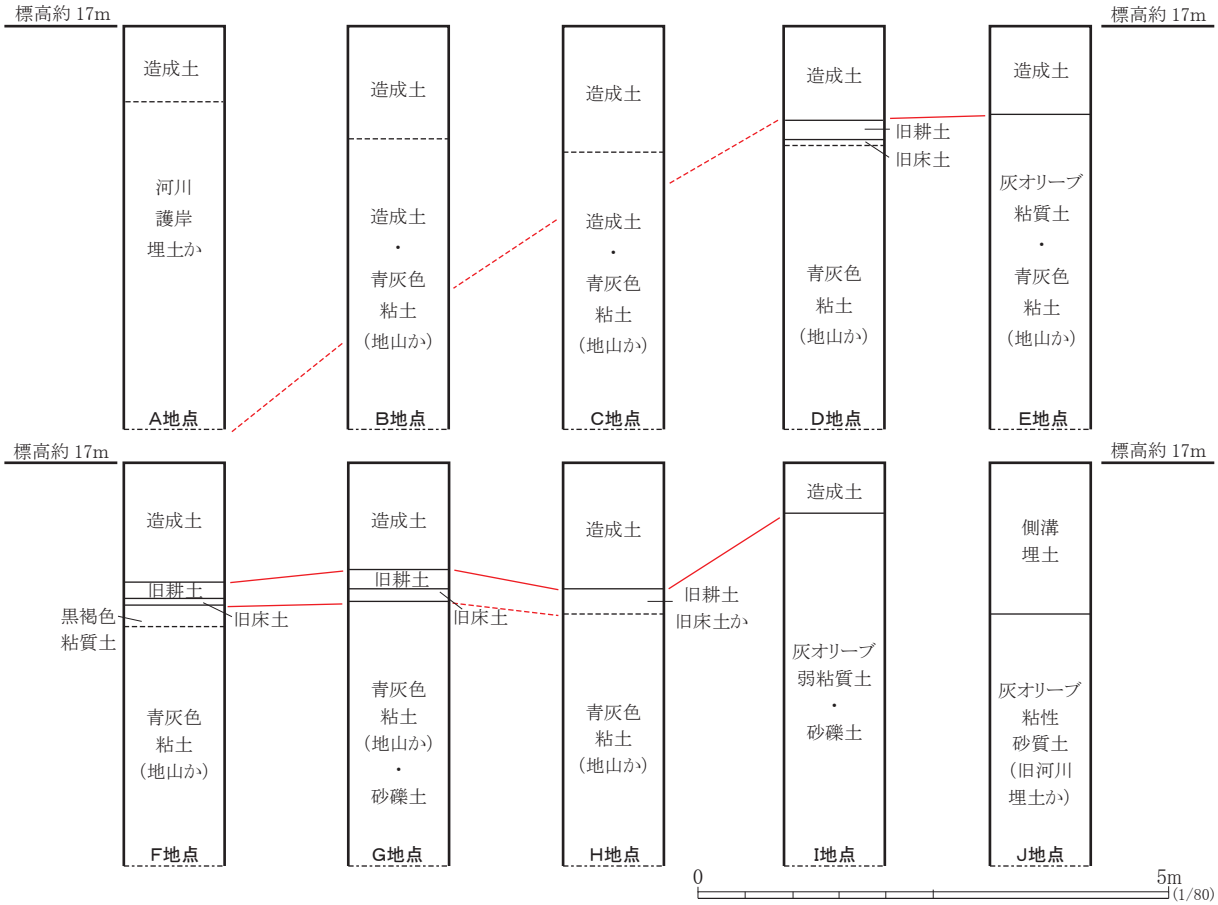


図 60　各地点土層断面模式図